

筒 江 遺 跡 群 I

—和田山工業団地建設に伴う発掘調査報告書—

1 9 8 5 . 3

兵 庫 県 教 育 委 員 会

例 言

1. 本書は、兵庫県朝来郡和田山町筒江に所在する片引遺跡・筒江中山古墳群・筒江中山遺跡の調査報告書である。
2. 発掘調査は（財）農村整備公社の委託を受けて昭和53年度から昭和56年度にかけて、4次にわたる調査を実施した。1・2次調査は兵庫県教育委員会が、3・4次は和田山町教育委員会が調査主体となって行った。
3. 整理作業等の都合で、本書は全ての遺跡の報告を行えなかったので、書名を「筒江遺跡群Ⅰ」とした。
4. 本書で示す標高値は3級水準点から移した標高（T. P.）で、方位は磁北である。
5. 整理作業は、昭和59年度に兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所・朝来郡広域行政事務組合で実施した。
6. 遺構写真は、調査員が撮影した。図版1は国土地理院撮影のものである。
7. 遺物の写真は、森 昭氏に依頼し撮影して戴いた。但し、木器については渡辺が撮影した。
8. 執筆は各担当者が実施し、編集も同様である。文末に文責を明記した。
最終的には兵庫県埋蔵文化財調査事務所にて行った。
9. 本報告にかかる遺物・スライドなどの資料は、片引遺跡については、兵庫県埋蔵文化財調査事務所（神戸市兵庫区荒田町2丁目1-5）ならびに魚住分館（明石市魚住町清水立合池ノ下630-1）に、筒江中山古墳群・筒江中山遺跡については和田山郷土資料館（朝来郡和田山町寺内）に保管している。

筒江遺跡群 I

本文目次

例言

第1章 はじめに

I 調査に至る経過 3

II 位置と環境 4

第2章 片引遺跡

I はじめに 11

II 調査結果 16

III 出土遺物 21

IV おわりに 100

第3章 筒江中山古墳群

I はじめに 105

II 21号墳・22号(墳墓)・24号墳他の調査 106

III 25～27号墳の調査 123

IV 兵庫県朝来郡和田山町筒江中山25号墳より出土した
赤色顔料の微量化学分析 132

第4章 筒江中山遺跡 135

図版目次

- 図版1 片引遺跡周辺空中写真（国土地理院撮影）
- 図版2 (上) 片引遺跡遠景（竹田城から）
(下) 確認調査及びD地区全景
- 図版3 (上) A地区遠景
(下) A地区全景
- 図版4 (上) A地区全景
(下) A地区北壁土層堆積状況
- 図版5 (上) A地区木器出土状況
(下) 同上
- 図版6 (上) B地区遠景
(下) B地区全景
- 図版7 (上) B地区ピット群
(下) B地区溝・杭
- 図版8 (上) C地区遠景
(下) C地区溝土層堆積状況
- 図版9 (上) C地区土壙全景
(下) 同上
- 図版10 (上) C地区土壙焼板検出状況
(下) C地区土壙全景（焼板・石除去後）
- 図版11 (上) D地区全景
(下) D地区西壁土層堆積状況
- 図版12 縄文土器
- 図版13 石器
- 図版14 弥生土器 (1)
- 図版15 “ (2)
- 図版16 “ (3)
- 図版17 “ (4)

- 図版18 A地区出土土師器 (1)
- 図版19 ♪ (2)
- 図版20 ♪ (3)
- 図版21 ♪ (4)
- 図版22 ♪ (5)
- 図版23 ♪ (6)
- 図版24 ♪ (7)
- 図版25 ♪ (8)
- 図版26 ♪ (9)
- 図版27 ♪ (10)
- 図版28 ♪ (11)
- 図版29 ♪ (12)
- 図版30 木 器 (1)
- 図版31 ♪ (2)
- 図版32 ♪ (3)
- 図版33 ♪ (4)
- 図版34 ♪ (5)
- 図版35 ♪ (6)
- 図版36 ♪ (7)
- 図版37 ♪ (8)
- 図版38 ♪ (9)
- 図版39 ♪ (10)
- 図版40 ♪ (11)
- 図版41 (上) 調査区全景 (南西より)
(下) 21号墳近景 (南より)
- 図版42 (上) 22号 (墳墓) 近景 (南より)
(下) 24号墳近景 (西より)
- 図版43 (上) 21号墳全景 (南より)
(下) 22号 (墳墓) 全景 (南東より)

- 図版44 (上) 22号(墳墓)主体部全景(北より)
(左下) 第1主体(北西より)
(右下) 第2主体(北西より)
- 図版45 (上) 22号(墳墓)直刀出土状況
(下) 24号墳全景(南西より)
- 図版46 (上) 第1主体(東より)
(下) 同 遺物出土状況(直刀)
- 図版47 (上) ♪ ♪ (鉄鏃)
(左下) 第2主体(北東より)
(右下) 第3主体(♪)
- 図版48 (左上) A土器群(東より)
(右上) B土器群(♪)
(左下) 土器棺墓(北東より)
(右下) 土器棺墓周辺遺物(東より)
- 図版49 (左上) 25号墳主体部(西より)
(右上) " 遺物出土状況(玉)
(下) 26号墳全景(南より)
- 図版50 (上) 竪穴式石室全景(南東より)
(左下) 土壙墓近景(南より)
(右下) 溝遺物出土状況(東より)
- 図版51 (上) 27号墳全景(南西より)
(下) 中山遺跡全景(東より)
- 図版52 (上) 第1住居址(南西より)
(下) 第2住居址(西より)
- 図版53 (上) 第2住居址柱穴1 遺物出土状況
(下) 中世墓1(南西より)
- 図版54 (上) ♪ (調査後)
(下) 中世墓2(東より)
- 図版55 (上) 21号墳周辺出土遺物(A土器群)
(下) ♪ (B土器群)

- 図版56 (上) 22号(墳墓)出土遺物(左:第1主体墓壙内、右:第2主体墓壙内)
(下) 22・24号墳出土遺物(左上:22号墳墓墳丘裾部、右上:24号墳溝内、中:22号墳墓墳頂部、下:24号墳第1主体埋土内)
- 図版57 (左上) 24号墳第1主体出土遺物(鉄鏃)
(右上) 25号墳出土遺物(玉)
(左下) 26号墳出土遺物(左:須恵器、右上:鉄鏃他)
(右下) 土器棺墓周辺出土遺物
- 図版58 (上) 土器棺墓及び周辺出土遺物(右・左上:土器棺墓遺物、左下:周辺出土遺物)
(下) 土器棺墓周辺出土遺物
- 図版59 (上) 中世墓周辺出土遺物及び人骨(右上:人骨、左:青磁)
(下) 中世墓周辺出土遺物
- 図版60 (上) 第1及び第2住居址出土遺物(右:第2住居址柱穴1出土)
(下) 第1住居址出土遺物
- 図版61 溝1及び2次堆積出土遺物(溝1・6・7・19、2次堆積11・12・13・14・17・18)
- 図版62 溝1及び2次堆積出土遺物(溝1:1~5・8~10、2次堆積:15・16)

挿 図 目 次

第1図	遺跡の位置と主要遺跡の分布	7
第2図	調査風景	8
第3図	調査地遠景	11
第4図	調査風景	13
第5図	〃	14
第6図	〃	14
第7図	調査地区・坪設定図	17
第8図	B地区平面図	18
第9図	C地区東壁土層断面図	19
第10図	C地区中世遺構面実測図	20
第11図	縄文土器実測図	21
第12図	弥生土器実測図 (1)	23
第13図	〃 (2)	24
第14図	確認調査出土弥生土器拓影	25
第15図	A地区出土土器拓影 (6は古墳時代)	26
第16図	C地区出土弥生土器拓影 (1)	27
第17図	〃 (2)	28
第18図	D地区出土弥生土器拓影 (1)	29
第19図	〃 (2)	30
第20図	〃 (3)	31
第21図	〃 (4)	32
第22図	石器実測図 (1)	37
第23図	〃 (2)	38
第24図	弥生時代木器実測図	42
第25図	木器壺(3) 口縁部	43
第26図	木器壺(3) 出土状態	43
第27回	壺実測図	46

第28図	A地区土師器実測図	(1).....	51
第29図	〃	(2).....	52
第30図	〃	(3).....	53
第31図	〃	(4).....	54
第32図	〃	(5).....	55
第33図	〃	(6).....	56
第34図	〃	(7).....	57
第35図	〃	(8).....	58
第36図	〃	(9).....	59
第37図	〃	(10).....	60
第38図	〃	(11).....	61
第39図	木器実測図	(1).....	62
第40図	〃	(2).....	63
第41図	〃	(3).....	64
第42図	〃	(4).....	65
第43図	〃	(5).....	66
第44図	〃	(6).....	67
第45図	〃	(7).....	68
第46図	〃	(8).....	69
第47図	〃	(9).....	70
第48図	〃	(10).....	71
第49図	〃	(11).....	72
第50図	歴史時代土器実測図	(1).....	93
第51図	〃	(2).....	94
第52図	歴史時代木器実測図	95
第53図	片引遺跡、筒江中山古墳群、筒江中山遺跡の位置	102
第54図	21号墳断面図	106
第55図	第4次調査遺跡全体図(南西～南裾部は中山遺跡)	107
第56図	21号墳周辺出土遺物(A土器群1～3・B土器群4～6)	109

第57图	22号(墳墓)主体部	110
第58图	22号・24号墳断面图	111・112
第59图	22号・24号墳出土遺物(直刀)	113
第60图	〃 (土器)	114
第61图	24号墳第1・2主体	115
第62图	〃 第3主体	116
第63图	24・26号墳出土遺物(鉄器)	117
第64图	土器棺墓	118
第65图	〃 出土遺物	119
第66图	〃 周辺遺物	120
第67图	25号墳断面图	123
第68图	〃 主体部	123
第69图	〃 出土遺物	124
第70图	26号墳断面图	126
第71图	26号墳主体部(竖穴式石室)	127
第72图	〃 (竖穴式石室床面)	128
第73图	〃 西端土壙墓	128
第74图	〃 出土遺物(土器)	129
第75图	中山遺跡断面图(J-J')	137
第76图	第1住居址	138
第77图	〃 全体图	139・140
第78图	第2住居址	141
第79图	中世墓1	142
第80图	〃 2	143
第81图	第1・2住居址出土遺物(第1住居址1~8・第2住居址9)	144
第82图	溝1出土遺物	145
第83图	2次堆積遺物	146
第84图	中世墓周辺出土遺物	147

表 目 次

第1表	和田山工業団地建設に伴う調査一覧表……………	8
第2表	A・C地区弥生土器観察表……………	33
第3表	D地区弥生土器観察表……………	34・35
第4表	石器観察表……………	41
第5表	土師器分類表……………	47～50
第6表	A地区土師器観察表……………	74～91
第7表	歴史時代遺物観察表……………	97～99
第8表	25号墳玉類計測表……………	125
第9表	ジフェニルカルバジドによる呈色とRf値……………	133
第10表	ジチゾンによるスポットの呈色とRf値……………	133
第11表	筒江中山遺跡土器観察表……………	149～152

第 1 章 はじめに

I 調査に至る経過

中山古墳群は、町内で最も大きい加都平野を見おろす独立丘陵である中山の尾根並びに西側斜面に築造されている。中山の南西に位置する金梨山山麓をはじめ、加都平野に面した丘陵には以前から多くの古墳が確認されていたが、今回調査を実施した地域については、当時の『遺跡分布地図』（昭和45、48年度調査）では調査の不備もあり、1基の古墳も確認されていなかった。

昭和48年、和田山町は南但馬の中心的田園都市づくり構想に基づき、工業団地の造成を計画したのである。筒江字中山周辺がその候補地となったため、当地域における埋蔵文化財の分布調査が必要となった。

和田山町教育委員会は、工業団地造成事業の事業主体である(財)兵庫県農村整備公社の埋蔵文化財確認照会に対し、昭和50年4月に分布調査を実施し、古墳10基のほか、古墳の可能性のある地点数ヶ所を確認した。その中には、当時但馬で初めて発見された方墳2基も含まれていた。さらに昭和52年5月10日には、前回の調査において不明な地点が確認されたため、兵庫県教育委員会社教・文化財課井守徳男氏に現地踏査を依頼し、再度分布調査を実施した。その結果、新たに古墳12基を確認し、中山全体で22基の古墳の存在が明らかとなった。そのうち3基は土取りのため半壊しているものの19基は完存し、加えて古墳の可能性のある地点も5ヶ所判明したため、兵庫県農村整備公社に対し調査結果を通知したのである。

兵庫県農村整備公社は、この調査結果に基づき造成計画を進めたが、古墳が密集し、送電線の鉄塔2基が既設されている中山の北部並びに西部は除外し、南部の丘陵地を削り、周辺水田を埋め立てて団地を造成する結論に達したのである。

この計画にそって約335,000㎡の用地が買収され、昭和53年7月10日、第1次となった「和田山町筒江農・工業団地造成に伴う古墳発掘調査」を開始した。当初の調査は古墳4基の予定であったが、新たに古墳1基(23号墳)と平安時代の墓址群並びに建物址等を確認したため調査期間を延長し、昭和53年10月31日、約5ヶ月間にわたる調査を終了した。

(藤井保雄)

II 位置と環境

和田山町は、但馬の南部、朝来郡の北部に位置し、東は山東町及び京都府夜久野町に、南は朝来町、西は養父郡養父町、北は出石郡出石町に接する面積111.72 km^2 の地域である。但馬最大の河川である円山川が、町内を南から北西へ流れ、与布土川・東河川・糸井川などの支流が合流して、その沿岸耕地は南但の穀倉地帯を形成している。また、和田山町は、山陰線・播但線の両鉄道が接続する位置にあり、交通の要衝として現在も発展を続けている町であるが、古代の和田山町においても同様に、交通の要衝として重要な位置を占めていたであろう。このことは、町内に散在する遺跡、または現在までに出土した遺物からもうかがい知ることができる。

筒江中山古墳群は、和田山町南部の円山川右岸域に存在する筒江地区の丘陵上にあり、ほとんどの古墳が西方向に向かって延びる数本の尾根上に立地する。丘陵は、東側に狭い谷をもって独立丘陵状を呈し、谷をはさんで東側、標高308mの梶原山から派生する数本の尾根上には、梶原古墳群その他歴史時代の遺跡が存在する。さらに、筒江中山古墳群が存在する丘陵の西側裾部から南側裾部にかけては、縄文晩期からの遺跡である片引遺跡や古墳時代前期から中世に至る中山遺跡が存在する。以上が、和田山工業団地造成事業地内所在の遺跡である。

町内において、旧石器時代の遺跡・遺物は未だ確認されるに至っていない。縄文時代においても遺跡は確認されていないが、遺物の出土が若干知られている。円山川の支流、糸井川の右岸に位置する寺内遺跡より、晩期と考えられる土器片が出土している。また、昭和54年、高瀬地区の圃場整備工事中に晩期の浅鉢片・深鉢片が数片採集されている。更に、和田山町南部の加都地区内からは、叩石が採集されている。

弥生時代の遺跡については、遺構が発見されていないので不明確ではあるが、遺物の出土地点から今のところ11箇所の地点で遺跡の存在を推定することができる。前期においては、貼り付け凸帯を有する小型の壺が出土した安井遺跡、ヘラ描き直線文を施した土器片が出土した高瀬遺跡などが知られる。高瀬遺跡は、前述したように縄文晩期の土器も同時に採集され、また、古式土師器や歴史時代の土器も採集されており、縄文晩期から歴史時代に至る複合遺跡である可能性が強い。中期においては、中期後半の高坏が出土した林垣遺跡がある。また、ここからは環状石斧も採集されている。更に、出土地点は不明であるが、中期後半の脚付無頸壺が出土している。石器のみ単独で出土した主な例としては、加都の集落内より石鎌が、また、高田地区からは抉入石斧が出土している。後期の遺物が発見された例は少ない。唯一の例として、町道改良工事に伴って実施した池田古墳外堤部の発掘調査の際、下層より後期の土器片が出土した⁽¹⁾。出土した土器片はすべて磨耗してお

り、地形的に考えても2次堆積の遺物と考えられるが、周辺に遺跡が存在する可能性は充分にある。

古墳時代の集落遺跡についても、弥生時代の遺跡と同様に、全く不明であるといっても過言ではない。しかし、若干の出土遺物から遺跡の存在が推定できる地域は数箇所存在する。主なものでは、高瀬遺跡からは、5世紀前半に比定できる古式土師器片が採集されており、加郡地区からは、小型丸底壺が出土している。生産遺跡では、岡田地区で6世紀後半の須恵器窯が3基確認されている。また、高瀬地区の圃場整備工事中に窯壁が採集されており、窯の存在が推定される。

町内に散在する古墳、特に4世紀後半から5世紀代の古墳に関しては、東谷・平野地区を中心として大型古墳が集中する地区であり、但馬の古代を考えるうえで、必要不可欠な地域である。4世紀末葉に比定されている東谷の城の山古墳は、西から延びる尾根の先端部に位置し、地山整形によって造り出した直径約36mの円墳である。主体部は、墳頂部に長大な木棺を1基構築し、鏡・碧玉製石製品・玉類などの豊富な遺物が副葬されていた⁽²⁾。4世紀代の但馬における首長墓の特徴は、豊岡市の森尾古墳などに見られるように、畿内的な様相を持つ一方で、弥生時代以来の在地的な墓制を捨て去ることができなかった段階として認識されているが、その中であって城の山古墳は、畿内的な様相をより強めた古墳であるといえよう。

5世紀に入って、首長墓の様相は一変する。典型的な畿内型の古墳の出現である。町内で、5世紀代の前方後円墳として確実なものは、今のところ池田古墳と岡田古墳群中のひとつである長塚古墳があげられる。また、町外に目を向けると、朝来町の桑市に所在する池田古墳に次ぐ規模を有する船宮古墳がある。なお、町内宮内地区には、全長約55mの前方後円墳の可能性のある丸山古墳が存在するが、削平のため詳細は不明であり、時期を限定することはできない。これらの古墳のうち、池田・船宮古墳は、いずれも段築で葺石を持ち、埴輪を有している。さらに特徴的なことは、いずれも周濠を持ち、畿内大王墓そのものの形態を有していることである。このことは、畿内勢力との強い結びつきを想定させる⁽³⁾。池田古墳は、全長141mを測る前方後円墳で、但馬最大の規模を持つものである。内部構造は、以前の土取りのため不明である。出土した埴輪の形態から、5世紀前半の時期の築造と考えられる⁽²⁾。最近、町内高田地区の墓地内より、長持型石棺が発見された。蓋石の一部で大阪府津堂城山古墳の長持型石棺に類似している。どこから運ばれたかは不明であるが、可能性としては池田古墳が最も有力ではないかと考えられる。

6世紀代の大型古墳は、岡田地区及び加郡地区に見られる。岡田古墳群中のひとつである小丸山古墳は、全長約60mの前方後円墳である。内部構造は不明であるが、採集された埴輪から6世紀前半の築造と考えられる。加郡に存在する車塚古墳は、前方後円墳とも円墳とも言われているが、近年の測量調査によると円墳の可能性が強いと考えられる⁽⁴⁾。円墳と推定した場合の規模は、直径が約25mである。内部構造は不明であるが、墳頂部に石室

の天井石が露出している。付近より出土した円筒埴輪より、6世紀前半の時期が考えられる。⁽⁵⁾ 車塚の南に存在する王塚古墳は、直径約22mの円墳である。墳頂部には石が露出しているが、内部構造は不明である。

古墳時代初頭から6世紀前半期まで多く見られる木棺直葬、石棺などを主体部に持つ小規模古墳に関しては、近年、豊岡市域を中心に盛んに調査が行われているが、和田山町内でも若干の調査が行われている。今回報告の筒江中山古墳群・梶原墳墓群もそのひとつであるが、林垣の秋葉山墳墓群では4世紀末葉から6世紀に至る古墳群の様相が明らかにされている。⁽⁶⁾ また、若干の分布調査により、小規模古墳の存在が確認されている地域もあるが、このことに関しては、将来の分布調査の成果を待つべきところが多い。

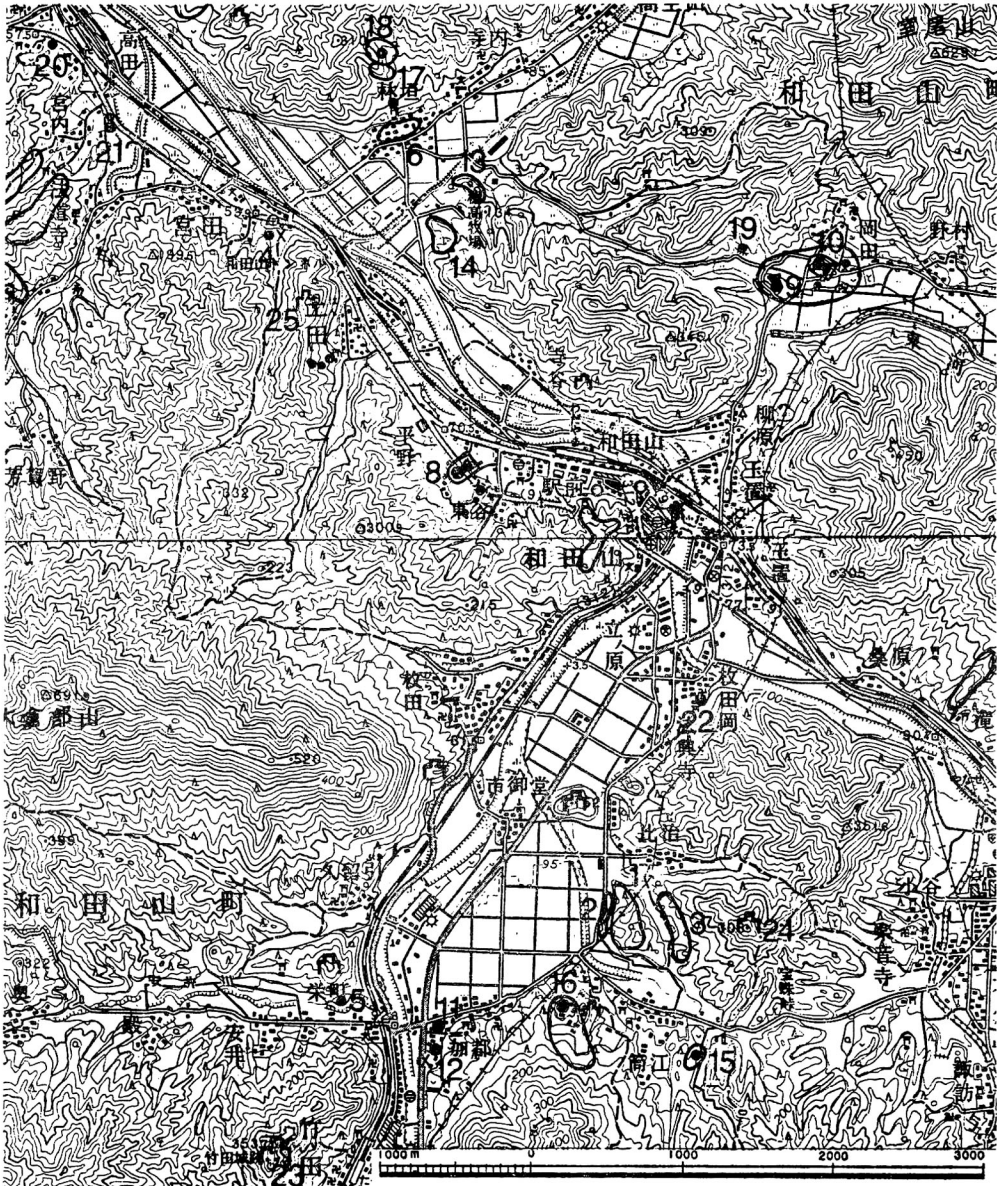
6世紀後半から7世紀初頭にかけての、いわゆる横穴式石室墳は、町内各所でその存在が明らかにされている。規模的に見て、普通程度のものばかりであるが、主要な古墳をあげると、金銅装頭椎大刀が出土した長尾古墳や、同様に、金銅装頭椎大刀など豊富な遺物が出土した春日古墳⁽⁷⁾があげられる。また、銅鏡が出土した大谷2号墳や、陶棺片が出土した岩尾谷古墳があげられる。

歴史時代の遺構・遺物については、加都地区より、複弁蓮華文軒丸瓦と平瓦片が出土している。また、法興寺地内においては縄目叩きを有する平瓦片が多数採集されており、寺院址の存在を想定することができる。更に、町内の田圃のほとんどはすでに農業基盤整備事業が実施されているが、字限図を見ると町内各所に条里制の遺構が存在していたことがうかがえる。中世になると、全国でも屈指の山城である竹田城が知られている。そして、町内全域には、中世から近世に構築された山城・館跡が、数々の伝承を残しながら散在している。⁽⁸⁾

(田畑 基)

(註)

- (1) 昭和57年度、和田山町教育委員会調査
- (2) 櫃本誠一、山本三郎「城の山、池田古墳」(1972) 和田山町教育委員会
- (3) 平良泰久「国家形成期の日本海」『歴史公論 No.88』(1983) 雄山閣
- (4) 昭和56年度、武庫川女子大学考古学研究会の測量調査による。
- (5) 昭和55年度、和田山町教育委員会調査
- (6) 藤井祐介、高島信之他『秋葉山墳墓群』(1978) 和田山町教育委員会
- (7) 櫃本誠一「上山五号墳、大谷二号墳」『秋葉山墳墓群』(1978) 和田山町教育委員会
- (8) 城址の位置関係については、和田山町教育委員会、藤井保雄氏の御教示による。



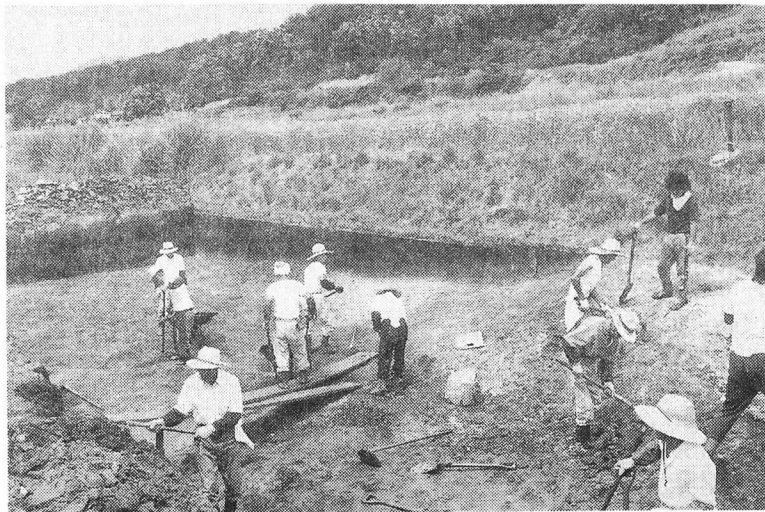
第 1 図 遺跡の位置と主要遺跡の分布

- | | | |
|--------------------|-----------|------------------|
| 1. 筒江中山古墳群・中山遺跡 | 2. 片引遺跡 | 3. 梶原山古墳群 |
| 4. 高瀬遺跡 | 5. 安井遺跡 | 6. 林垣遺跡 |
| 7. 城の山古墳 | 8. 池田古墳 | 9. 小丸山古墳（岡田古墳群） |
| 10. 長塚古墳（岡田古墳群） | 11. 車塚古墳 | 12. 王塚古墳 |
| 13. 秋葉山墳墓群 | 14. 林垣古墳群 | 15. 長尾古墳（長尾古墳群） |
| 16. 城ヤブ1号墳（城ヤブ古墳群） | 17. 春日古墳 | 18. 大谷2号墳（大谷古墳群） |
| 19. 岡田古窯址群 | 20. 長持型石棺 | 21. 丸山古墳 |
| 22. 法興寺址 | 23. 竹田城址 | 24. 比治城址 |
| 25. 土田城址 | | |

第1表 和田山工業団地建設に伴う調査一覧表

次年	調査年度	調査主体 (担当者)	遺跡名	主な遺構と遺物
1	53	兵庫県教育委員会 (小川良太・岡田章一)	筒江中山古墳群 筒江中山遺跡	23号墳 木棺直葬 内行花文鏡
2	54	兵庫県教育委員会 (松下 勝・渡辺 昇)	片引遺跡	縄文晩期土器 弥生前期土器・木製壺 古墳初頭溝、土師器・木器 (農具・機織具など) 平安 土壙、須恵器・土師器・木製杓子
3	56	和田山町教育委員会 {水野正好・輔老拓次} {小川良太・吉田 昇} {田畑 基}	梶原山古墳群 比治城跡	箱式石棺 土器棺 土壙 陶磁器 土師器
4	56	和田山町教育委員会 (田畑 基)	筒江中山古墳群 筒江中山遺跡	古墳6基 木棺 土器棺 須恵器 土師器 玉類 鉄刀 竪穴住居跡2棟 土師器 中世墓 土師器 青磁

第1表のとおり4次の調査を実施した。その成果は多大なものがある。諸般の事情からすべての報告を同時に行えなかったことは残念である。『筒江遺跡群Ⅰ』として公刊できることは喜ばしいことであるが、近い将来、残りの遺跡についても『筒江遺跡群Ⅱ』として刊行されることを望むものである。(渡辺 昇)



第2図 調査風景

第 2 章 片 引 遺 跡

I はじめに

1. 調査に至る経過

姫路から播但線に乗り継ぎ、標高 349m の生野峠にさしかかる頃になると、山あいが陰しくなる。瀬戸内海と日本海側とに分ける中国山地の分水界である。朝来郡生野町円山に源を発した円山川を右手に見ながら、しばらくすると視界が広がってくる。和田山盆地である。播磨・丹波から但馬へ入る表玄関に位置している。片引遺跡は和田山盆地の南東部にあり、通称中山の西麓斜面に存在する。

平地部分は昭和43年度には場整備が実施され、既に旧地形を逸しており、山麓部分（平地との比高差 6 m）はいわゆる谷頭水田として開田されているが、かろうじて当時の旧地形を類推することができる。

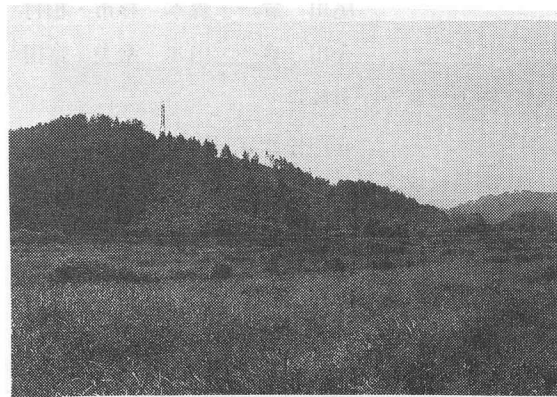
昭和53年度に実施された筒江中山古墳群の発掘調査の際、山麓部分において土器の散布が認められたので、一部試掘調査を行った。その結果、弥生時代前期及び古墳時代前期の遺物が発見された。県教育委員会は農村整備公社と協議を行い、急傾7,000㎡を調査対象地域として、昭和54年4月23日～7月25日まで延65日間発掘調査を実施した。

対象地域は工業団地造成予定である水田となっている西麓斜面と東方向から大きく北方向に流れを変えて円山川に注ぐ黒川に挟まれた平地部分である。

調査は既には場整備がなされている地区及び水田化されている山麓斜面に計58ヶ所に2×2mのツボを設定し発掘調査を実施した。

遺物がまったく出土しない箇所と遺物が集中して出土する箇所があり、部分的に調査面積を拡張した結果、尾根と尾根によって挟まれた谷地形状の部分の一部、及びその延長上の箇所に遺構の検出、遺物の出土が見られたために可能な限り、その部分を拡張し調査にあたった。

拡張部分は計4ヶ所であるが、山麓斜面の南から北へ順にA・B・C地区とし、平地部分をD地区とした。B・C地区において一部遺構を検出したが他の地区では遺物を採集したにとどまらずに過ぎず遺構は検出し得



第3図 調査地遠景

なかった。ただ、C地区において鎌倉時代の焼土を伴う土壌を検出している。出土した遺物の大半は古墳時代前期のもので、縄文時代晩期前半、弥生時代前期中葉～中期中葉の土器及び弥生時代前期、古墳時代前期の木製品が良好な状態で出土した。

これらの遺物は層位的に取りあげたにも拘らず、層分れはしなかった。またD地区の遺物は他の地区のそれと比較して、細片で磨耗度も大きかった。

2. 調査体制

1. 昭和54年度発掘調査の体制

(1) 調査事務 社会教育・文化財課

課長	林 五和夫
参事	田 中 幹 雄
副課長	道 畑 實
課長補佐	池 田 義 雄
課長補佐兼 管理係長	河 合 幸 一
埋蔵文化財係長	村 上 紘 揚
係長	堀 洋
技術職員	小 川 良 太
〃	吉 田 昇
事務職員	山 崎 桂 子

(2) 調査担当 社会教育・文化財課

主任	松 下 勝
技術職員	渡 辺 昇

補助員 平野 光啓

作業員 木本政太郎・西村 一夫・吉井 京一・吉井 操・藤原 敏郎
尾川 倉一・森本 杉市・柏村 秀雄・水嶋 光雄・安積 誠次
今川 貞一・山本 幸夫・富田 正雄

整理作業及び事務員

嘉門佐智与・高島ひとみ・高倉 照子

協力者 和田山町教育委員会

2. 昭和59年度整理調査の体制

(1) 調査事務 社会教育・文化財課

課長	西 沢 良 之
文化財担当参事	大 西 章 夫
副課長	森 崎 理 一

課長補佐	和田 富夫
管理係長	小西 清
埋蔵文化財 調査係長	櫃本 誠一
主査	八家 均
〃	坂本 豊明
技術職員	大平 茂
〃	森内 秀造
事務職員	杉本 恵子

(2) 整理担当 社会教育・文化財課

主査	松下 勝
技術職員	渡辺 昇
整理補助員	永島真知子、西上知予子、和田早芳子 友久 伸子、伴 悦子
整理参加者	植田 弥生、藤吉 真弓、石川 純子 沢田 禮子、木村 淑子、二階堂康子 金山 恵子、早川亜紀子、茨木恵美子 赤松千恵子、出田 敬子、金治 美香 加藤 真理、三好 唯義、井上みどり 藤原 晴美、植田 順子、南正覚雅子 原田 佳子

3. 調査日誌抄

1979年

4月17日（火）

兵庫県教育委員会王子分館から、片引遺跡へ調査用具等を搬入。

4月23日（月）

本日から 和田山町 へ入る。午後、教育委員会へ赴き調査協力を依頼する。

4月25日（水）

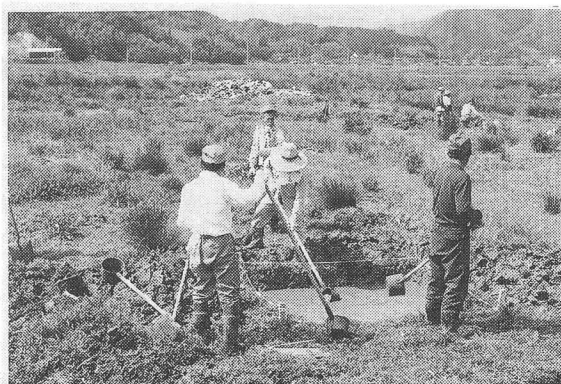
本日から作業開始。

調査の目的は、(1) 昨年度実施した確認調査の際、弥生時代前期及び古墳時代前期の土器が出土した箇所があるため、全面調査の範



第4図 調査風景

囲を確定すること。(2) 造成地は山塊部分と平地部分があるが、山塊部分については、昨年度農村整備公社と協議を行ない、保存区域と調査区域にわけ、調査を実施した。平地部分について、(1)とは別に確認調査を行い、全面調査の有無を探索する。の2点である。



第5図 調査風景

4月28日(土)～5月6日(日)

飛び石連休のため作業中止。

5月7日(月)～5月11日(金)

ツボ10Gから畿内第Ⅱ様式の壺形土器出土。ツボ1G～ツボ30Gまで一部を除いて完掘、概出土土器は細片で、土層の攪乱を受けている。

5月14日(月)～5月18日(金)

ツボ31G～ツボ49Gまで調査。

雨天の日を利用して筒江地区総代片岡喜正氏宅へ赴き、字限図を借用する。当該地区の圃場整備は昭和43年度に実施されたことが判明。

5月21日(月)～5月25日(金)

前週までの確認調査の結果、遺構の存在が予測できた、10G、42G、50G及び46～49Gについて拡張して調査することにして、改めてグリッドを設定し、調査を開始した。

5月28日(月)～6月1日(金)

10G拡張区



第6図 調査風景

地形的には小さな谷状地形でシルト層の上に砂層があり、遺物はこの砂層から出土していた。上層の砂層からは古式土師器が、下層の砂層からは畿内第Ⅰ様式及び第Ⅱ様式の遺物と共に多くの木製品が出土した。

50G拡張区

中世墓を確認し、検出を完了する。

6月4日(月)～6月8日(金)

10G 拡張区

検出を完了し、土層図、写真撮影を行う。

50G 拡張区

流水文を施した壺形木製品が出土、ただし、遺構の有無については不明。

6月11日(月)～15日(金)

C 地区

大溝底まで掘り終え、東壁断面清掃・写真撮影・実測。

D 地区

遺物包含層掘り下げ始める。基本的に1層で地山となる。凹石、石包丁未製品出土。重機を使ってA・C地区拡張。表土除去。

6月18日(月)～22(金)

B 地区

作業開始、杭打ちを行う。

D 地区

掘り終え、全景写真撮影。遺構存在せず。自然堆積と思われる。

6月25日(月)～29日(金)

B 地区

北側からトレンチを設定し、遺構の有無を確認する。

7月2日(月)～6日(金)

B 地区

南側では遺構確認。遺構面清掃し、ピットなど掘り下げる。土器小片少量出土するだけで時期決定困難。全体清掃し、B地区全景写真撮影。

7月9日(月)～13日(金)

B 地区

ピット・溝など遺構実測。

A 地区

西側拡張部分 包含層ほとんどなし。念のため十字に トレンチ設定して深掘するが、包含層・遺構なし。

全 域

坪は人力で、全面調査区は重機で埋め戻しを行う。発掘器材、洗浄する。

7月16日(月)～18日(金)

出土土器梱包、プレハブ内整理し、王子分館へ搬出し、調査終了する。

(松下 勝)

Ⅱ 調査結果

1. A地区

グリッド番号10で遺物が出土したために、調査区を拡張しA地区とした。当地区は東から西へ派生する尾根と尾根に挟まれた短い谷状遺構で、長さ16.5m、幅10mの小扇状地をなした部分である。この地区から山へ向って急激に谷幅は狭く、しかも比高差が大きくなる。しかし、念のため数ヶ所グリッドを設定したが耕土直下から黄色粘土層の無遺物層になり、少なくとも遺構・遺物の検出をみることはできなかった。また、調査区の西側は約2mの比高差をもって道路に接している。本来調査地区両側の尾根は西方へ向って延びていたことが推察されるし、谷は本来もっと幅が狭かったものを削平され水田面を拡張したものであろう。

周囲の状況から判断して谷の出口部分に相当すると思われるA地区には、自然地形と思われる箇所がいくつか残存していたが、決して広くはなく、遺物の出土状況から判断して一次堆積ではない。

遺物は暗褐色粘質土（腐蝕土）が2層あり、この層の上層に灰褐色砂層が堆積しているが遺物の大半は、この灰褐色砂層から出土している。遺物は層位的に取りあげたが、上層の土器と下層の土器が接合したり、土器出土量の割には完形品となったものは少ない。

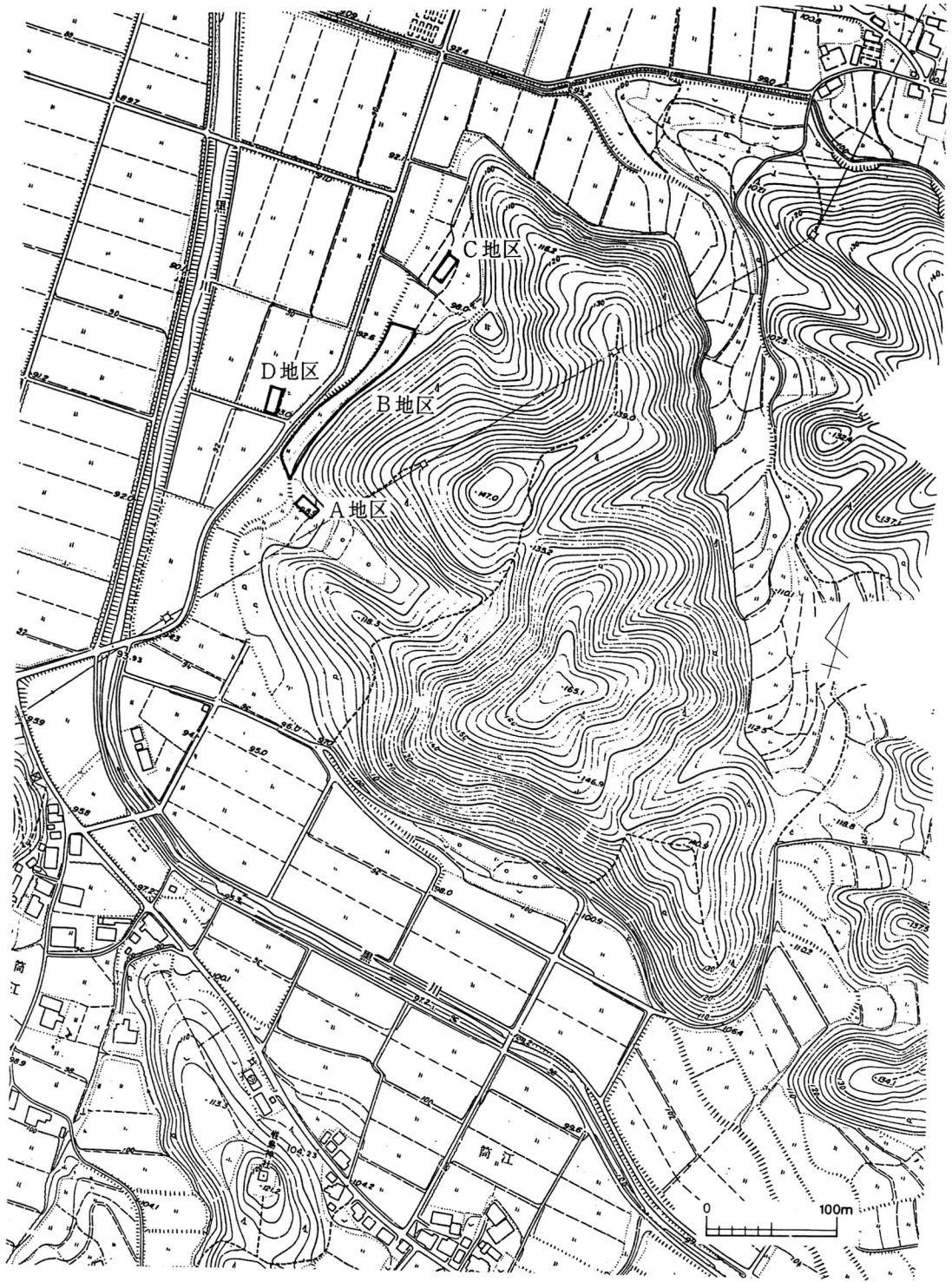
遺物は土器、石器及び木製品が出土しているが、木製品は古墳時代前期の所産である。土器は縄文時代晩期～弥生時代中期中葉及び古墳時代前期のもので、他の時期の遺物は出土していない。D地区から出土した土器もまったく同じ様相を呈しているが、D地区出土遺物はA地区のそれらと比して細片が多く磨耗度が大きい。

遺物の出土状況から判断して、当時の生活の場は直近にあったと想定されるが、時間的・予算的制約もあり調査を行っていない。(松下)

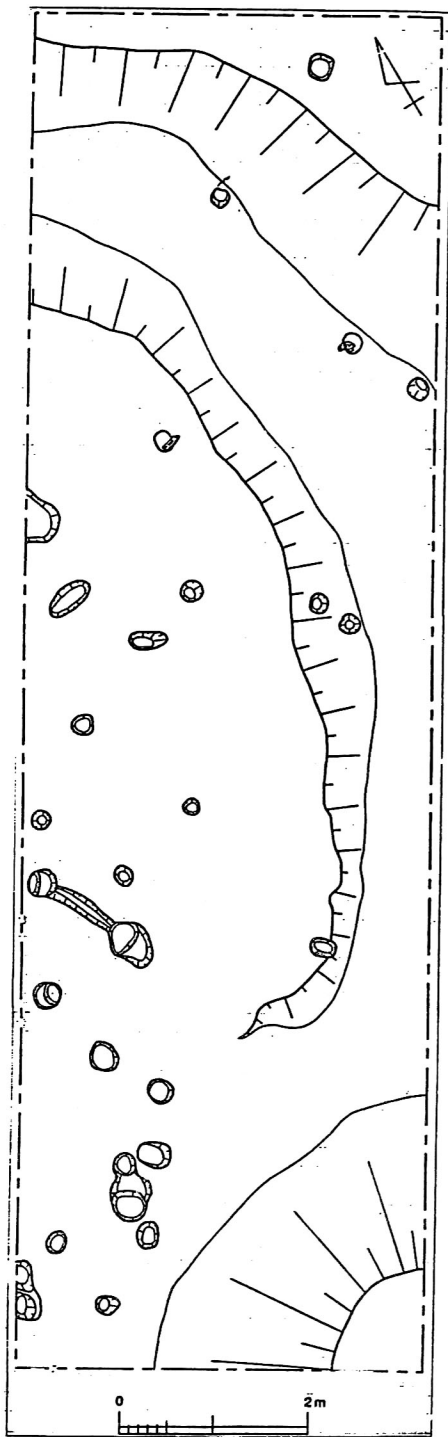
2. B地区

A地区・C地区に挟まれた山麓の狭長な平坦地がB地区である。A・C地区とともに比較的深い谷である。B地区は、中山の西斜面に立地しており、西側は町道が通っており丘陵端は削平されている。しかし、西方に立地するD地区との比高差を考えると大きくは削られていないと思われる。狭小な平坦地で、最大幅でも10mに足りない。この斜面と町道間の狭長な平坦地が調査対象地で、ほぼ5×100mの範囲を調査した。

調査を実施した大半の地域では、遺構は確認されなかった。地形の変化は随所で見られピットも数基検出したが、自然地形と思われる。遺構と思われる地点は、A地区に近い南寄りの調査地内では比較的広い部分である。



第 7 図 調査地区・坪設定図



第8図 B地区平面図

ピット32基と溝を検出している。溝は地形に反した等高線に直交しているので、人工的なものと考えられる。幅3mと広い溝であるが、深さは一定せず0.3mと浅いところや0.6mの深さの部分もある。ピットのうち7基は、溝に伴っている。溝の両肩から内側に向かって傾斜している。2基には柱痕が残されており大きく内傾しており、40°以上の傾斜で溝底中央部へ向けている。2本の杭のうち、1本は断面長方形に面取りされた杭であるが、もう1本は自然木を杭に使用している。枝さえ払わない自然木で樹皮も残っている。枝の方向から樹木の先を下にして打ち込んでいる。

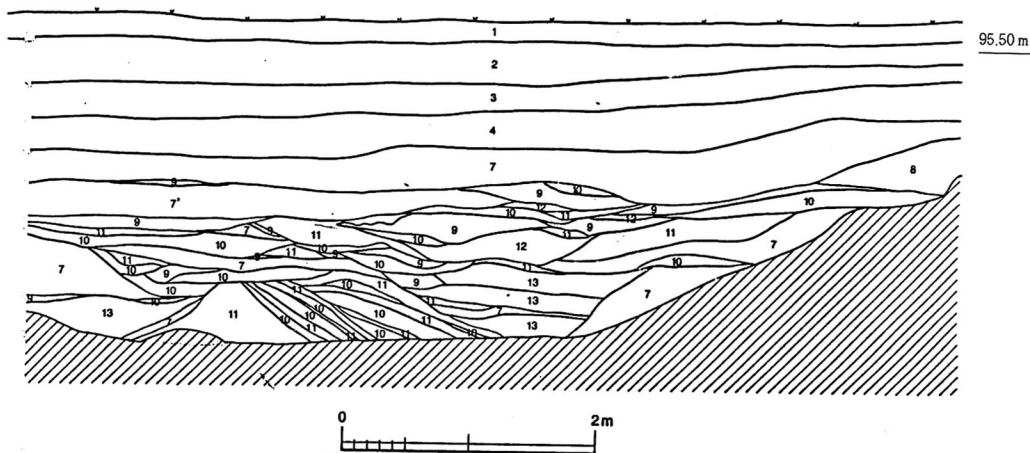
ピットは、埋土は全て黒色土で分けることは不可能であった。また、柱痕の有無は決定困難であった。図上の検討では、1列に並ぶ箇所もあるが、建物址とは即断出来ない。可能性は残されているものの掘立柱の建物とする根拠は薄弱である。

遺物は少量でしかも小片が多く、復原不可能で時期決定の資料にはならない。残された杭を見ると古い時期を与えにくく、中近世の新しい時期を考えた方が無難かとも思われる。(渡辺)

3. C地区

独立丘陵である中山に小さく開折された谷の入口部に当たり、調査地点の中では最も北側に位置する。西側の、水田面との比高差は5mを測り、立地条件などはA地区と共通する。遺構は大きく二時期に分けられる。

古い段階のものは、A地区と同様の古墳時代前期と思われる遺構であるが、自然地形の可能性も残されている。大溝状の遺構で、南側は肩がしっかりしている。約18mを南北に測るまで調査しており、深さは最深部で4mを測る。溝内の堆積状況は全体的に粘土と砂の互層になっている。黒色粘土層が遺物包含層で、最下層からは弥生前期の



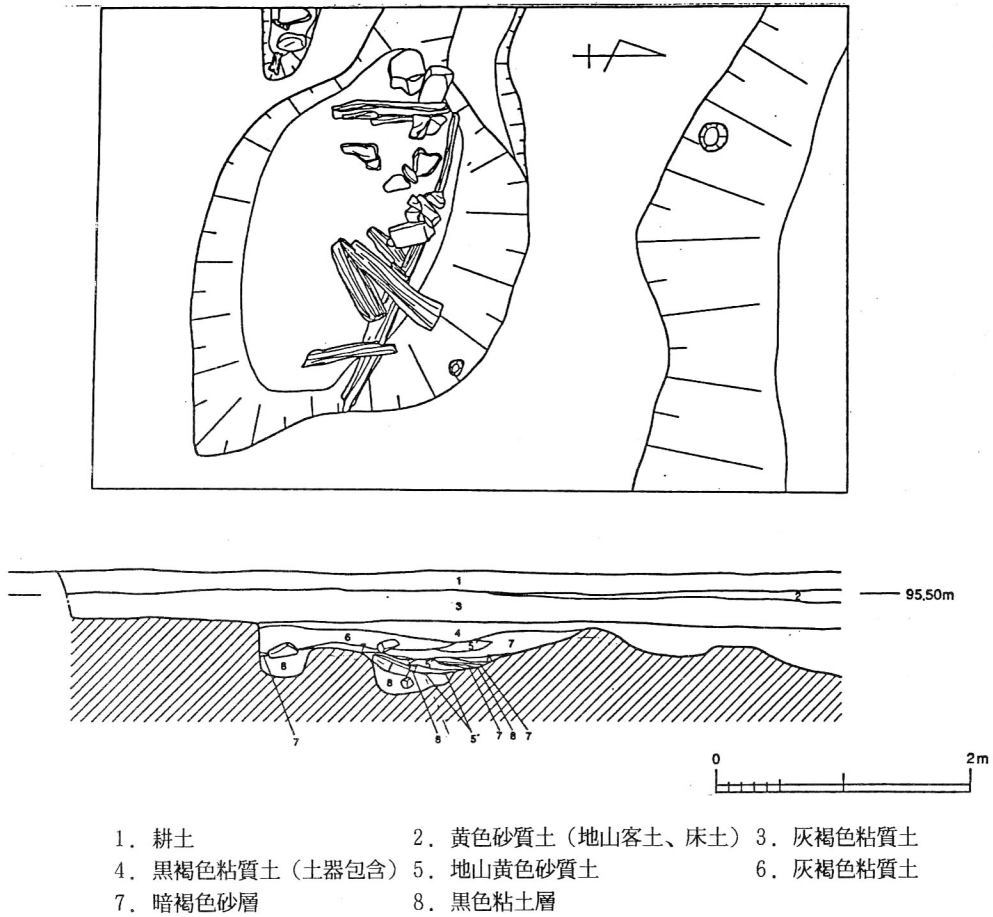
- | | | |
|-----------------|---------------|-----------|
| 1. 耕土 | 2. 灰褐色粘質土 | 3. 黒褐色粘質土 |
| 4. 暗灰褐色粘質土 | 5. 黄色砂質土 (地山) | 6. 灰褐色粘質土 |
| 7. 黒色粘土 | 8. 灰色粘土 | 9. 黒褐色砂層 |
| 10. 茶褐色粘質砂層 | 11. 黒灰色粘質土 | 12. 灰褐色砂層 |
| 13. 灰色砂層 (小礫含む) | | |

第 9 図 C 地区東壁土層断面図

土器・土器が出土しており、上層からは古式土師器が出土している。ただ、プライマリーな層であると断定しかねる状況である。

新しい段階の遺構は、鎌倉時代の遺構である。大溝の南肩に築かれている遺構で、溝を伴う落ち込みと土壌を検出している。落ち込みは、長径4.0m、短径2.5mの楕円形を呈しており、東方に狭く浅い溝が西方に深く広い溝が連結される。落ち込み底には炭化した木材が認められ、随所に人頭大の石が置かれている。須恵器・土師器の他に、棒状木製品・杓子の木器が出土している。出土している木器と炭化した材が底にあることから共同炊事場的な性格の遺構かと思われる。最深部には黒色粘土が堆積し、その上面に炭化材が存在する。落ち込み底北側に横木状の板材が見られる。石は西側の広い溝の方に近い部分に集中しており、水を調整する意図を持った遺構かもしれない。

落ち込み西側で小土壌を検出している。短径0.45m、長径0.90mの楕円形プランで深さ0.2mを測る。人頭大の角礫と土師器甕〔第51図(20)〕1個体分が出土している。遺構の性格を強いて考えるなら、墓かと思われる。



第 10 図 C 地区中世遺構面実測図

4. D地区

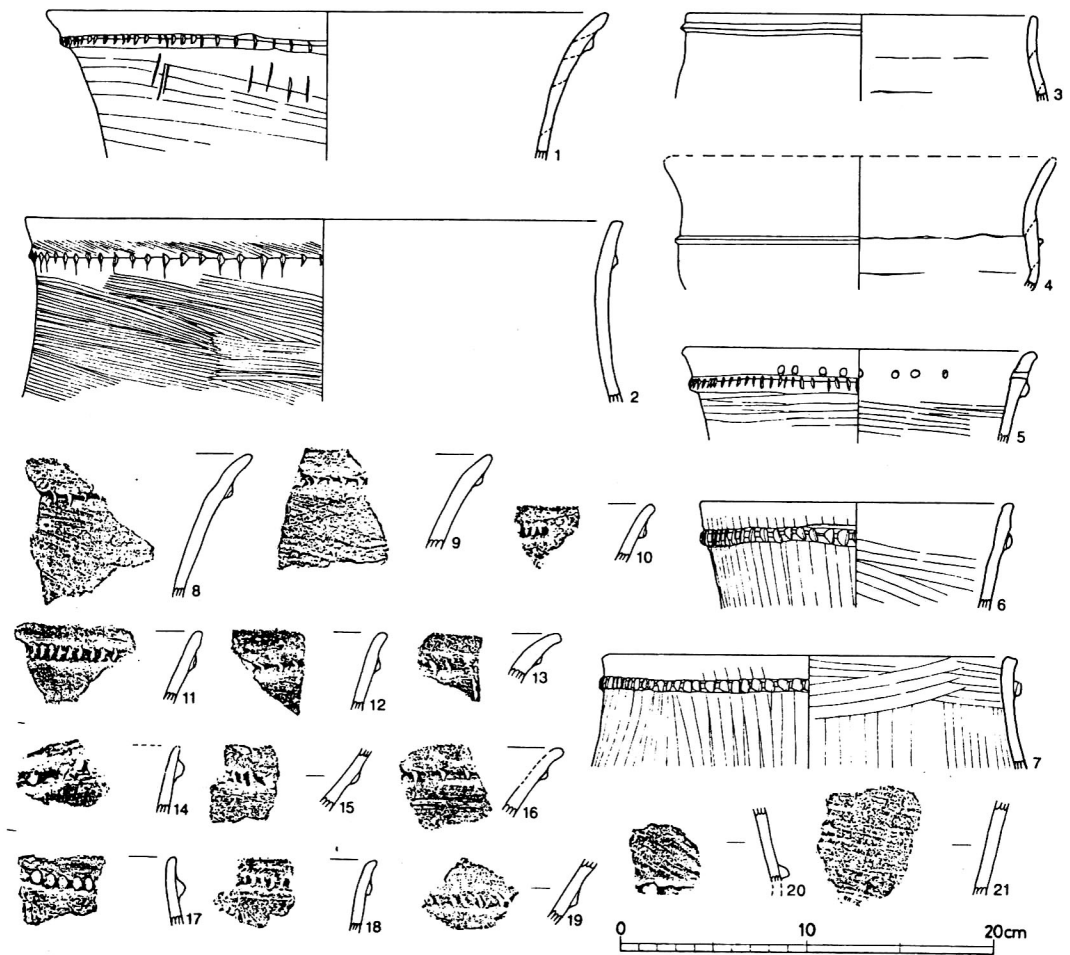
B地区の西方の低い部分に位置する。確認調査で弥生前期の土器を含む包含層を確認したことから約1,400㎡について全面調査を実施した。現状では水田で平坦であるが、調査を行うと南東部分に高まりが見られた。高い部分は小面積であることから遺構は確認されなかった。平坦面から緩やかに落ち込み、約0.6~0.8mで底となり、底近くの黒色土から遺物が出土している。A・C地区ほど濃密な包含層ではなく、出土土器も小片となっているものや磨滅を受けている土器が多い。ただ、他地区よりも弥生前期の土器の比率は高い。土器の文様の中に興味深いものが多く見られ、また石器が多いのも特徴である。（渡辺）

Ⅲ 出土遺物

1. 縄文時代の遺物

(1) 縄文土器

A地区から出土しているが、出土状況から推して、弥生時代前期中葉及び後葉の土器と伴出していた可能性がある。いずれも縄文時代晩期後半の粗製の深鉢型土器である。口縁部直下もしくは胴部上半部に凸帯文をもつ。3・4のように凸帯文のみで文様を施さないものがあるが、ヘラ状工具によって刻み目を施しているもの（1・5・6・7）、刻み目



第11図 縄文土器実測図

が凸帯文のみで終らずに胴部の一部にまでおよび爪状を呈するもの(2)もある。5のように口縁部と凸帯文の間に2個1組の穿孔されている例がある。使用痕は認められない。

谷本進氏⁽¹⁾によると但馬地方では縄文時代晩期の遺跡は28ヶ所、弥生時代前期の遺跡が20ヶ所知られている。その大半は円山川水系に属しているが、各支流沿いに分布しているので今後遺跡数は増加するであろう。

縄文時代晩期の土器と弥生時代前期の土器を伴出する遺跡は、7遺跡あるが片引遺跡は明らかに弥生時代前期中葉の土器を共伴する唯一の例である。(松下)

注 (1) 谷本 進ほか「但馬の弥生式土器」『但馬考古学』1 1982.11

谷本 進「但馬(2)」(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター第20回研修会資料 1984.1

2. 弥生時代の遺物

(1) 弥生土器 (第12・13図)

B地区を除いた各地区から出土しているが図化できたのはわずかであり、大半は細片である。

(3)は前期後半の壺形土器である。頸部に4条のヘラ描直線文を施している。調整は内外面ともヘラ磨きである。

(4)・(5)も同様の壺形土器である。

(6)は壺形土器で、頸部に4条、胴部にも4条の凸帯文をもち、それぞれ貝殻状圧痕文を施している。

(7)は頸部に4条以上の凸帯文をもち、口縁部端面に1条のヘラ描沈線文を施し、その上下に刻み目をもつ。

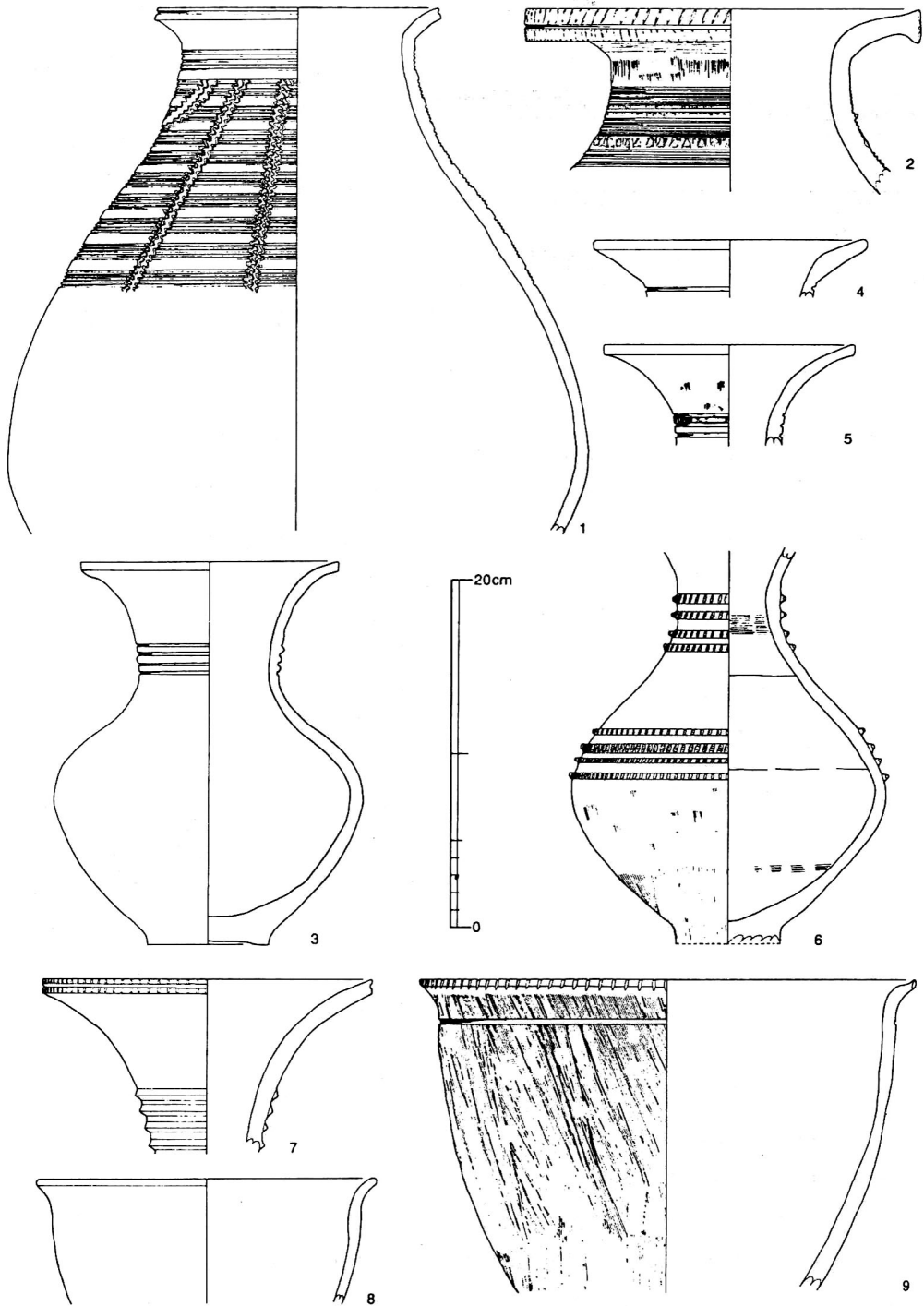
(8)・(9)はいずれも「く」字形の甕形土器で(9)は1条のヘラ描沈線と口縁部に刻み目を施す。以上の土器は前期後半の時期に比定される。

(2)は中期前葉の壺形土器である。口縁部に1条のヘラ描直線文を有し、その上下に刻み目を施している。頸部に7条1組のクシ描直線文を三帯以上めぐらしているが、組み合わせからみて3条1組以下の工具であろう。ヘラ状工具による三角形の刺突文もみられる。

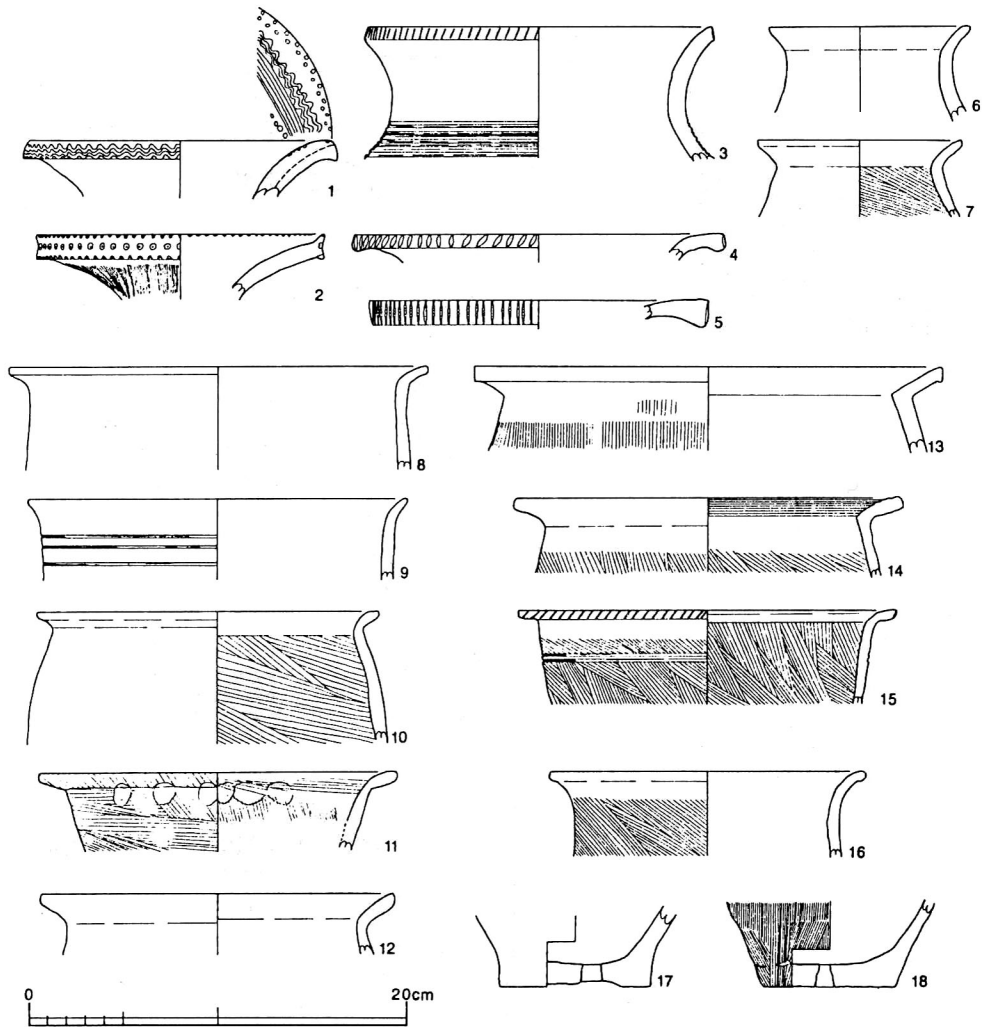
(1)は中期前葉の大形の壺形土器である。口縁部は大きく外反しない。胴部の最大径は下半にある。口縁部端面にはヘラ描直線文を1条描いている。文様は頸部から胴部上半にかけて、5条1組のクシ描直線文を10帯施している。頸部から2条目の直線文の上から、3条1組のやや山形文に近い波状文を右上から左下にかけて描いている。この文様構成は流水文を意識したことが推測される。

弥生時代前期中段階の土器 (第16図 9・13・14・16・18)

いずれも壺形土器の頸部で、C地区から出土している。沈線帯の上下をヘラ磨きによっ



第 12 图 弥生土器实测图(1)

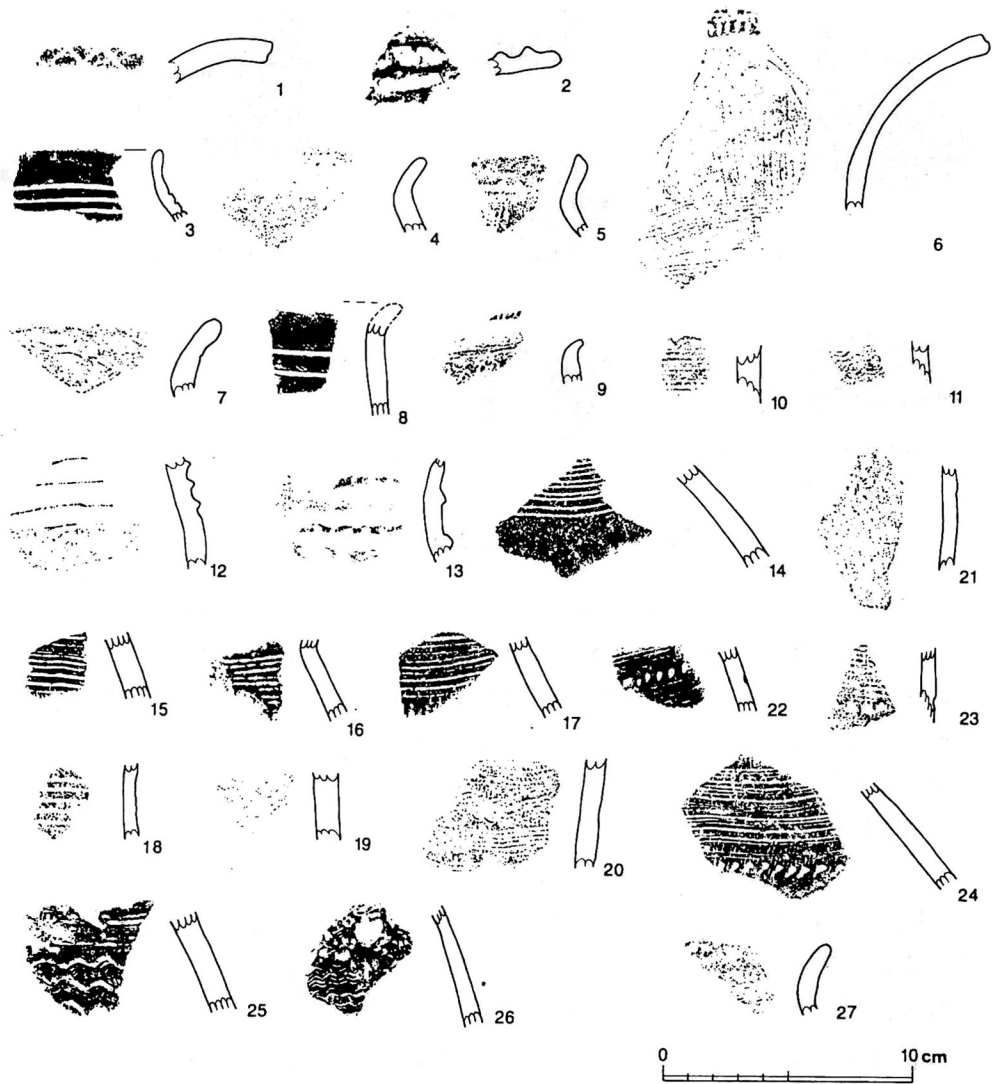


第13図 弥生土器実測図(2)

て押さえ、沈線文帯を浮きあがせる手法即ち段状に仕上げている。沈線文は(18)の4条以外は(9)は3条+ α 、(14)は7条+ α 、(16)は6条と多条化の傾向がある。ただ(14)のそれは最上と最下の沈線は7条の可能性が強い。

しかし、いずれにしても条数は多く、段状に接する部分は段を持ち、かつ、その部分の沈線の幅が広い。但馬地方では豊岡市駄坂川原遺跡にその出土例を求めることができる。手法的には、ヘラ状工具による押さえによって段状に仕上げている⁽¹⁾。

井藤暁子氏⁽²⁾が指摘しているように、「はっきり削り出さない傾向のもの」やこれらの手法を用いつつ、多条化をみる沈線文はより新しい傾向であり、前期後葉の時期にあてはまる可能性がある⁽¹⁾と示唆されている。

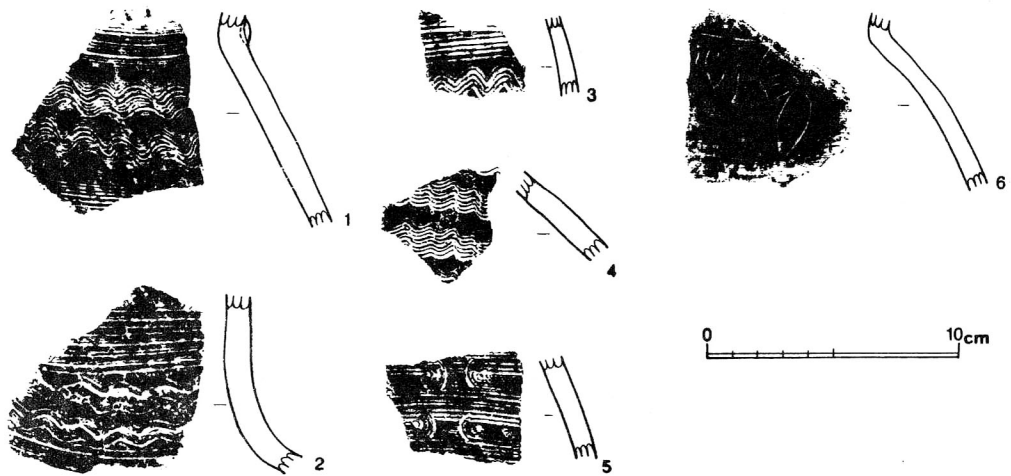


第 14 図 確認調査出土弥生土器拓影

今後、但馬地方における位置付けが必要である。

片引遺跡から出土した弥生土器については、諮意的ではあるが、大半は図化もしくは拓本化した。従って、一つの傾向を知ることができる。

沈線文は直線文が主となるものが大半である。これに波状文が組み合わされるのが目立つ。波状文の描きかたを詳細に観察すると、直線文は多条に使用されているにも拘らず、波状文は 2 本 1 組のクシ (半截竹管状) を用いて描いているもの (第 19 図 60・第 20 図 89) や、多条になっても 2 条ずつの組み合わせで多条になるもの (第 20 図 90・103・106)、多



第 15 図 A地区出土土器拓影（6は古墳時代）

条のクシを用いるもの（第19図66・67）、第19図61・63のように工具を器面から離さず
 いわば尺取虫が歩くように半円ずつ描きながら、波状文を描く稚拙なものもある。また第
 20図88・95・97はより細い工具を用い多条で流麗な波状文をみることができ、中期中葉の
 所産をにおわせるものがある。

第19図 55・59・第21図 148及び第15図5はいずれも直線文を描いた後、クシ状工具で
 半円を描き流水文を意識したものである。5・55は4条1組の工具で内側を中心に半回転
 させたものであるが、直線文と直線文の間に一部ずれた形で施文されている。

C地区（第16・17図）には前期の土器のみで中期の遺物はみられない。沈線は直線文の
 みで多条化の傾向にある。

41は2本1組の沈線文の間に1列の貝殻状施文具による刺突文が施されている。

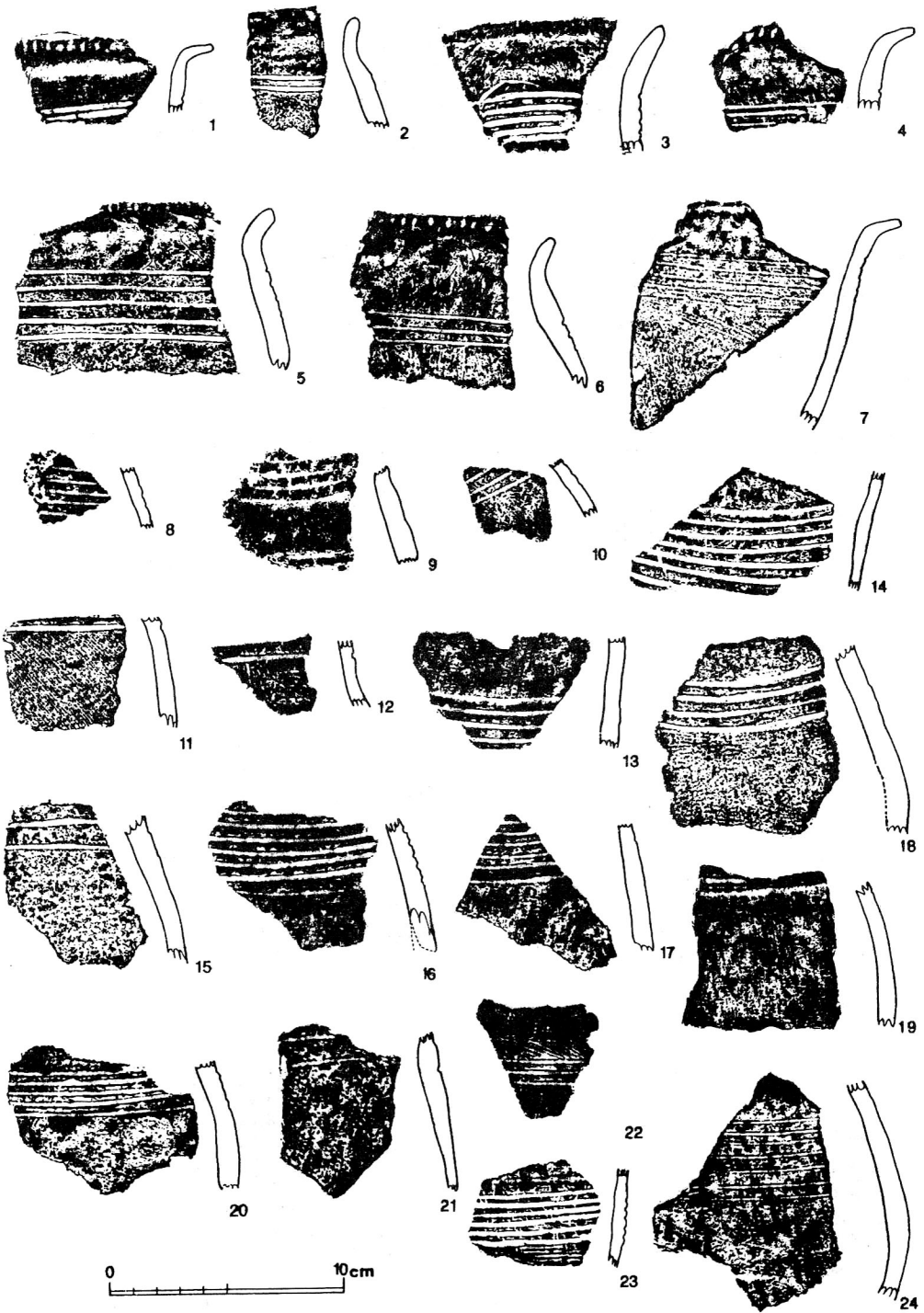
凸帯文には棒状圧痕文を付加するものとそうでないものがある。28や39のように数条の
 凸帯文に上段もしくは下段の凸帯文1条のみに刻み目を施すものもある。

片引遺跡の弥生時代は前期中葉から中期中葉までの時期を想定できるが、前期中葉及び
 中期中葉の土器量はわずか数点のみで、中心となるのは前期後葉、中期前葉である。

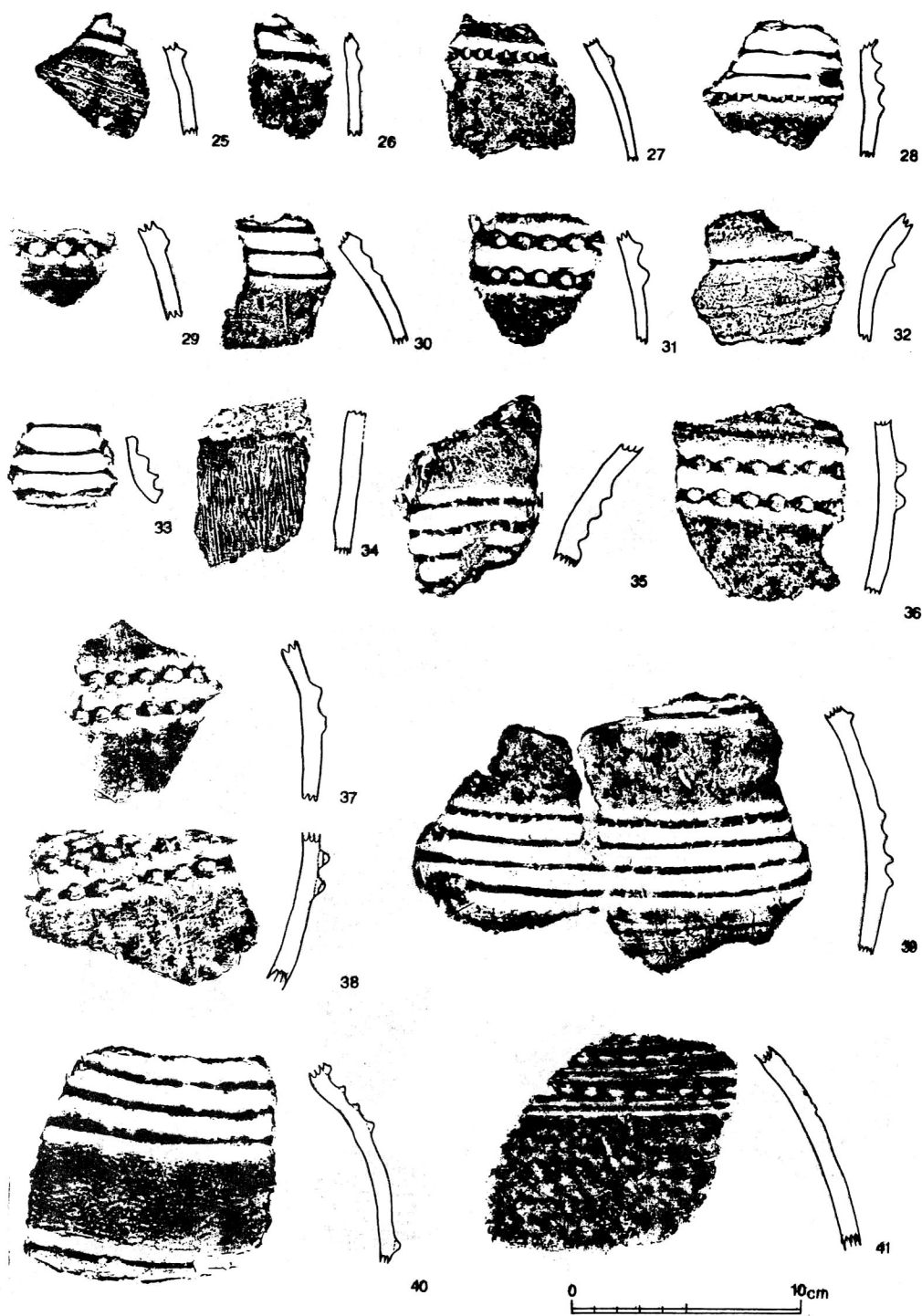
但馬地方では前記の駄坂川原遺跡が縄文晩期の遺物を伴わないが、前期中葉に始まり中
 期中葉まで続いている。標高2mの低湿地に立地している点は、他の但馬の弥生前期の遺
 跡と様相を異にしているが、遺跡のすぐ東側には山魂があり遺跡の中心はこちらの方にあ
 る可能性が強い。つまり、低湿地に存在したのではなく、低湿地より一段高い段丘上や扇
 状地上に立地したとみる方が妥当ではないであろうか。（松下）

注 (1) 潮崎 誠・谷本 進「豊岡市駄坂川原遺跡出土遺物」『但馬考古学』1 1982.11

(2) 井藤暁子「弥生土器—近畿1—」『考古学ジャーナル』195 1981.10



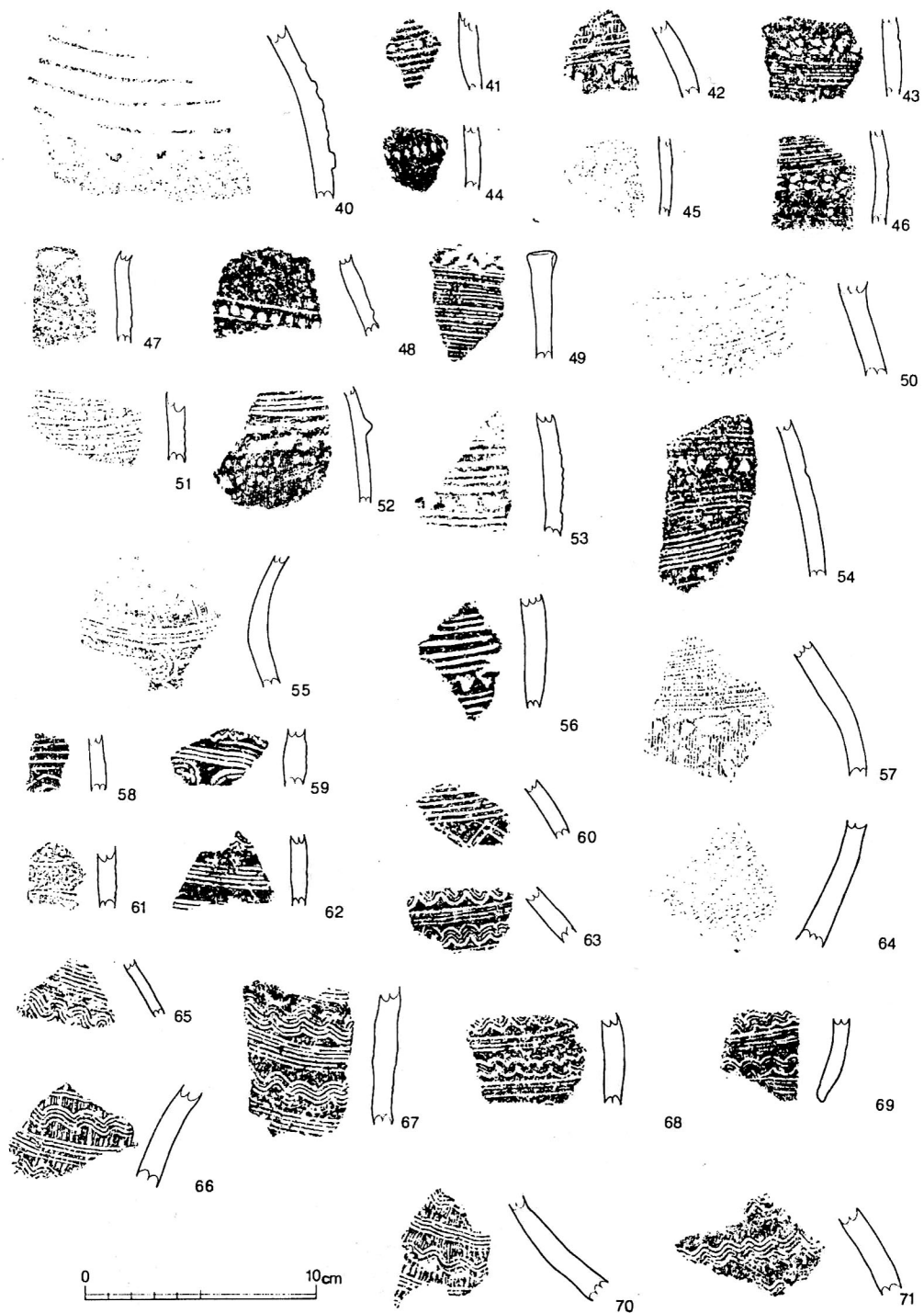
第 16 图 C 地区出土弥生土器拓影(1)



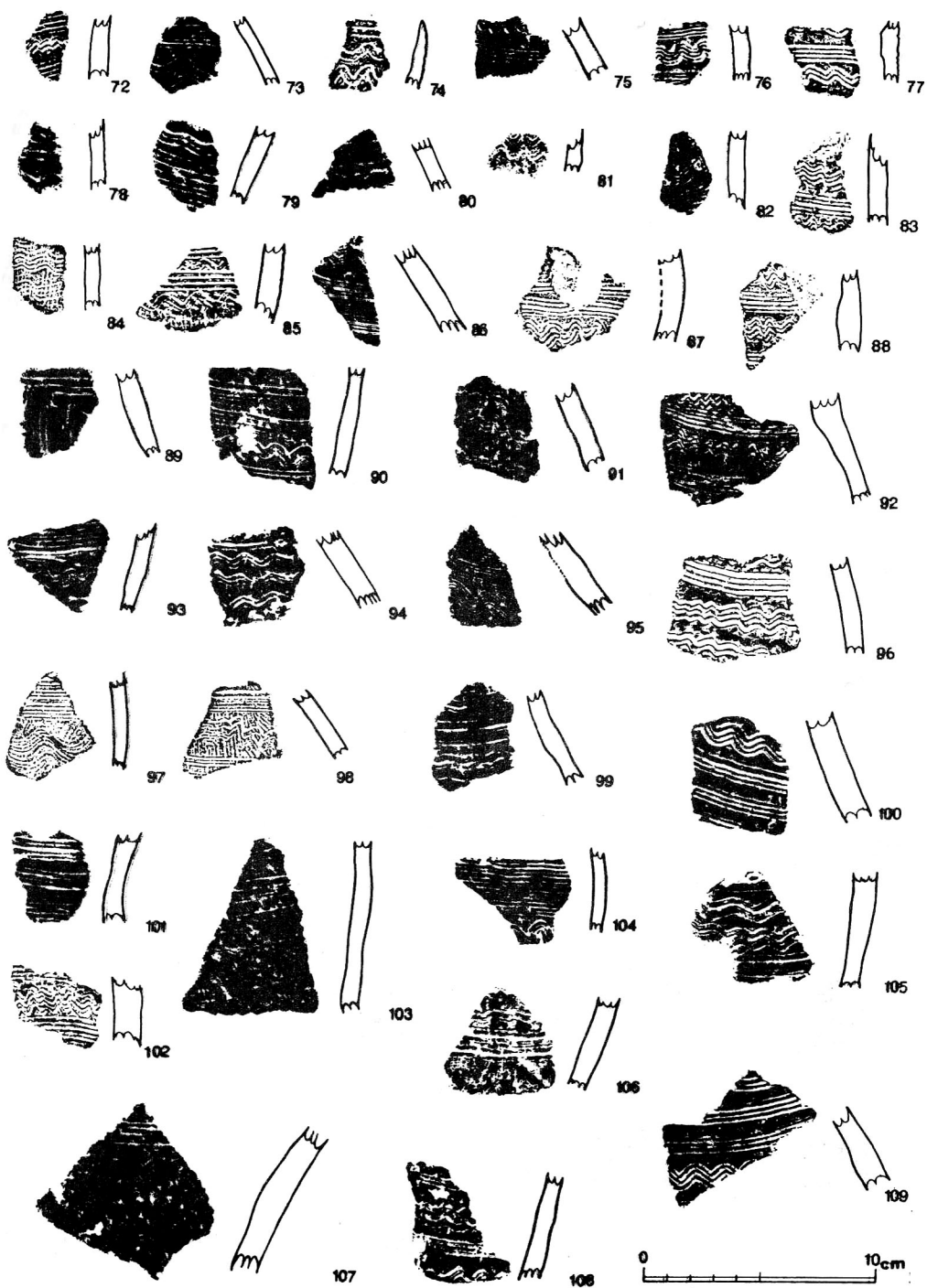
第 17 图 C 地区出土弥生土器拓影(2)



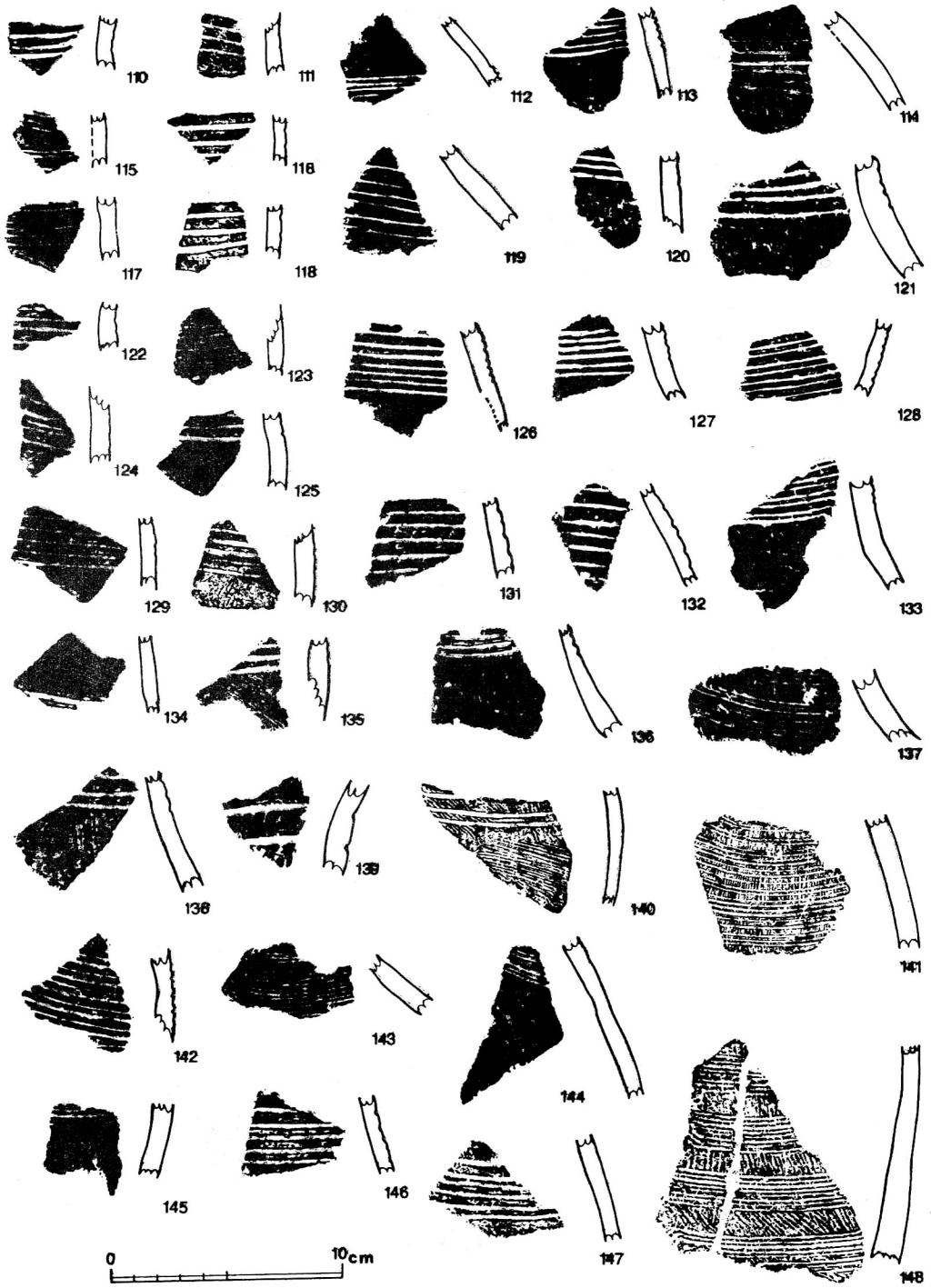
第 18 图 D 地区出土弥生土器拓影(1)



第 19 图 D 地区出土弥生土器拓影(2)



第 20 图 D 地区出土弥生土器拓影(3)



第 21 图 D 地区出土弥生土器拓影(4)

第2表 A・C地区弥生土器観察表

No.	器種	胎土	焼成	色調	法量 (cm)		特徴
					口径	器高	
1	壺	砂粒を含む	良	(内) 淡灰褐色 (外) 〃	(16.6)	(30.4)	口唇端面に段がみられる。 外面は頸部から体部にかけてタテハケののち、5条のヨコ方向クシ描きの直線文がみられ、その上からタテ方向に3条のクシで波状文が施されている。 内面は剥離。 波状文は流水文を意識しているかもしれない。
2	〃	砂粒を含む	良	(内) 灰褐色 (外) 〃	23.0	10.6	口縁部端面：ヘラ直線文のあとにヘラ先刺突文を施す。 頸部：タテ方向のハケの上から7条の直線文（3条1組の施文で工具は2種類と思われる）が2組施されその下にヘラ先刺突文が見られる。
3	〃	砂粒を含む	良	(内) 茶褐色 (外) 〃	15.0	22.0	内外面ともヘラ磨きか。 頸部に2mm幅の4条の直線文が見られる。 体部に黒斑あり。
4	〃	砂粒を含む	良	(内) 灰黒褐色 (外) 〃	15.8	3.3	内外面ともナデか。 頸部に2mm幅のヘラ直線文が見られる。
5	〃	砂粒を含む	良	(内) 灰褐色 (外) 〃	14.4	5.8	内面：ナデか。 外面：口縁部ナデか。 頸部：タテ方向のハケののちヘラ直線文が施される。
6	〃	砂粒を含む	良	(内) 茶褐色 (外) 〃	—	(22.8)	外面：ヘラ磨きののちタテ方向のハケ目（剥離のためあまり残っていない）頸部と体部に4条の刻み目突文。
7	〃	砂粒を多く含む	良	(内) 灰褐色 (外) 〃	19.0	10.0	内外面ともヨコナデ。 口唇端面にヘラ直線文。 頸部に断面三角形の突帯が4帯施されている。
8	甕	砂粒を含む	良	(内) 淡灰褐色 (外) 黒色	19.6	7.2	スス付着
9	〃	砂粒を含む	良	(内) 黒褐色 (外) 黒色	28.6	17.9	内外面ともナデ 外面：口唇端面にヘラ先刺突文が施されている。 頸部から体部にかけてタテ方向ハケ。頸部に3mm幅の直線文が見られる。

第3表 D地区弥生土器観察表

No.	器種	胎土	焼成	色調	法量 (cm)		特徴
					口径	器高	
1	壺	砂粒を含む	良	(内) 淡灰褐色 (外) 〃	16.6	3.1	外面：口唇端面に4条のクシ描き波状文。 内面：口縁部外より内にむかって刺突文、波状文、直線文、刺突文と施されている。
2	〃	砂粒を含む	良	(内) 灰褐色 (外) 〃	15.2	3.5	内外面ともヨコナデか。 口縁部細かいヘラ押し、端面は竹管文。 頸部はタテ方向のハケ。
3	〃	砂粒を含む (金雲母微粒あり)	良	(内) 淡黄褐色 (外) 〃	18.6	7.1	口唇端面へラ刻み目。 胴部にクシ描きであらう直線文が施されている。(2条と4条1組と思われる)
4	〃	細砂を含む	良	(内) 淡茶褐色 (外) 〃	19.8	1.4	内外面ともヨコナデ。 口唇端面にヘラ先刺突文が施されている。
5	〃	良	良	(内) 淡茶褐色 (外) 〃	18.0	1.4	内外面ともナデ (外面は指頭によるものと思われる)。 口唇端面にクシによるものと思われる刻み目が施されている。
6	〃	小石を含む	良	(内) 淡茶褐色 (外) 〃	10.6	7.1	内外面ともヘラ磨きだが、磨減のため方向がわからない。
7	甕	砂粒を含む	良	(内) 淡褐色 (外) 〃	10.8	4.1	内外面とも口縁部ナデ。 外面：体部剥離部分あり。 内面：体部ヘラ磨き。
8	〃	砂粒を含む (石英・金雲母あり)	良	(内) 淡黄褐色 (外) 黒色	22.2	5.5	内外面とも口縁部ナデ。 内面に指頭と思われる痕が見られる。 外面ともスス附着。
9	〃	細砂を含む	良	(内) 淡茶褐色 (外) 暗灰褐色	20.2	4.3	内外面ともナデ。 外面頸部に3条の直線文がある。スス附着。
10	〃	細砂を含む (小石あり)	良	(内) 暗灰褐色 (外) 〃	19.2	7.0	内外面とも口縁部ヨコナデ。 外面：ハケ目のちナデ。 内面：ヘラ削り。

No.	器種	胎土	焼成	色調	法量 (cm)		特徴
					口径	器高	
11	甕	細砂を含む	良	(内) 淡茶褐色 (外) "	19.0	4.2	口縁部をつくりだりだした際の指圧痕が内外面に残る。 口縁ヨコナデ。 内外面ともハケ目。
12	"	細砂を含む	良	(内) 淡茶褐色 (外) "	18.8	3.2	内外面ともヨコナデ。 口縁部にススス附着。
13	"	砂粒を含む	少し軟	(内) 灰褐色 (外) "	24.8	4.6	内外面とも口縁部ナデ。 外面体部にタテ方向のハケ目。
14	"	細砂を含む	良	(内) 淡茶褐色 (外) "	20.6	4.3	内外面ともヨコナデ。 外面：体部斜め方向のハケ目。ススス附着。 内面：口縁部強いヨコナデ。体部斜め方向のハケ目。
15	"	細砂を含む	良	(内) 茶褐色 (外) "	20.0	5.0	内外面とも口縁部ヨコナデ。 外面：口唇端面に斜めに刻み目。体部ハケ目の上からへら描きによる2 条の直線文。
16	"	砂粒を含む	良	(内) 淡茶褐色 (外) "	16.8	4.6	内外面ともヨコナデ。 外面体部に斜めにハケ目。
17	甌	小石を含む	良	(内) 淡茶褐色 (外) "	口径 8.0	(4.3)	内外面ともハケ目。 底部に1cmの孔あり。
18	"	小石を含む	良	(内) 淡茶褐色 (外) "	7.0	口径 4.7	底部はへらで割ったのちナデ。径6mmの孔あり。 体部は内外面ともハケ目。

(2) 石 器

本遺跡出土の遺物のうち、19点を石器としてとりあげた。次の表に示すように、石包丁・石槍・環状石斧・石鋏・砥石・磨製石斧・凹石・叩き石に分類した。

石 庖 丁

① ていねいに整形・研磨された磨製石庖丁である。断面は柳葉形に整っており、刃部は外彎気味で両刃である。両面及び背部とも全面に細かい研磨痕を主として長軸方向に残す。但し、整形時の若干の凹部については磨き残しとなっている。穿孔は無いが、B面背部⁽¹⁾よりに径約1mmの小さな刺突痕が数個集まっており、穿孔を試みた可能性もある。

刃部には細かい刃こぼれがほぼ全体に認められ、特にA面の刃部では幅約2cmの範囲に磨滅による光沢が顕著にみられる。(ドット部)

② 2孔を穿つ磨製石庖丁、直線刃で片刃である。表面に長軸にほぼ平行に製作時の研磨痕を残す。刃部B面側では使用による磨滅が顕著で、刃に対して約60°の方向性を持っており、刃部端面に溝状の凹凸が観察される。紐穴の背部より残存する背部も磨滅が顕著である。

③ 紐穴1つを残す磨製石庖丁で、石材の節理に沿って半損している。刃こぼれなどによる変形が著しいが、原形は両刃の直線刃で半月型に近いものであったと推定される。

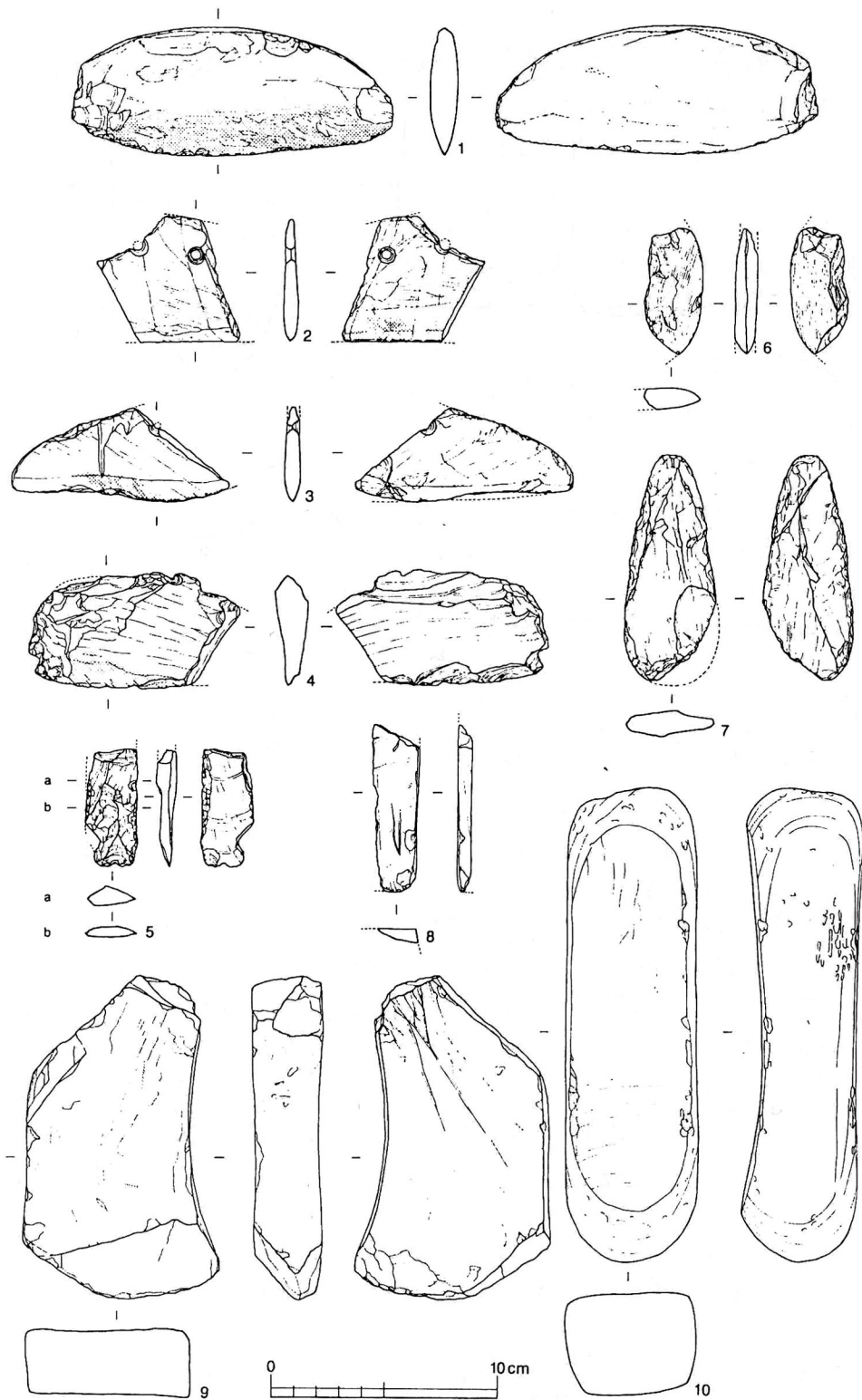
A面刃部では、刃に対して斜めに擦痕が残り、右半分では、磨滅により巾約1mmの刃部端面が、溝状の凹凸により刻まれている。このうち右端部分では刃こぼれによる破損面にも同様の凹凸が認められ、研ぎ直しをすることなく使用を継続したことがうかがえる。また、A面刃部左側部分は使用による刃こぼれが顕著であり、背部も一部刃こぼれ状に破損している。

④ 扁平な素材の周囲を加工して製作した打製の不定形刃器である。

A面刃部は使用による磨滅が顕著で、刃に対して約45°の方向性を持つ条痕が認められる。刃部端面の磨滅も顕著で、一部B面側に及んでいる。A面左寄りの部分では表面の剥落が著しいが、残存部分をみると磨滅が顕著で、周囲に及んでいることがうかがえる。背部、及びB面右端部にも磨滅部分があり、掌中で使用した場合の手ずれのあとがうかがえる。(A面左側部分には親指があてがわれていたのであろう。)

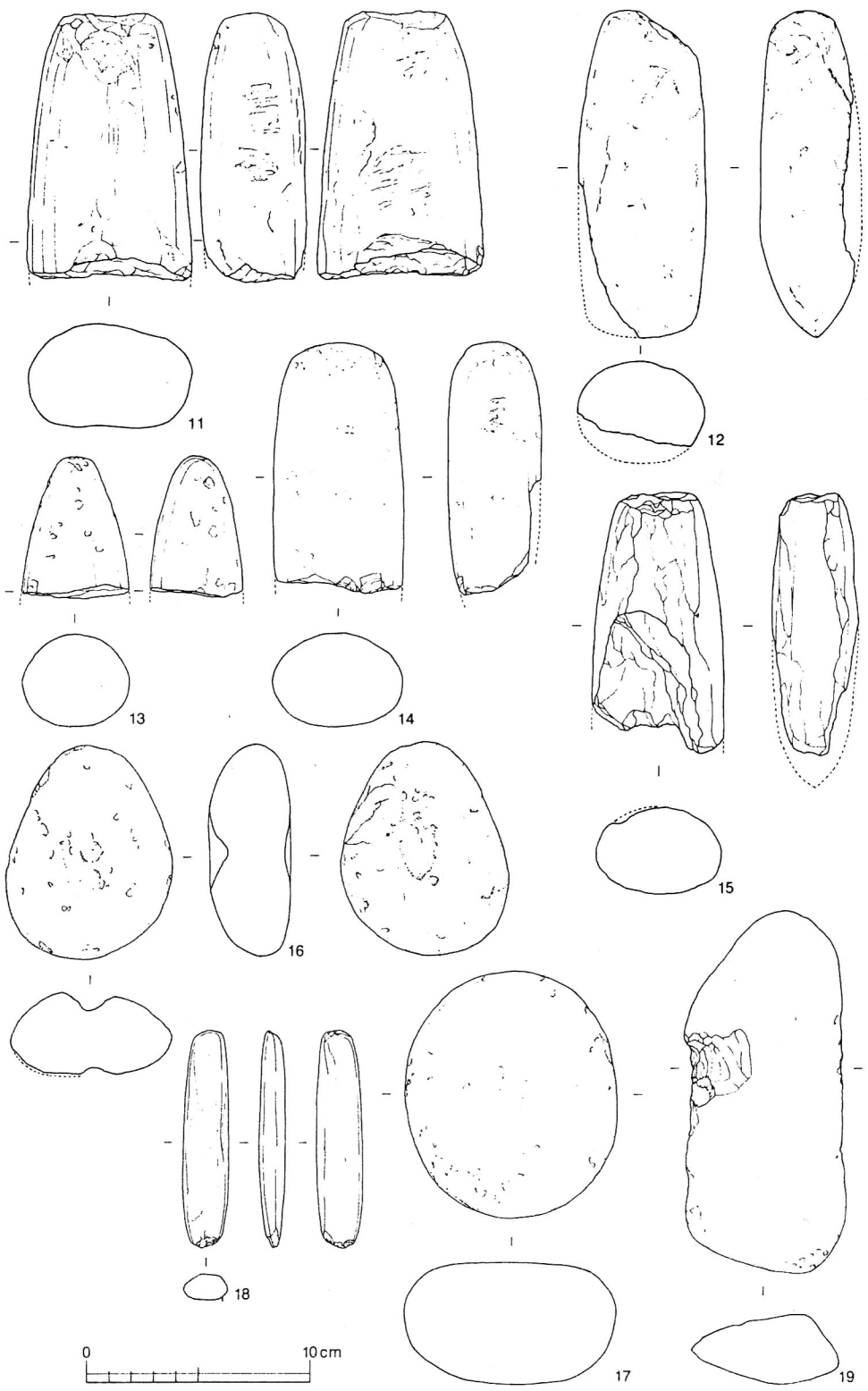
刃部の片面に磨滅が集中し、条痕を残すのは、本遺跡出土石庖丁の他の3例(①～③)と共通しており、石庖丁と同機能を果たした刃器と考えられる。

但馬では、豊岡市駄坂川原遺跡、同市中ノ郷深谷遺跡などからも、同様の機能が想定される打製刃器が出土している⁽²⁾。いずれも、いわゆる「打製石庖丁」(備讃瀬戸を中心に分布し、サヌカイト製、両端抉入の打製品で、画一化された製品として、播磨南部にまで及んでいる。但馬では発見された例を見ない。)とは、大きさ・形態・製作技法・石材等の



1～4 ドット部は使用による磨滅が顕著な部分を表わす

第22図 石器実測図(1)



第 23 图 石器实测图 (2)

点で、かなり異なっている。但馬の3例には、形態、製作技法などの共通点はあまり認められず、一つの定型としてまとめることは難しいが、小型であること、打製刃器を穂摘み具として使用した可能性が高いことから、小型不整形打製石庖丁と仮称しておきたい。

「不整形打製石庖丁」の呼称は「紫雲出」⁽³⁾の報告で、佐原氏が不定形刃器の一部に対して使用されているもので、この他に不定形刃器として報告されているものの中にも、このように呼べるものがあると思われる。（「田能遺跡」⁽⁴⁾では不定形刃器のうち、「掌中にて使用したもの」として報告されている。）ただし、形状、材質などの共通性を基に一つの類型としてまとめることは難しく、散在的、在地的に、いわゆる「石庖丁」に準ずるものとして製作、使用されたものと考えておきたい。

石 槍

⑤ 縦長剥片の両側辺を両面より調整して刃をつくり出しており、先端部を欠く。B面は大剥離面をそのまま残し、A面側は、断面三角形の稜をつぶして加工している。基部をはじめ、形態上不自然な部分が多く、未製品の可能性もある。

環状石斧

⑥ やや扁平な環状石斧の刃部破片で、復元径は約10.4cm。表面にタテ方向の細かい研磨痕を残し、整形の際にできた凹部は一部そのまま磨き残しとなっている。刃部には若干の刃こぼれがあり、刃に直交して擦痕がわずかに認められる。

打製石鋏

⑦ 周囲を調整加工し、くつべら状の形に仕上げている。両側辺の調整はほぼ同様になされており、両辺とも磨耗が著しく丸味を帯びている。そのため、これら両側辺のうちの一辺を刃とする刃器とは比定し難く、図の様な形で石鋏状の石器と考えておきたい。刃部と考える下辺は使用により一部欠けたものと思われるが欠損面にも使用による擦痕が認められ、現状形での使用もなされている。

両側辺に直交する擦痕が、A B両面の側辺沿いに部分的に認められるが、着柄によるものであろうか。

砥 石

⑧ ほぼ直交する2つの砥面を残す小破片。2面とも、極めて平滑になっており、よく使い込まれている。部分的に条痕が観察できる。

⑨ A B面及び両側面の4面を使用したやや大形の砥石。A面は他の砥面に比べて素材表面の凹凸が残っており、平滑化されていない。他の3面はよく使い込まれており、右側面は弧状に反っている。各面共、主として縦方向の擦痕が多く認められるが、B面では左上

端部から斜めに鋭く細い条痕が走っており、左上角に集中して鋭いものをあてがって砥いだようである。又、A面左下半部及び左側面中央部には磨滅による光沢がみられる。

⑩ 棒状を呈しており、側面及びB面は幾分滑らかになってはいるが、主用面はA面で、よく使い込まれ、弧状のカーブを持つ。

中央部に研磨による光沢が顕著に見られ、下端部には波紋状の凹凸ができています。若干の縦方向の条痕を残す。又、両端面（特に上端）敲打痕が認められる。

磨製石斧

⑪ ややゆがんだ楕円形の断面を持ち、刃部は欠損している。A面基部中央とB面ほぼ中央部分に敲打によると思われる凹みがある。B面のものは横方向に条痕様に削られており、右側面にも2カ所の横方向の溝状痕があり、着柄に際しての使用痕の可能性もある。しかし刃部破損面の両角部分は、鋭さがなくつぶれており、破損後、叩き石として転用された可能性が高い。

⑫ 整った楕円形の断面を持ち、整った形の蛤刃石斧である。刃部左側からB面側にかけて大きく欠損しており、使用の際の打撃によるものであろう。刃部には刃に直交して縦方向の擦痕及び刃こぼれが認められる。又、欠損部分の稜に鋭さがなく、幾分つぶれており、擦痕が観察でき、破損後もそのまま継続したようである。

⑬ ほぼ円すい状に尖った基部の破片である。全体を敲打によりていねいに整形しており、A面中央部に研磨痕を残す。

⑭ 刃部からB面にかけて大きく欠損している。両側面とA・B面の下半はていねいに研磨されている。右側面及びA面の基部寄りに横方向に溝状の削痕が認められる。（着柄の際につけたものか）又、右下端部の欠損部の角がつぶれており、叩き石として再使用した可能性もある。

⑮ 表面風化、破損が著しく、刃部からA・B両面にかけて大きく欠損している。両側面と一部に研磨面を残すが、大部分は剥落している。右下端部はつぶれて丸味を帯びており、敲打に使用した可能性もある。

凹石・播り石・叩き石

⑯ 卵形の扁平な川原石で、両面中央部に凹みを持つ。特にA面中央部に半球状の深い凹みができており、意図的に孔を穿とうとしたものであろうか。

⑰ 扁平な楕円形状の川原石で、上面が研磨によりほぼ平滑になっている。わずかに擦痕が残っており、播り石として使用したものであろうか中央部には、敲打痕らしきものが一部に残っており、最初、叩き石として使用していたものを転用した可能性もある。

⑱ 細長い川原石を利用した小形のやや扁平な乳棒状のもので、表面全体に細かく長軸方向の研磨痕を残しており、特に中ほどはていねいに磨かれている。下端部は、敲打による

と思われる欠損、及び、若干の磨滅が認められ、叩き石として使用されたようである。

⑱ やや扁平な川原石の、刃状に鋭角を持つ一側辺（左側辺）に、部分的に敲打によると思われる欠損部があり、叩き石として使用されたようである。右側辺にも細かい敲打痕が部分的に残っており、持ちやすくする為に加工したようである。（友久伸子）

〔註〕

- ① 平面図で左側においたものをA面、その裏面をB面とした。
 ② 瀬戸谷皓他「深江・中ノ郷遺跡」但馬考古学研究会 1985年
 （この中で弥生時代石器の項については、筆者が担当したが、執筆と発行の前後により重複部分があることを御了承いただきたい。）
 ③ 小林行雄・佐原 真『紫雲出』 1964年
 ④ 福井英治他『田能遺跡発掘報告書』尼崎市文化財調査報告書第15集 1982年

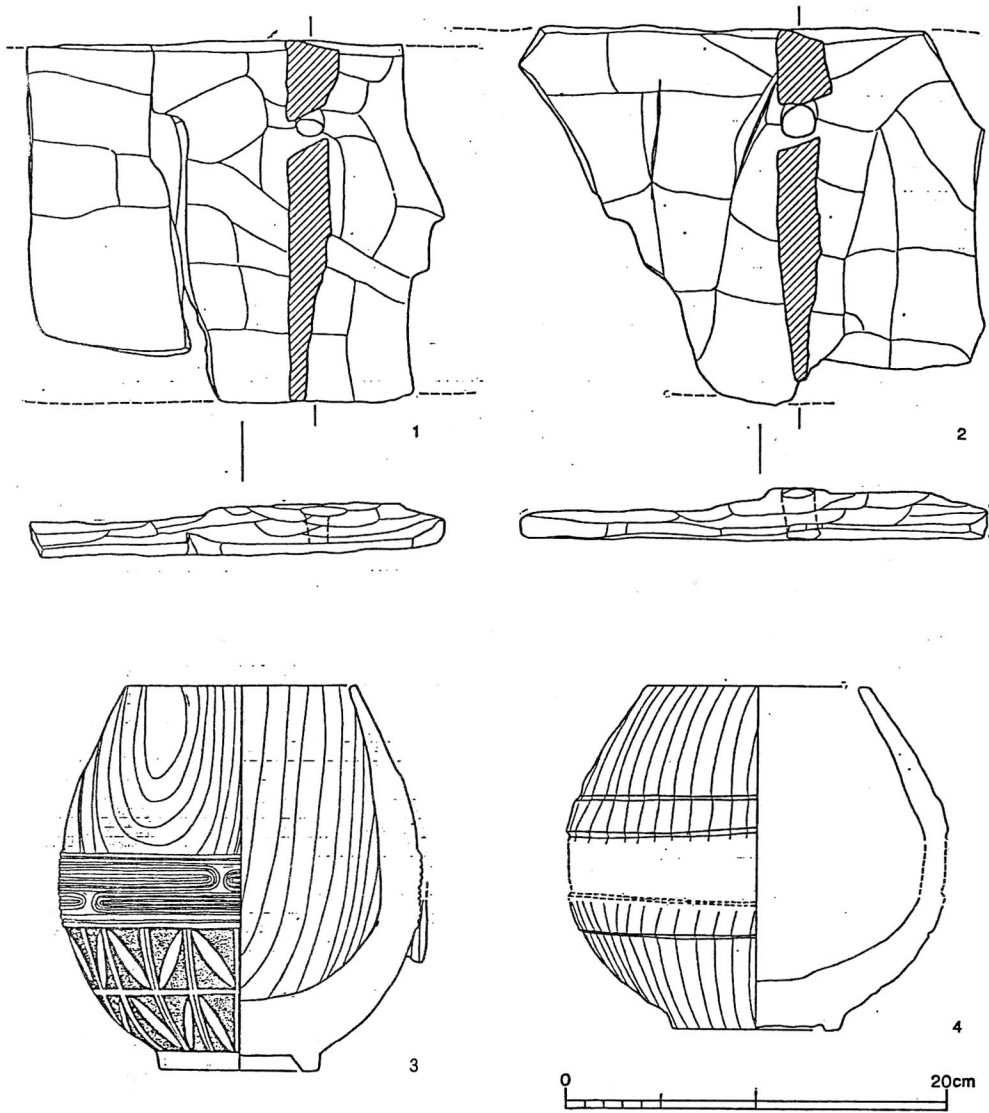
第 4 表 石 器 観 察 表

番号	出土地点・土層	器種	石 材	最大(現在) (cm) 長	巾	厚 さ	備 考
1	42 G 拡張・暗黒褐粘質土	石 庖 丁	サヌカイト	14.15	5.65	1.2	
2	" . "	"	砂質粘板岩	(6.3)	(5.55)	0.65	
3	" . "	"	"	(9.6)	(4.05)	(0.7)	
4	" . "	"	サヌカイト	(9.4)	5.15	1.4	
5	10 G 拡張・灰褐砂層	石 槍	"	(5.25)	2.3	(0.85)	
6	42 G 拡張・暗黒褐色粘質土	環状石斧	"	(5.6)	(2.5)	(0.9)	
7	10 G 拡張・灰褐砂層	石 鍬	"	9.95	3.95	1.15	
8	" . "	紙 石	安 山 岩	(7.4)	(2.05)	(0.65)	
9	50G北拡張・第5層黒色粘土層	"	流紋岩(岩脈)	14.2	8.65	3.2	
10	11 G・第3層灰褐色土層	"	硬 砂 岩	20.8	5.8	5.6	
11	10 G 拡張・灰褐砂層	磨製石斧	閃 緑 岩	(11.9)	(7.4)	(4.7)	
12	42 G 拡張・暗黒褐粘質土	"	緑 色 岩	12.5	(5.65)	(3.85)	復元4.4
13	10 G・灰褐砂層	"	花 崗 岩	(6.35)	(4.8)	(4.15)	
14	42 G 拡張・暗黒褐粘質土	"	花崗閃緑岩	(11.15)	(5.85)	(4.2)	
15	4 G・	"	緑 色 岩	(11.6)	(5.9)	(3.9)	
16	42 G 拡張・暗黒褐粘質土	凹 石	流 紋 岩	9.5	7.45	3.6	
17	10 G 拡張・灰褐砂層	播り石	安 山 岩	10.95	9.5	5.4	
18	" . "	叩き石	サヌカイト	9.7	2.05	1.15	
19	10 G・	"	流紋岩質 凝 灰 岩	16.05	7.2	3.05	

(3) 木 器

弥生時代の木器はC地区に限られている。大溝状の落ち込みの層から出土しており、弥生前期の少量の土器と共伴している。

木器の出土量は、自然木もある程度含まれるが、それを加えても多いとは言えない。加工の加えられている板材も2点あるが、器種が明らかに出来るものは4点だけである。容器・農耕具があり、前者は壺で後者は丸グワである。



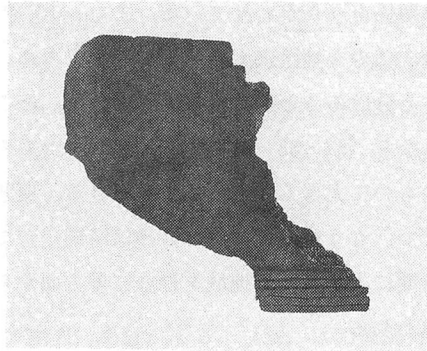
第 24 図 弥 生 時 代 木 器 実 測 図

(1)(2)は丸グワ未製品で粗割り・粗削・穿孔が終了した段階で、1本から横並びに数個予定されていた未製品の一部と思われる。接合面はないが同一個体の可能性が高い。長さは19.0cmで、残存幅は(1)が21.3cm、(2)が24.8cmを測る。

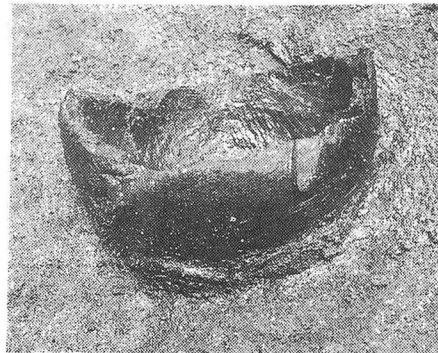
(3)は壺で一部欠損している上に数個に分かれている。樹種はヤマグワでくって作っている。高台を削り出しており、中央に突帯を有している。突帯は0.3~0.4cmと低いものである。突帯には流水文を施しており、3条の刻線によって流水文を描いている。横に長いトラック状のものを4組2段施したものと思われる。高台は径9.5cmで高さ1cmの輪高台を削り出している。高台内面に工具の痕跡が見られる。突帯にかかるように瘤状隆起が付加されている。底面から6.5cmのところの隆起の下端がある。厚さは1.5cm前後で断面の形状は菱形をしている。弥生前期の鉢形土器に見られるものと同様のものと思われる。対面が残存していないので、対になるかどうか決定出来ない。全体の形状は卵形に近い形で、器高23.8cm、口径14.0cm、底径9.5cm、最大腹径22.2cmを測る。器壁は底部で3.2cm前後と最も厚く、口縁部にいくほど薄く仕上げられており、口縁端部では0.4cmと薄くなっている。端部は丸く仕上げている。内面は細かい工具で丁寧にくっており、平滑に仕上げられている。

突帯と高台までの胴部下半に黒漆による装飾が施されている。肉眼では観察出来ないが、赤外線カメラによって木葉文が観察された。漆が塗布された木葉文については奈良国立文化財研究所 工楽善通氏によるものである。また、樹種鑑定については奈良国立文化財研究所 光谷拓実氏にお願いした。

(4)も壺で、口縁部と底部に分割されており、さらに幾つかに分かれている。保存状態も劣悪で器表は残存していない。実測図は図上で復原したものである。(3)に比べて球形に近いプロポーシオンを呈し、口径12.0cm、底径9.0cm、推定器高18.0cmを測る。最大腹径19.6cmで、この部分に上下二段の突帯を削り出している。底面は平滑でなく、全体的な仕上げも(3)に比べて粗雑である。高台の高さは3cm前後で輪高台である。厚さは底部で2.4cmで徐々に薄くなり、口縁端部は0.7cmで、端部は角張り気味である。内面は丁寧にくっている。(渡辺)



第 25 図 木器壺(3)口縁部



第 26 図 木器壺(3)出土状況

3. 古墳時代の遺物

(1) 土 師 器

A地区の遺物は大きく、壺・甕・高杯・鉢・器台等に分けられる。だいたい時期は、古式土師器が主である。これらの土器を分類するにあたって、まず、Ⅰ類を二重口縁のもの、Ⅱ類を単純口縁のものとし、器型の厚さやプロポーション・文様の有無などから特徴を抽出し区別してみた。

壺は二重口縁を有する山陰系のもの（Ⅰ類）と畿内で通有な単純口縁のもの（Ⅱ類）と古墳時代前期に特に普及する小型丸底壺に大別してみた。いずれも肩があまりはらず但馬地域によく見られる器形である。また、調整面でも幅のあるヘラで内面を削りこのあたりにも地域性がうかがえるようである。壺に関しては全体的に古式の土師器とってよいと思われる。

甕は二重口縁で擬凹線をもつもの（62・63・64）ともたないものに分け、また単純口縁のものは内面が肥厚するもの（40・42・43・44）と肥厚しないものに分け、さらに細分してみた。その中で、(61)のように叩き目を施したものがあるが、これは、隣接地域の丹後との関係をうかがわせている。また(110)の甕は丹波からの搬入品である。だいたい甕の量は、このA地区出土の遺物の大半を占め、観察表でも分かるように細分化していくともう少し分けることができるようである。そこでこの甕を特に二重口縁のもので古い順に並べるなら（62・63・64）の擬凹線をもつもの→擬凹線をもたず無文のもの→体部に文様をもつものに大きく並べることができる。擬凹線をナデ削すようになる時期も口縁の厚み等等などで、もう少し観察していけば時間差がでるのではないかと考えられる。そのため、この時期に入ると隣接地域を仲介に多方面から技術はもとより種々な影響を受けているように思われる。

高杯は二重口縁のものと単純口縁のもの二種で、二重口縁のものは全て無文である。また脚部は(143)のようにスカシをもつものともたないものがある。また、当遺跡の高杯は、製作の仕方が比較的分かりやすく実測できる点数は少ないが、破片等の接合方法においてこの時期多くみられる「さし込み法」と「貼り付け法」を用いている。中でも実測図にも接合面の分かるものは破線で記入しておいたが、(144)のように当遺跡では「貼り付け法」が主流をなしているようである。さらに詳しくみるなら「貼り付け」の方法にも、貼り付けた際、押し出された粘土を削っただけのものと、貼り付ける時下から棒状のものでささえて接合したものがある。後者の接合方法は、奈良・平安時代にも見られることから前者に比べ若干新しい要素を持っているのではないかと考えられる。いずれにせよ、高杯においては出土点数も他の器種より少ないため充分なことは述べられないが、分割整形についてももう少し詳しく観察していけば意味のあるものと考えられる。

器台は、山陰地方に見られる(116・117)の鼓形器台が数点出土している。隣接する山陰地方であるにもかかわらず、出土点数は少ない。周辺地域をみても、鼓形器台の点数はどことも少ないようである。この鼓形器台を圧倒するのが布留式の小型器台であるが、小型器台は、中空のものと、中実のものに分けられる。また、(129)のように口縁に波状文を施しているものが1点含まれている。

鉢は、(33)の「こしき」と、台無鉢に分けられる。(32)・(36)は高杯b-a'の杯部をみるようである。

低脚杯も若干ではあるが出土している。但馬周辺でもあまり出土例はなく今後、この器種については注意しなければならないと考えられる。しかし、まず山陰地方に多くみられるものではないかと思う。

以上、簡単に土器について説明してみたが調整もヘラ磨き、ヘラ削り、ヨコナデを主流とし、胎土も砂粒混りのものから細砂混りのもの、色調も褐色に赤みをもったものと淡いものが主である。焼成もだいたい全て良好である。全体的に特に調整面で特徴と思われるのはヘラ削りの幅が播磨地域で見るヘラ削りより幅が広いことである。このことは地域性を表していると考えられる。

その他、当遺跡出土の遺物を観て考えていかなければならないことは、遺物の特徴からも分かるように山陰系のものと畿内系のもののが出土している。その量は同程度でどちらからも影響をうけていたと単純には考えられる。しかし、周辺地域をみて、ある器種は畿内系のもののが圧倒的に多いという報告もなされていることから、当遺跡においても単純には考えられず、地域性ということをあわせて考え、さらに検討していかなければならないと思う。

小型土器

いずれも手づくね的で(158)は壺形土器で胴部に黒斑がある。(159)は口縁部付近をヨコナデ、他の部分はハケによって調整している。(160)は高さ3.5cmでナデによって仕上げている。(161)は高さ3.0cmの器台形土器を模している。(162)は4.9cmの土製の匂玉である。

以上の土製品はA地区出土でいずれも古墳時代前期の所産と考えられる。

まとめ

石野博信氏が「但馬の古式土師器⁽¹⁾」を述べて以来、資料は着実に増えているにも拘らず集落遺跡から出土する古式土師器の実態については、その域を超えていない。それは同一時期に使用されたと思われるもの、また、層序によって前後関係が明らかになったものが皆無に等しいという実態に帰因するところが大きい。

ここでは但馬地方における古式土師器の実態に触れつつ、今後の見通しの一・二を述べ

たい。

各地で弥生時代～古墳時代の土器の細分化が行われているが、但馬地方では資料不足であり、隣接する播磨・丹波・丹後・伯耆地方とのそれと整合・不整合性を問うには、古式土師器の実態が把握されていないのが実情である。

最近、1、2の報告書が公刊された。いずれも須恵器が出現する直前の古式土師器として報告されている。

森内秀造氏は出石町田多地小谷遺跡出土土器のうち、擬凹線文が消失し、ナデ調整を行っている甕形土器（甕A₂）は、旧流路からの出土で古い様相の土器と混在している可能性を持つとしながらも、セットになる壺形土器・高杯形土器が布留式併行期であること、底部は丸底になることなどからより新しい時期の所産と考えている。

また、池田正男氏は、田多地小谷遺跡から1800 m離れた出石町宮内遺跡出土土師器を先の森内氏の論を受けつつ、第四群土器群を庄内式、第V群土器群を布留式併行期に比定している。

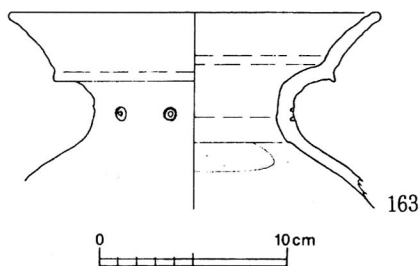
両遺跡は円山川の下流域に近い六方川及び出石川の氾濫原を利用した遺跡であり、円山川本流とは至近距離にある。土器の構成はほぼ似たような状況を示している。

一方、片引遺跡の遺物の検討であるが先述したとおり層分けがしない包含層からの出土であるため、型式差による細分は可能であるが前述したように良好な資料が存在しない。従って今後の発見をまって将来にそなえることにし、ここでは須恵器を伴わない古墳時代前期の土器とだけ記しておきたい。

ただ、62～64のようにクシ状工具による擬凹線文をもつ甕形土器と40～44の口縁端部が内側に肥厚する甕形土器とは明らかに時期差をもつものである。また、山陰系土器と称される二重口縁をもつ土器は、内面へラ削りによって器壁を薄く仕上げているにも拘らず、該地の土器に比して厚い。これは在地による土器製作によるものであろう。4・6は壺形土器の肩部に羽状の刺突文を、第10図22・25、第27図163のように竹管文を施すものもあり、土器のもつ地域性が読みとれる。甕形土器は山陰系の系譜をひくものが、「く」字形を呈する甕形土器に比して圧倒的に多い。

丹後系と称される口縁部の立ち上がりが比較的短く、端部が丸く終る甕形土器は、ほとんどみられないにも拘らず、中空の柱状部、外上方へほぼ直線にのびる頸部受部もしくは二重口縁をもつ器台形土器は丹後地方でも見受けられるが、丹波地方でもその類例が増えており、鼓形器台に比してかなり目立つ。田多地小谷遺跡でも同様のことがいえる。但馬地域における実態を表わしていると理解したい。

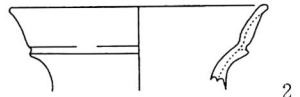
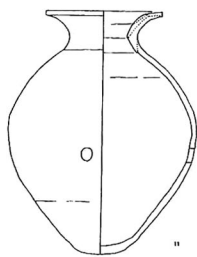
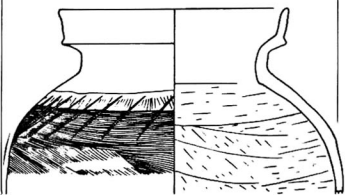
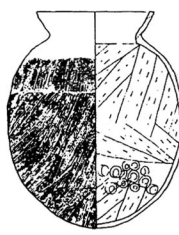
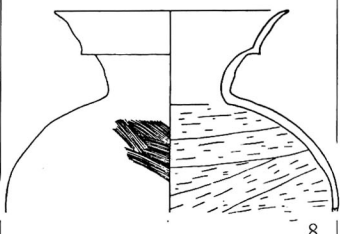
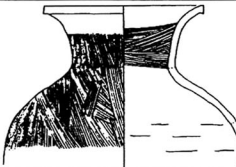
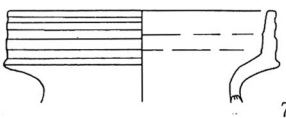
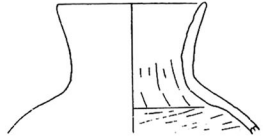
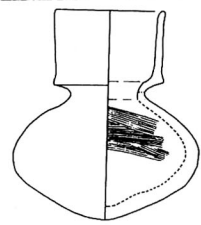
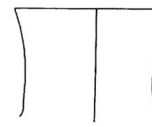
(松下)


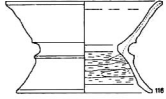
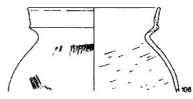

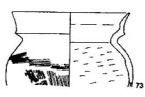


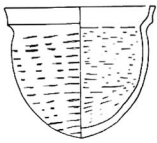

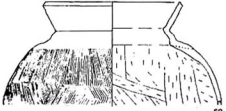



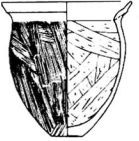
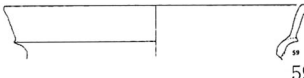
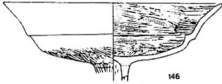
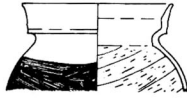
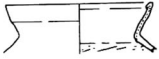
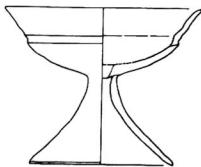


第 27 図 壺 実 測 図

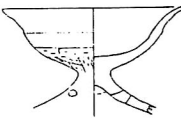
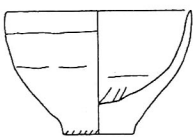
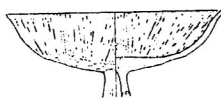
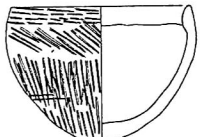
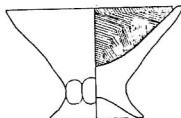
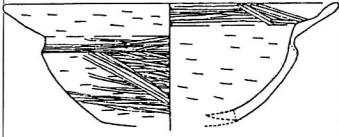
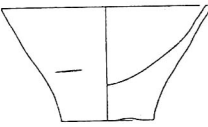
- 注 (1) 石野博信「但馬の古式土師器」『兵庫県埋蔵文化財調査集報』3 1976.6
 (2) 森内秀造『田多地小谷遺跡』兵庫県文化財調査報告書17 1983.3
 (3) 池田正男・森内秀造『出石・宮内遺跡』出石町文化財調査報告書1 1984.3
 (4) 例えば
 平良泰久『曾我谷遺跡発掘調査概報』園部町埋蔵文化財調査報告書2 1977.3
 渡辺 昇外『古代祖先のあゆみ』篠山町教育委員会 1980.11
 松下 勝・岡田章一・渡辺 昇『丹波・口阪本遺跡』西紀・丹南町教育委員会 1981.3
 中村孝行「青野遺跡第5次発掘調査概報」『綾部市文化財調査報告』9 1982.3
 村川義典『春日七日市遺跡』春日町 1984.11

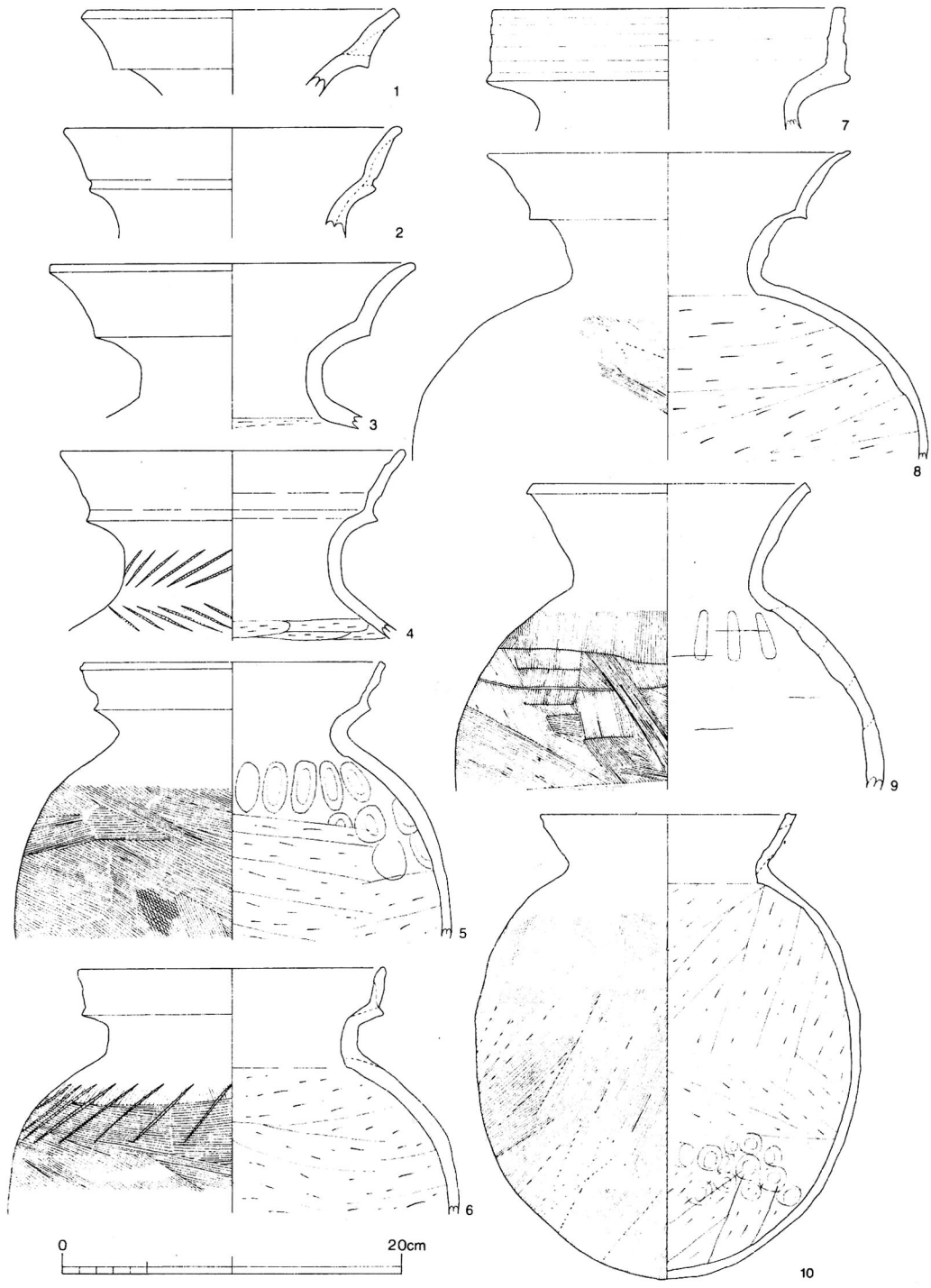
第5表 土師器分類表 (永島真知子作成)

器種		特徴	器種		特徴	
壺	A	 2	壺	A	 11	
	B	 6		B	 10	
	I C	 8		II	C	 12
	D	 7		類	D	 13
	E	 15		類	E	 39

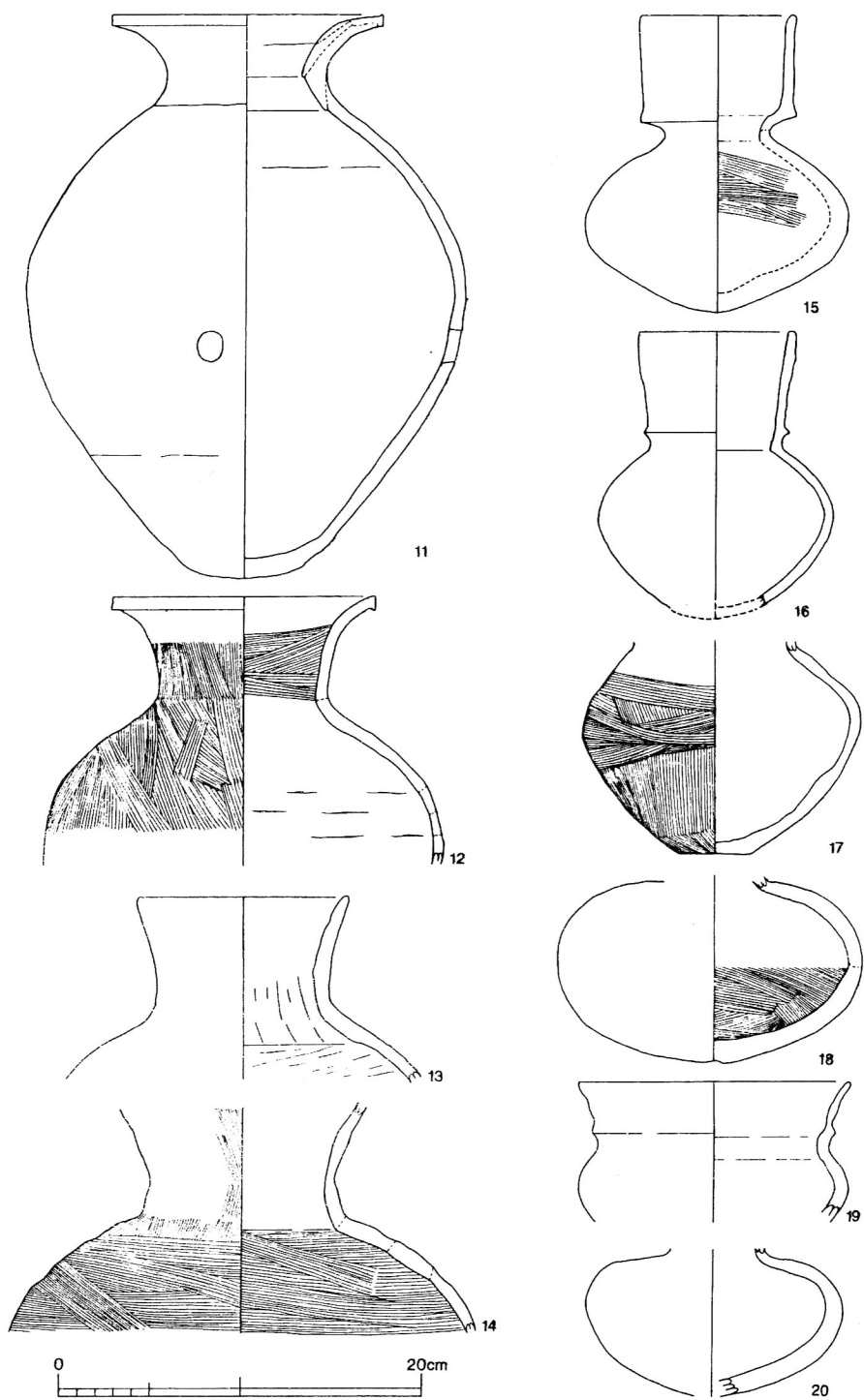
器種		特徴	器種		特徴
小形丸底壺	A	 27 二重口縁で頸部が屈曲し直立気味の口縁	器	G	 142 上下台とも直線的に延びる。鋭い稜線
	B	 30 二重口縁で頸部のくびれがほとんどない		H	 136 上下台とも稜やかに外反
	C	 31 内面に明らかな稜線を持ち、内彎する短い口縁		I	 130 椀形のもの。作りは粗い
	D	 21 単純口縁(くの字形)		J	 138 中実のもの
台	A	 -123 厚手で直線的に延び、稜を作って外反する	台	K	 116 ツツミ形
	B	 126 外反して明らかな稜線を持ち、再び外反するもの		A	 64 擬凹線を持つもの
	C	 129 直線的だが稜を持つ		B	 106 口縁が直立するもの
	D	 140 直線に延び稜を持ってから外反する。高杯かもしれない		II C	 92 Bと同じで文様を持つもの
	E	 131 丹が塗られ塗装		D	 73 口縁端部が丸くおさまるもの
	F	 141 下台が大きく、上台は直線的		E	 95 Dと同じで文様をもつもの

器種		特 徴	器種		特 徴		
甕	F	 -74		D	 57		
	G	 60	甕	E	 51		
	H	 109		F	 55		
	類	I	 110	類	G	 56	
		J	 59		I A	 146	
		K	 71		高	I B	 145
			 100			I C	 152
	甕	A	 42	林	I D	 150	
		B	 48				
		C	 50				

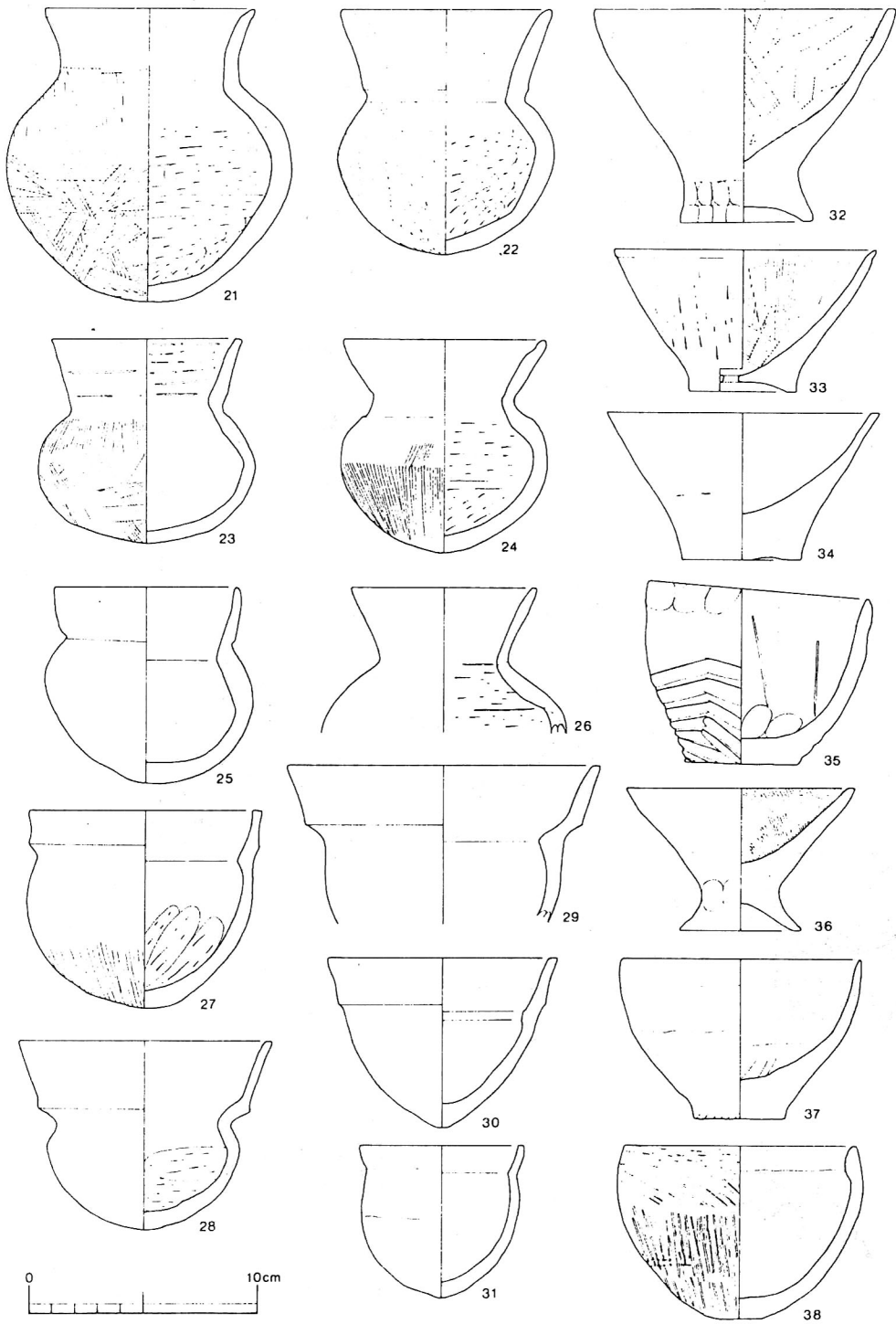
器種		特 徴	器種		特 徴
高杯	II A	 143	鉢	C	 37
	II B	 144		D	 38
鉢	A	 151	E	E	 36
	B	 34			



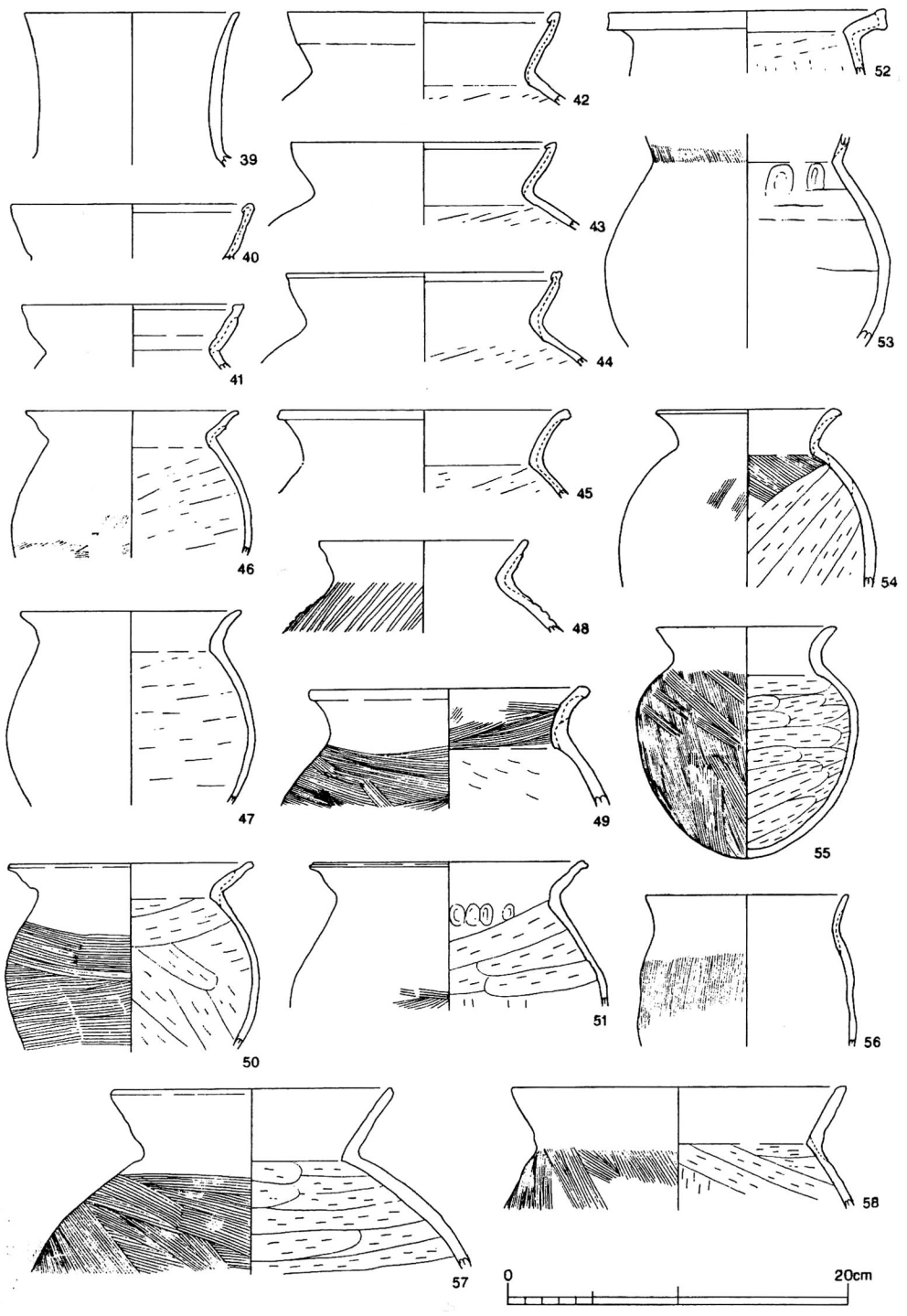
第 28 图 A 地区土師器实测图(1)



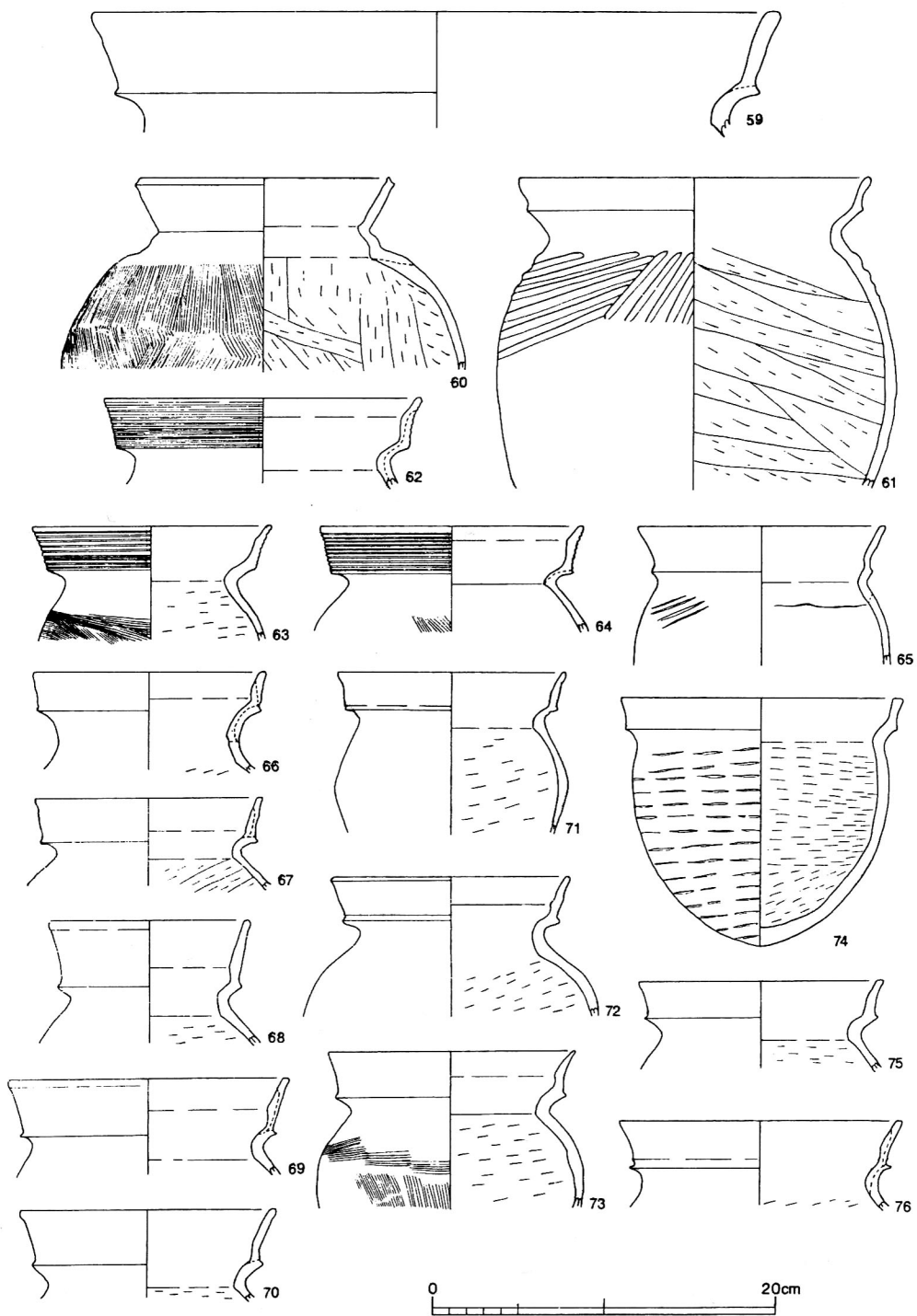
第 29 图 A 地区土師器実測図(2)



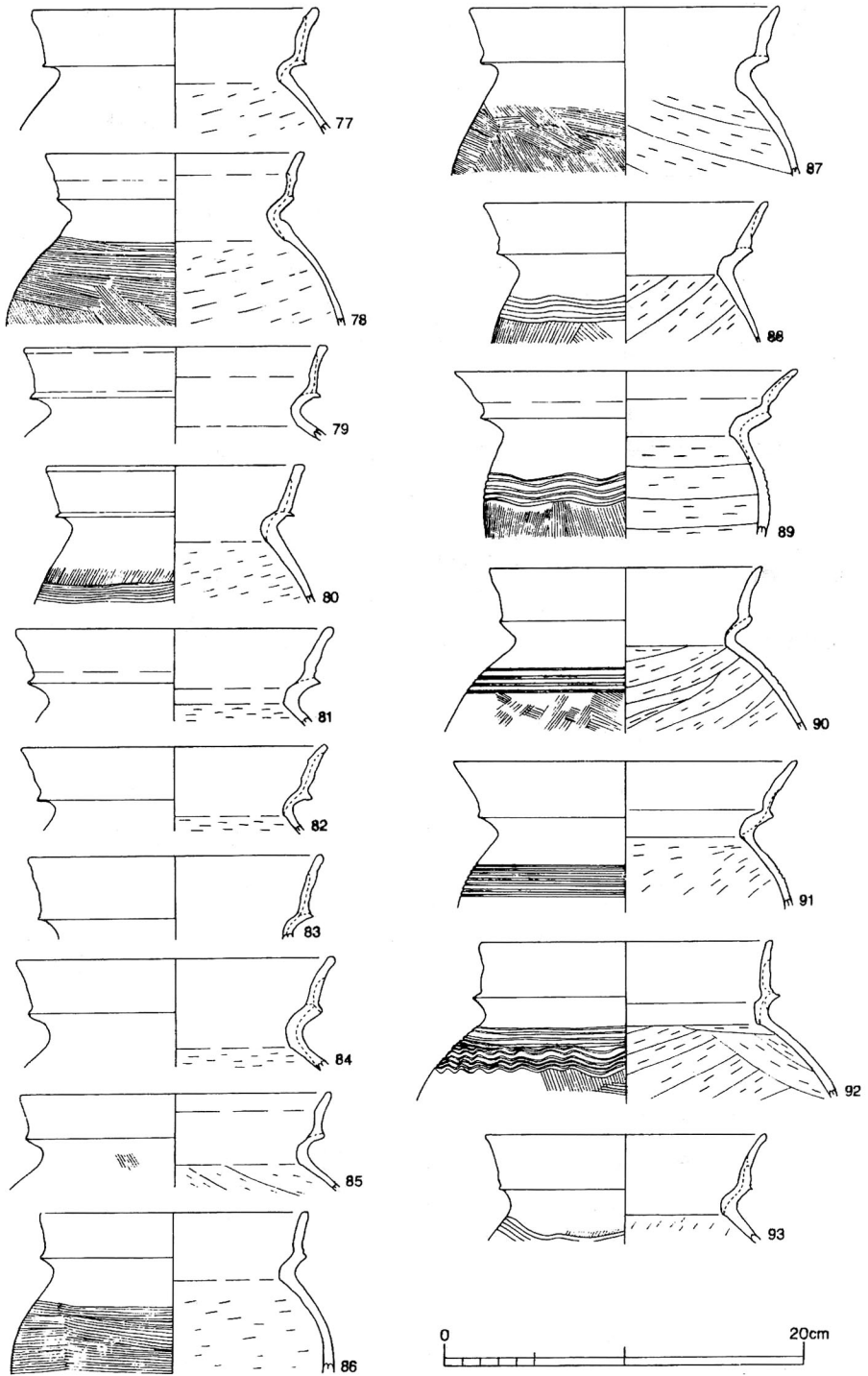
第 30 图 A 地区土師器実測図(3)



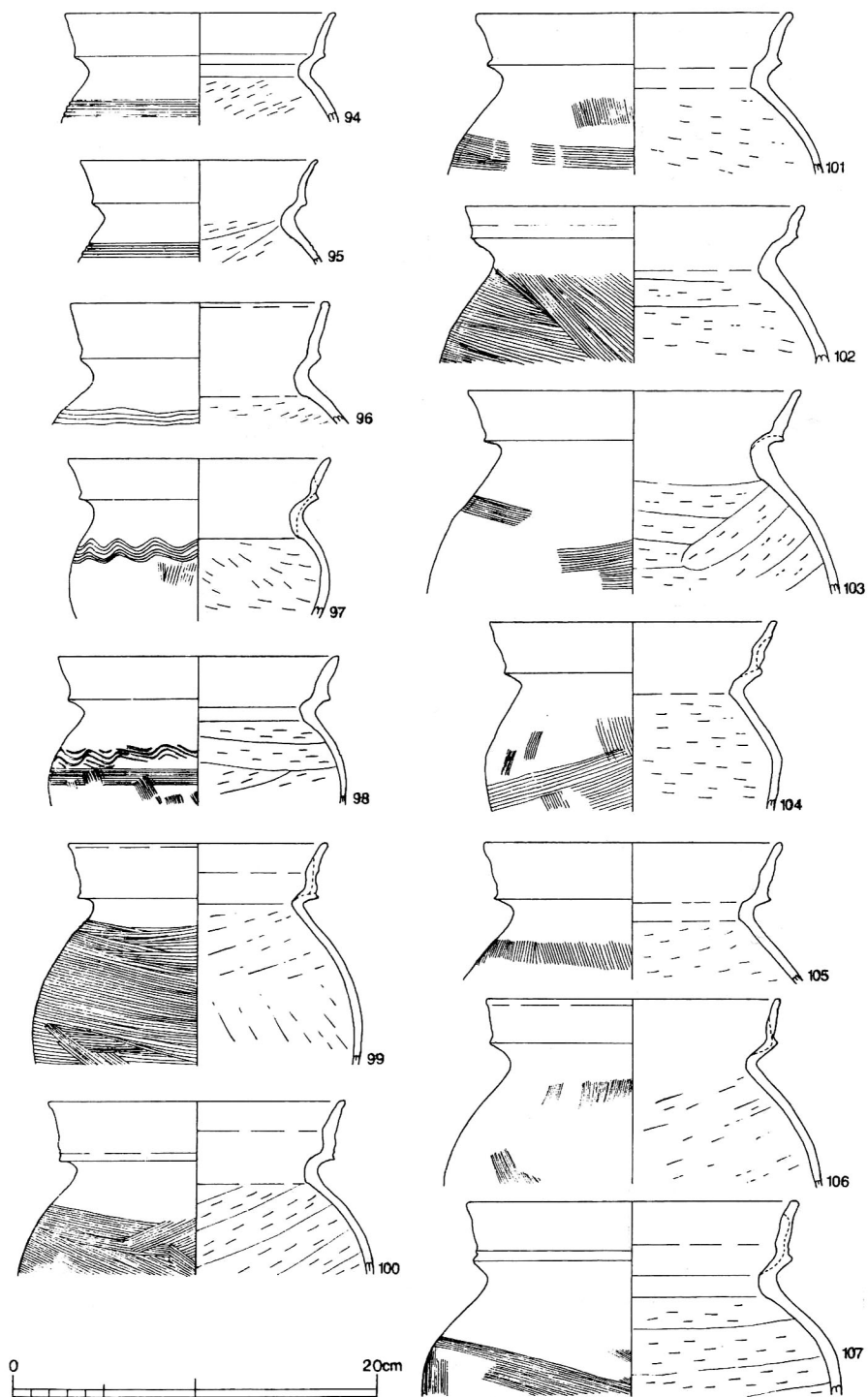
第 31 图 A 地区土師器実測图(4)



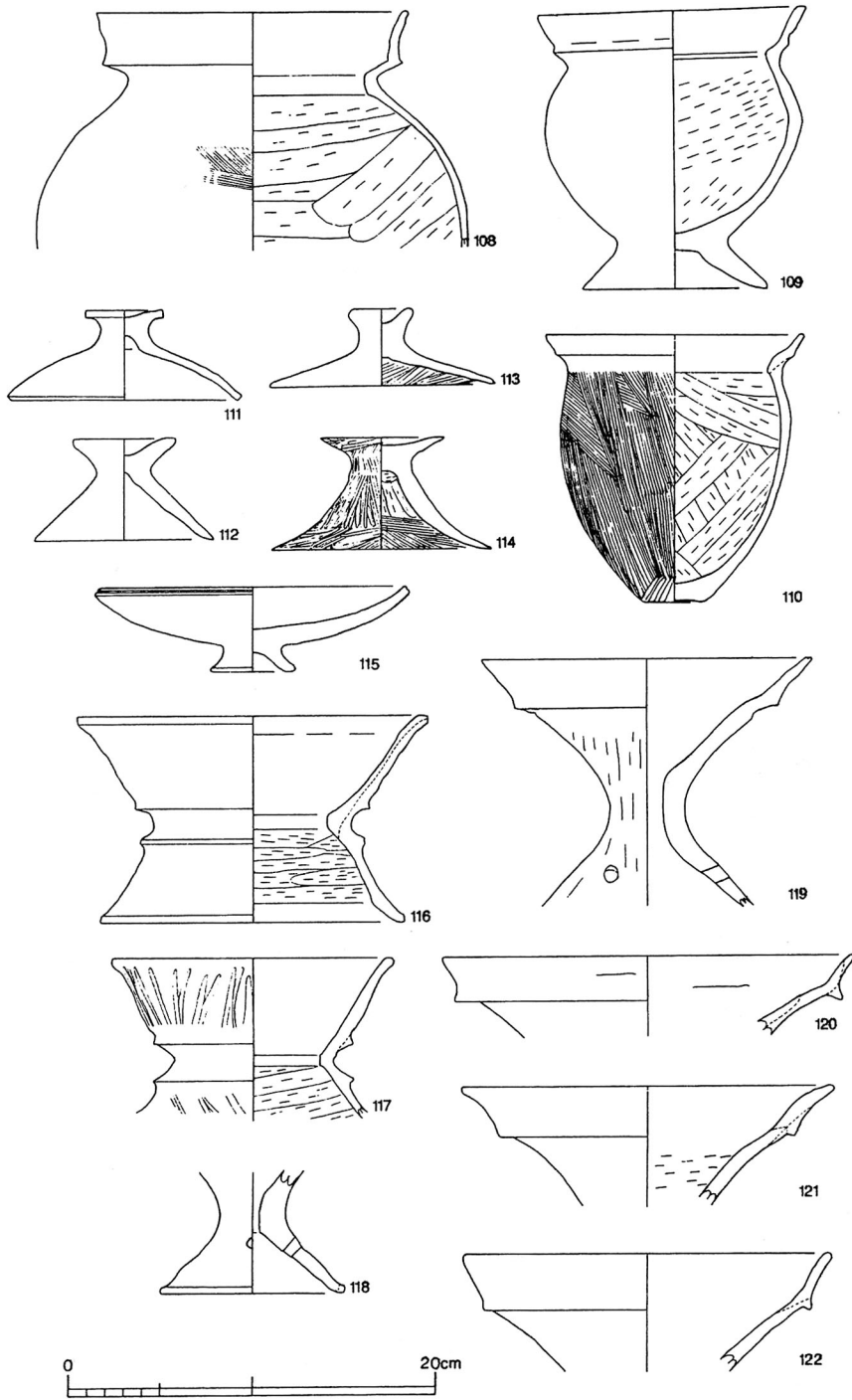
第 32 图 A 地区土師器実測図(5)



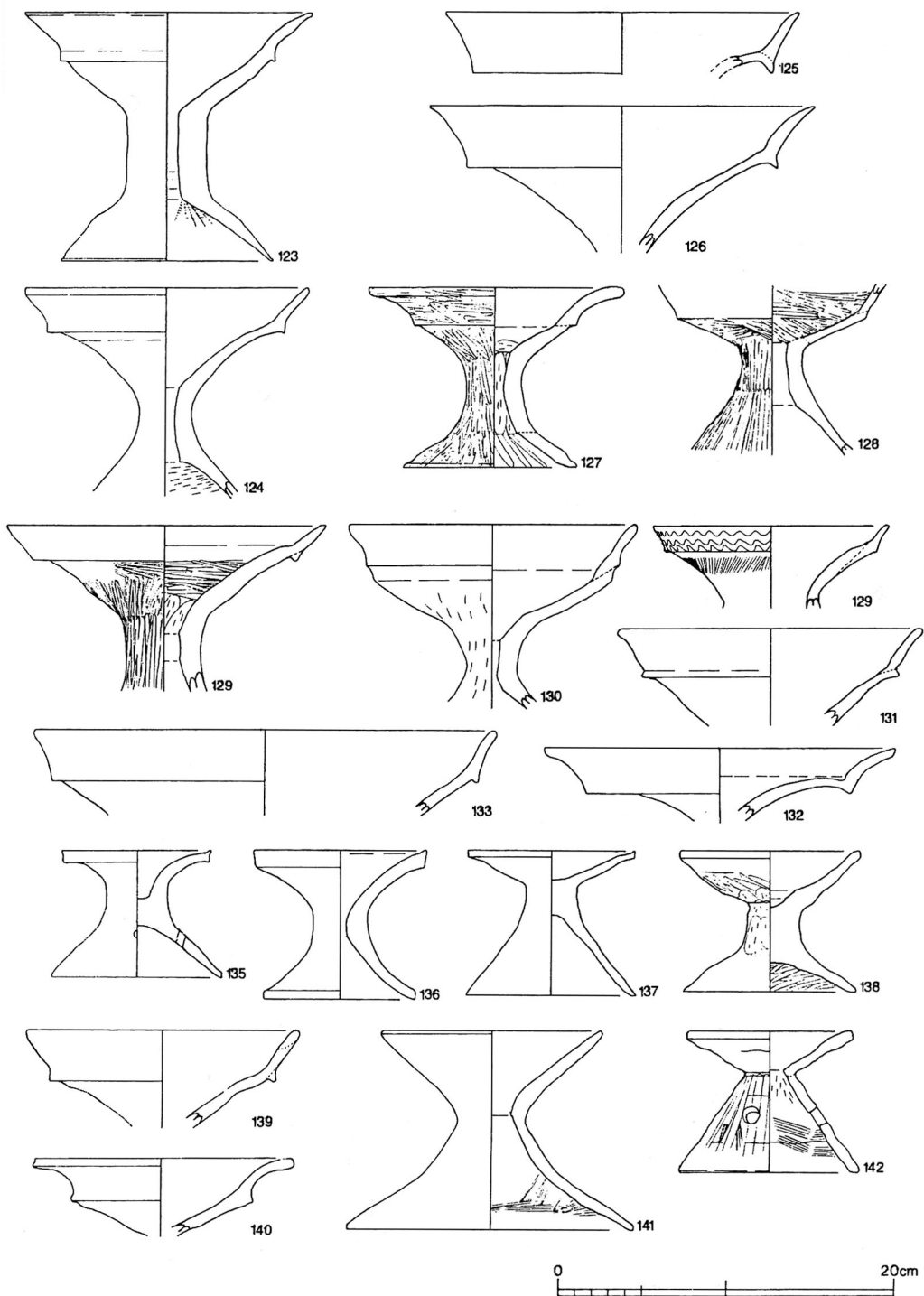
第 33 图 A 地区土師器実測図(6)



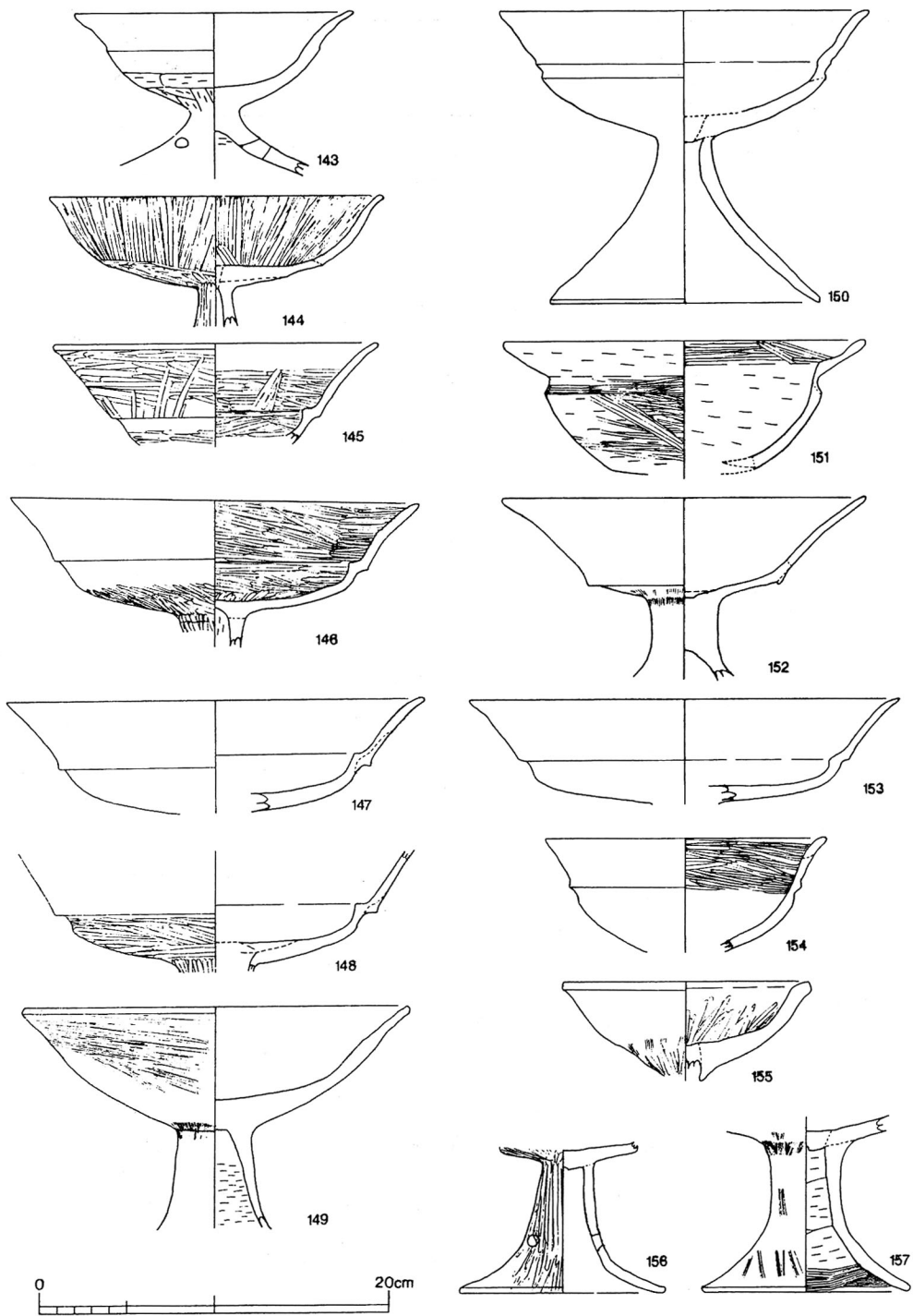
第 34 图 A 地区土師器実測图 (7)



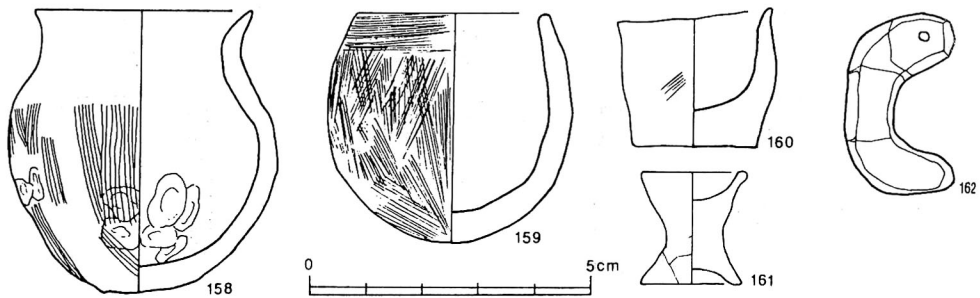
第 35 图 A 地区土師器実測图(8)



第 36 图 A 地区土師器実測図(9)



第 37 图 A 地区土師器実測図(10)



第 38 図 A 地区土師器実測図 (11)

(3) 木 器

古墳時代の木器は100点余り出土している。そのうち、図化したものは48点である。その内訳は、農耕具5点、祭祀具2点、機織具2点、容器7点、生活具8点、建築材8点、矢板・杭10点、不明5点である。

農耕具〔(1)~(5)〕

農耕具は5点図化しているが、他に農耕具の原材になろうかと思われるカシがある程度確認されている。図化した5点は1点ずつ異なっている。

(1)はナスビ形の又鋤である。鋤先・柄部は共に欠失している。残存長27.2cmを測る。柄部の厚さ1.6cmと厚いものである。

(2)もナスビ形着柄鋤の柄部の破片である。幅6.0cmで、長さは不明である。残存部端部に縛り痕が認められる。

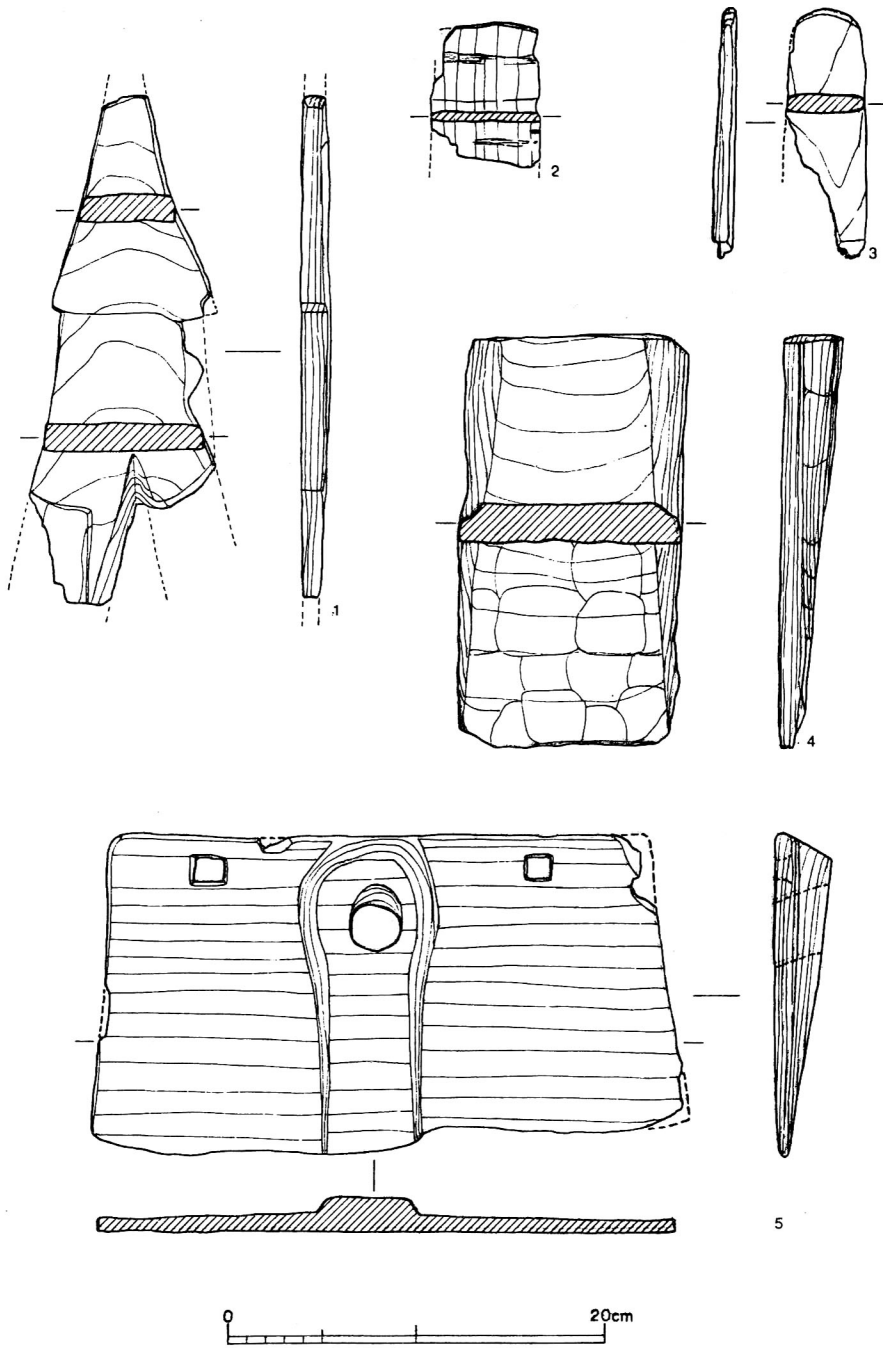
(3)は何の農具になるか不明であるが、材質から農具とした。残存長13.1cmを測る。

(4)は粗作り段階の鋤の未製品である。現況からは平鋤と考えられる。粗削りの工具の痕跡が明瞭である。幅12.0cm、長さ21.4cmを測る。

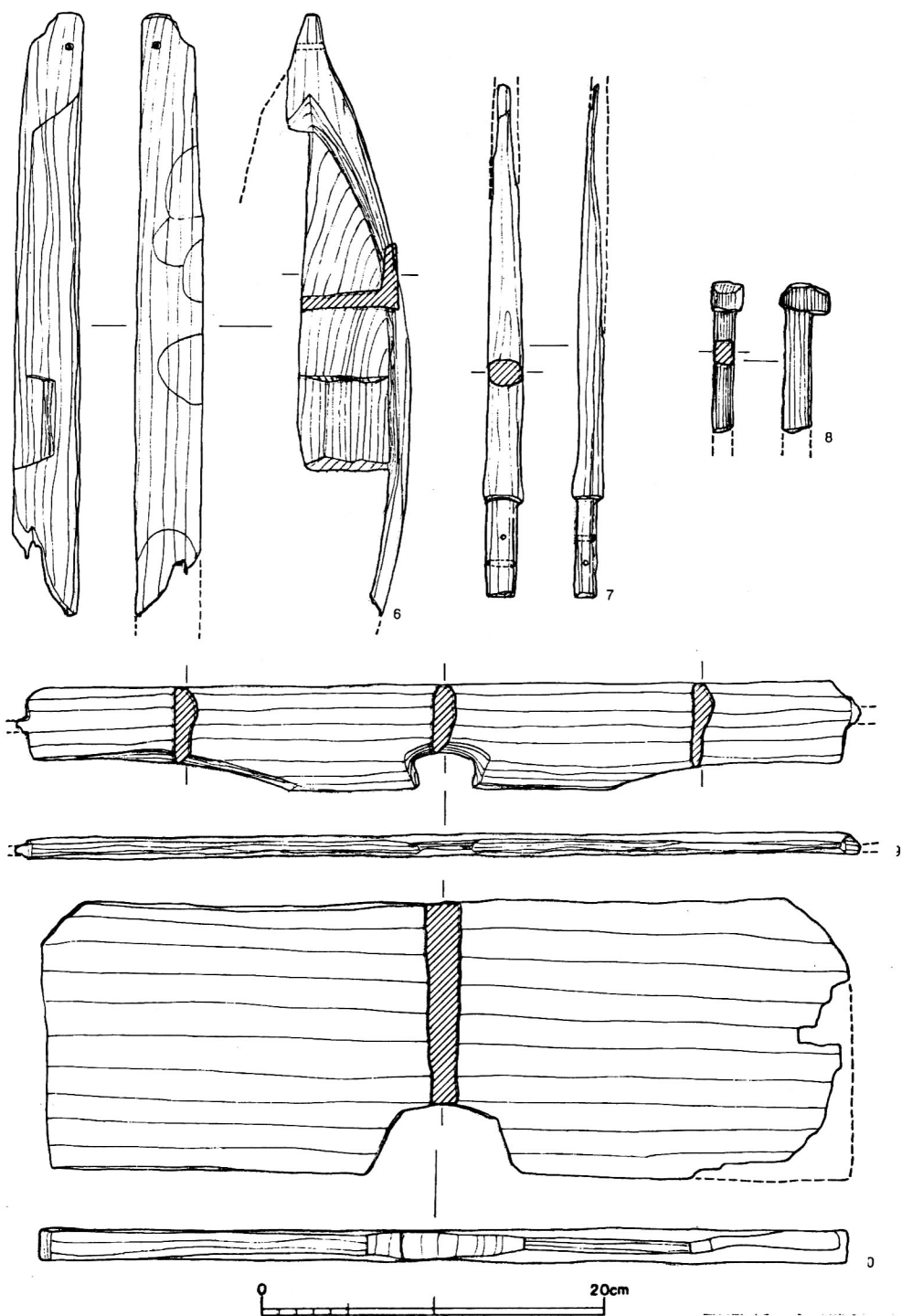
(5)はエブリの完形品である。刃部幅31.4cm、上部幅29.0cm、長さ16.4cmの平面台形を呈している。中央に舟形隆起を作り出している。柄部の着装状況から舟形隆起を下にして使用したものと思われる。また、上部に2ヶ所の柄と本体を支える方形の孔がある。舟形隆起と端部との中央に穿たれている。

祭祀具〔(6)(7)〕

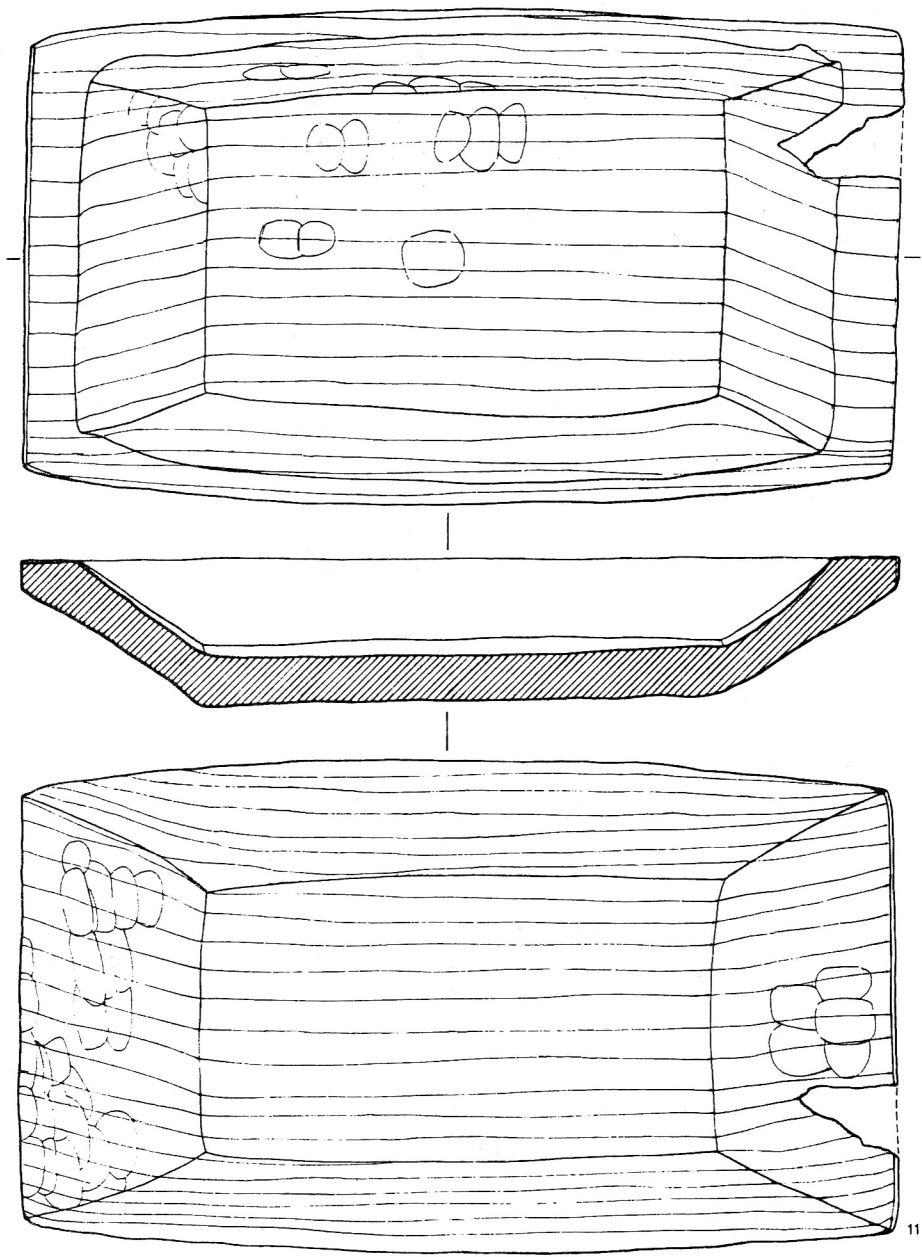
2点の祭祀具が出土している。(6)は舟形木製品である。全体的に保存状態は良好でなく脆弱である。船尾を欠いているものの、ほぼ全長は推測出来る。残存長34.8cmを測る。舳先は具体的に表現しており、円孔を穿っている。側部の船腹外面は手斧で成形した痕跡が窺われる。船尾が欠失しているが、リアルに表現された模造品である。高さ6.0cmで、幅は11cm前後になろうかと推定される。



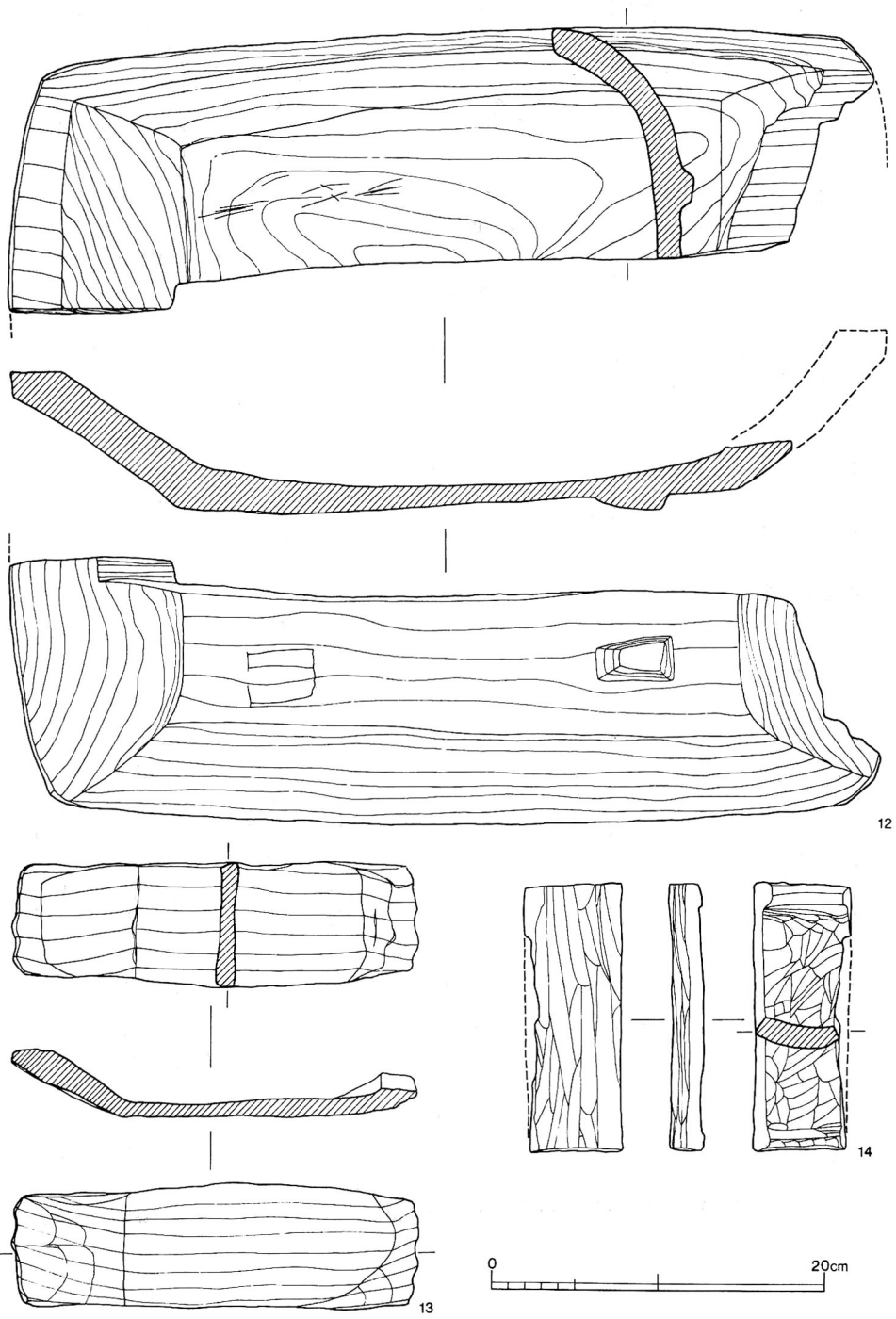
第 39 图 木器 实 测 图 (1)



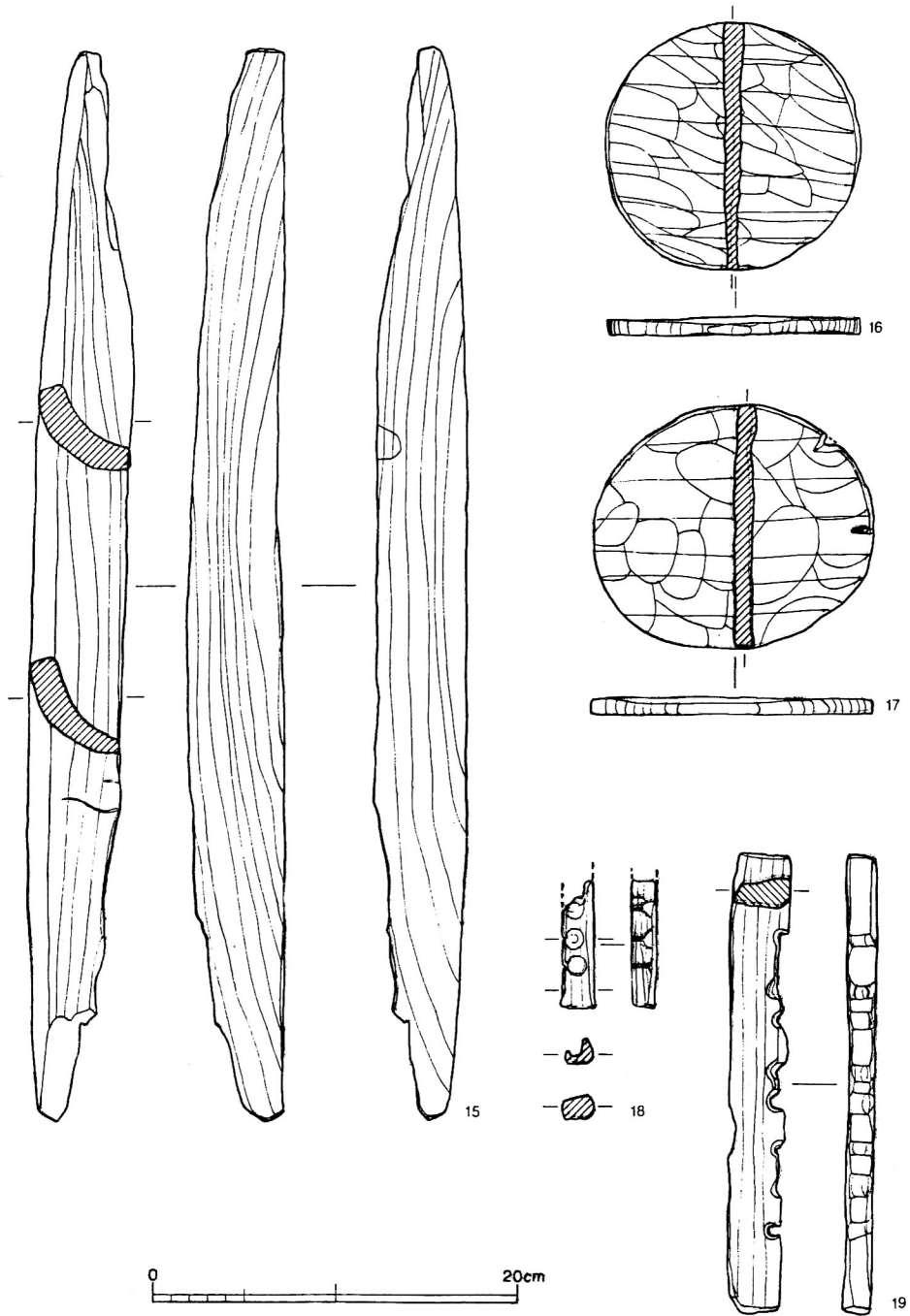
第 40 图 木器实测图 (2)



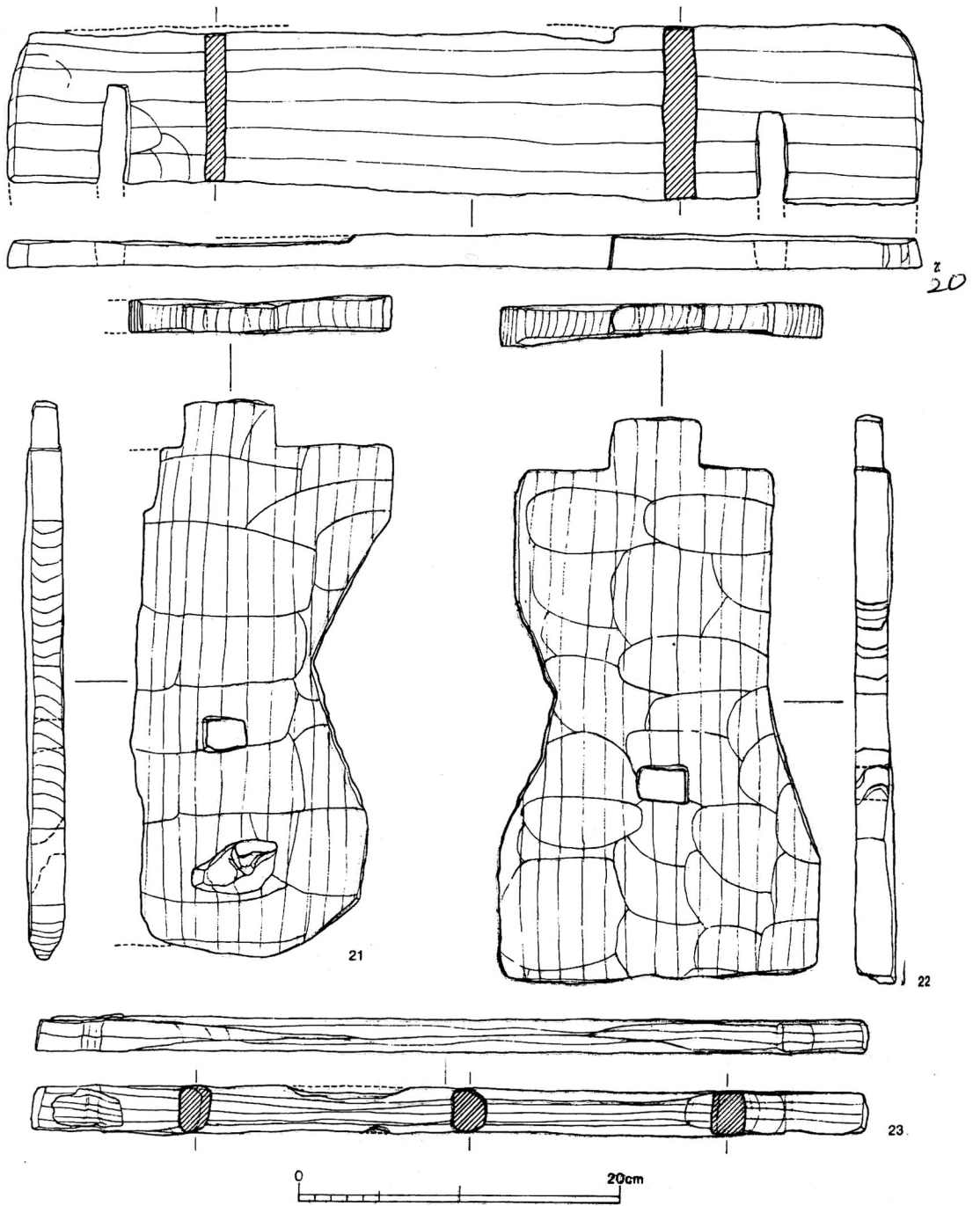
第 41 図 木 器 実 測 図 (3)



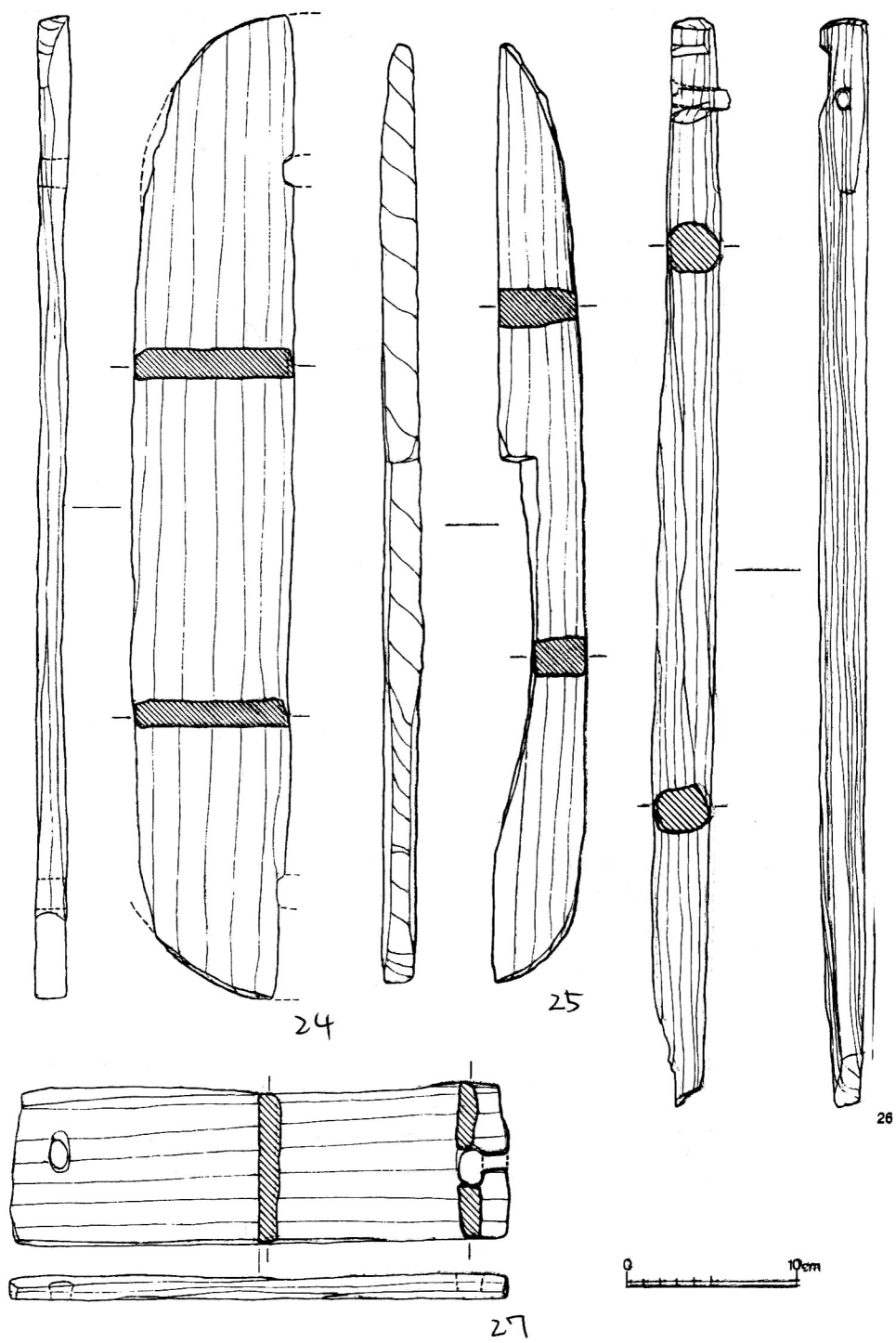
第 42 图 木 器 实 测 图 (4)



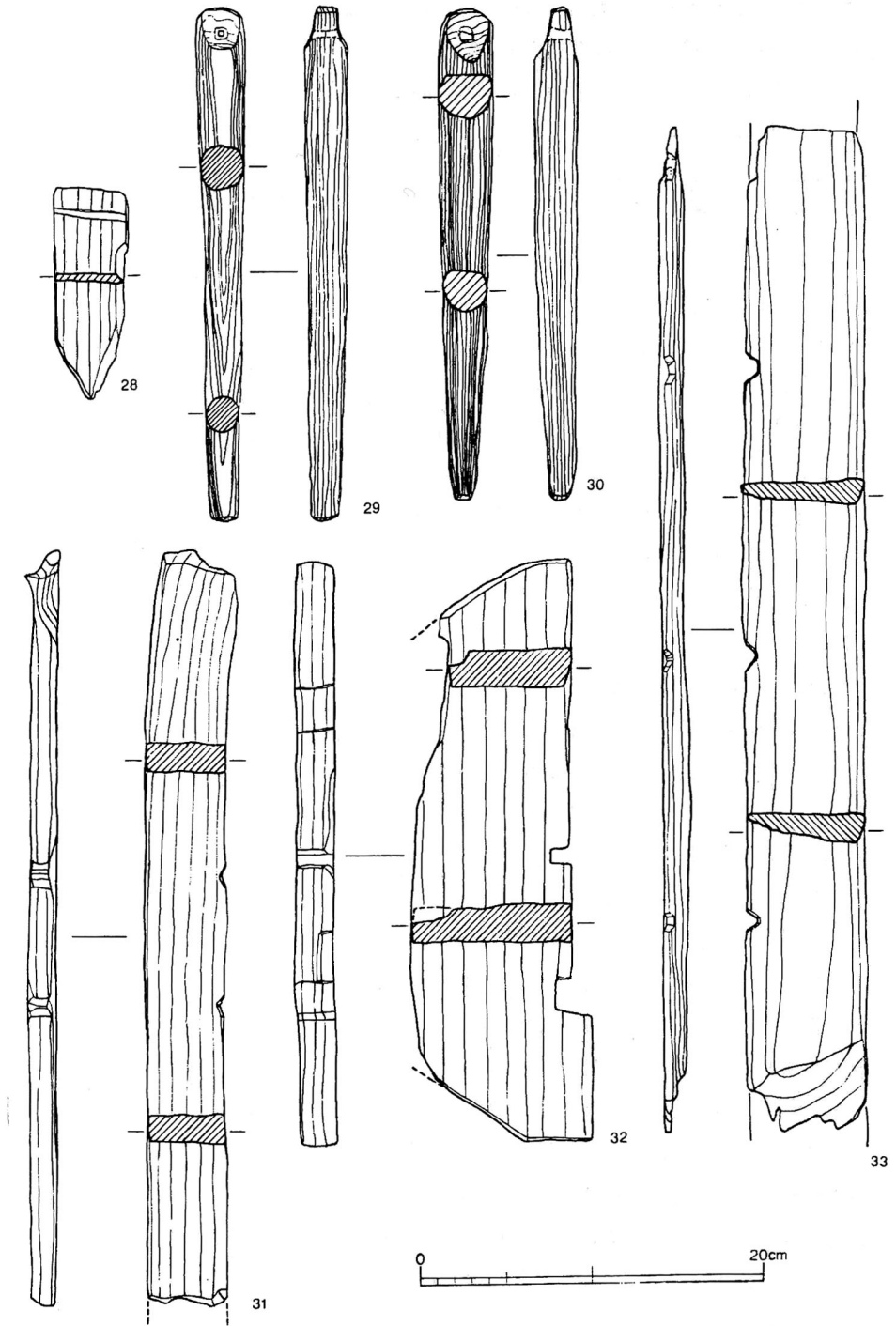
第 43 图 木器实测图 (5)



第 44 图 木器 实 测 图 (6)



第45图 木器实测图(7)



第46图 木器实测图(8)

(7)は剣形品と思われる木製品である。残存長29.4cmで基部から5.4cmのところまで柄部になっているものと思われる。ただ、典型的な剣形木製品ではなく、建築材の可能性も残されている。柄部には2方向からの孔が穿たれている。

機織具〔(8)(9)〕

有頭棒(8)と刀杼(9)の2点が出土している。(8)は残存長8.8cmで、頭部は3×1.8×1.4cmに削り出している。

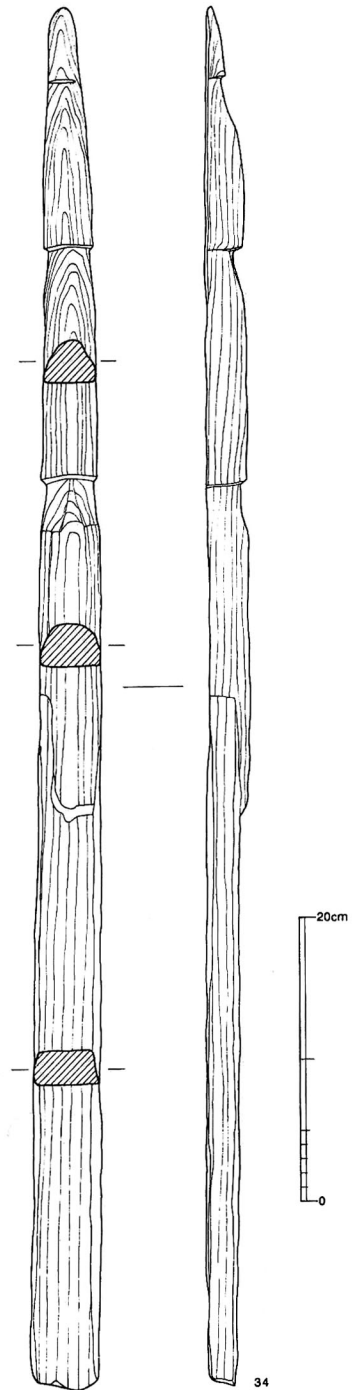
(9)は刀杼である。機織具本体の接合部が折れている以外は、完存している。本体の幅は47.8cmで2cm前後の突起が両方に付くものと思われる。中央が最も幅広く取り、両側を狭くしている。中央部分に開口部の幅3cmの袢り込みを有している。裏表を明確に表している。

容器〔(11)~(17)〕

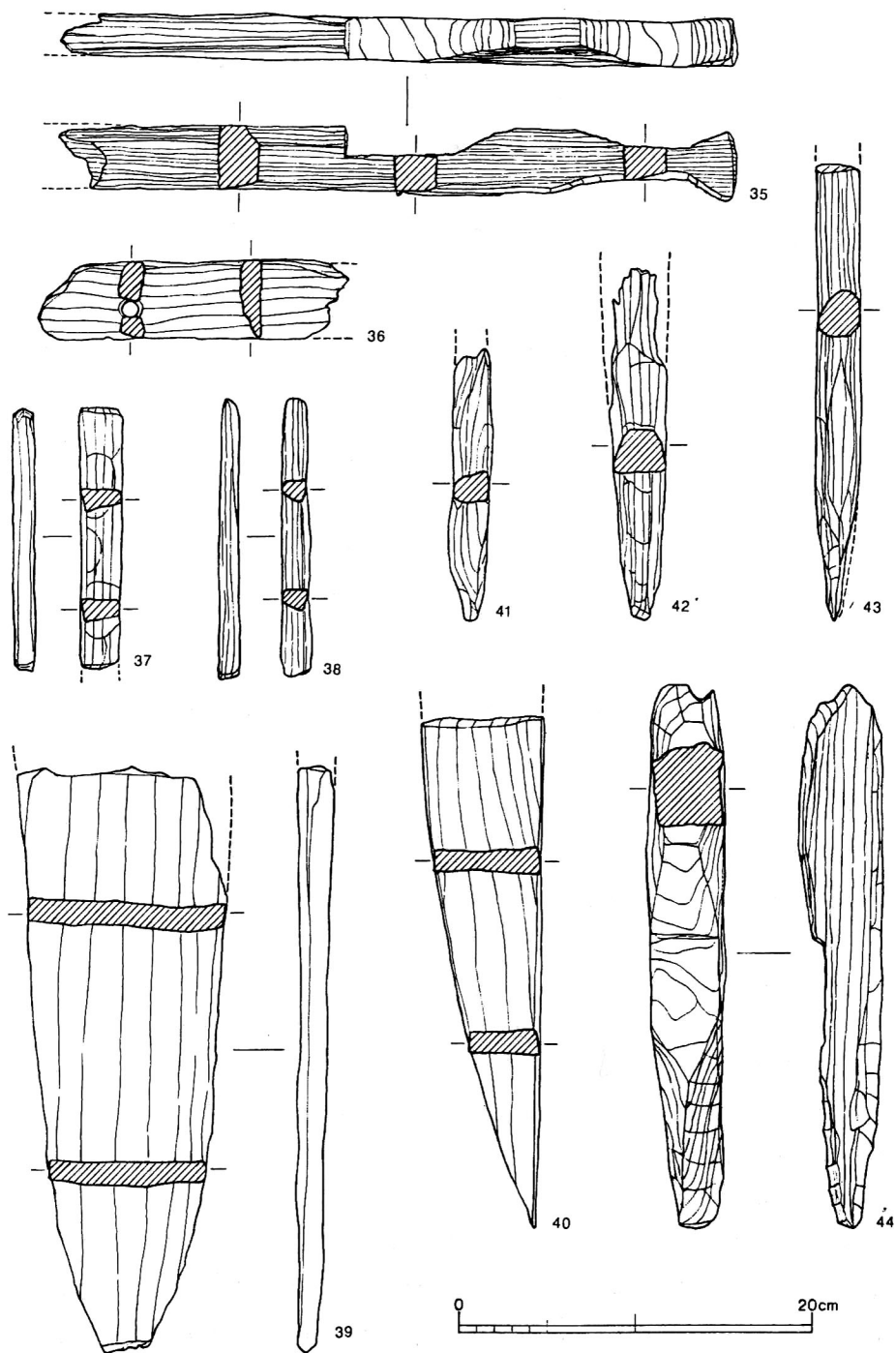
4種類の容器が出土している。盤は3点出土しており、小形のもの1点と大形のもの2点である。(11)はほぼ完形の盤で、46.0×26.1cmで高さ7.2cmを測る。口縁部端面は水平にしており、短辺は2.9~3.4cmと広く、長辺は1.0~1.8cmと狭くなっている。長辺中央が最も幅が狭くなっている。厚みは2.0~2.4cmで短辺口縁部が最も厚く作っている。内法の深さは5.0cmである。内外面ともに成形痕が顕著に見られる。平面形は中央部分の膨らんだ隈円の長方形である。脚は付かないタイプである。

(12)も大形の盤である。ほぼ半分しか残っていない。(11)と違って削り出した短い脚を持っている。長さ53cm前後である。(11)同様底部が断面薄く、口縁部が厚く作っている。脚は1cm余りで削り出す際の工具の痕跡が残っている。高さは脚も入れて10.2cmである。

(13)は小型の盤である。保存状態は良好でなく、全体像は不明である。残存長24.2cm、幅7.6cm、高さ3.6cmを測る。



第47図 木器実測図(9)



第48图 木器实测图(10)